シェルブリット I

ADEN ARABIE

幾原邦彦　永野護

角川文庫 17188

I
ADEN ARABIE

INTRODUCTION

遥かな未来。３つに分化した人類種。
進化。変化。人類の運命。
第一の人類、ジーンライナー。生きている宇宙船。人類史上最大のセンセーション。自分の意志で自分をデザインし、宇宙交易を独占する〝最も進化した人類〟。
第二の人類、ジーンメジャー。遺伝子的進化を遂げた人々。進化は富を呼ぶ。富は進化を助ける。さらなる優良な遺伝子を求め続ける特権的階級。
第三の人類、ジーンマイナー。恩恵にあずかれなかった人々。種としての能力進化を遂げていない最下層の人類種。

――そして世界の大部分を占めるのはジーンマイナーである。
進化した人類種、ジーンライナーの中でも、最も優れた＝最速の宇宙船、ローヌ・バルト。宇宙を高速長距離巡航するクリッパー。全長850メートルの14歳の少女。見る者を圧倒し魅了する生きた船。世界を二分する大企業、バルトライナー社の花形であり、象徴であり、吸引力でもあるこの「船」で、物語は始まる。

シェル（オルス機）

バルトライナー社の武装クリッパー、ローヌ・バルトに搭載されている航路索敵用船外ユニット、シェル（人型高機動戦闘兵器）の１機。現在のドライバはオルス・ブレイク。

オルス・ブレイク

19歳。ジーンメジャー、オルス・ブレイクとして、ジーンライナー、ローヌ・バルトに乗り組む。着任当初は火器管制員だったが、パートナーとも上司ともなるノーマ・クイックにより、強制的に危険な船外での索敵任務、シェルブリットの要員とされる

パイロット・スーツ

シェルブリット要員＝シェルドライバが航路索敵用ロボット、シェル搭乗の際に装着するスーツ。所属する船によりデザインは異なる。これはオルス・ブレイクのパイロットスーツ姿

Schell Bullet

ローヌ・バルト

遺伝子の発達により宇宙航行を可能とした第一の人類種。ジーンライナーのひとり。推定14歳。当代最速を誇る、長距離航行生体宇宙船。武装クリッパーで、性別的には女性

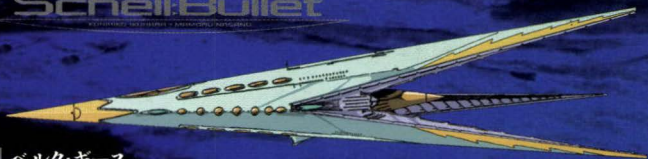
デルビーの私服姿

船内自室やオフの日（一般的にクリッパーの乗員は24時間体制のため、勤務は交替制）は自由な服装も許されている

ノーマ・クイック

25歳。ジーンメジャー。バルトライナー社の子会社、バルトカーゴサービスと契約するシェルブリット要員。元陸軍地上攻撃機パイロット。女性型だが非常に男性的な性格と振る舞いである

デルビー・アイバース

19歳。ローヌ・バルトの乗員。ジーンメジャー。C群管制官。オルスがローヌ・バルトに乗り組んでから初めて知り合った人間で、以降、オルスと親しくなる

Schell Bullet
ベルタ・ギース
ジーンライナー。バルトライナー社と勢力を二分するギースシッピング社に船籍を置く武装クリッパー。ローヌ・バルトの次に速い船。推定14歳の女性。ローヌ・バルトと最速を競って争う
ピナ・パワーズ
23歳。女性型のジーンメジャー。ベルタ・ギースのもうひとりのシェルドライバ。元海軍長距離侵攻戦闘団、攻撃型潜水空母のエースパイロット
レイモン・フレイ
28歳。男性型のジーンメジャー。元陸軍の精鋭パイロット。ギースシッピング社と契約し、ベルタ・ギースに搭乗するベテランのドライバ。典型的なジーンメジャーとしての容姿を備えている

シェルブリット I

ADEN ARABIE

幾原邦彦　永野 護

角川文庫 17188

僕は二十歳だった。それが人の一生で一番美しい年齢などとは誰にも言わせない。
一歩足を踏み外せば一切がだめになってしまうのだ。
恋愛も思想も家族も、大人たちの仲間に入ることも。世の中で自らがどのような
役割を果たしているかを知るのは辛(つら)いことだ。

ポール・ニザン『アデン　アラビア』

鳥は卵の中から抜け出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲するものは一つの世界を破壊せねばならぬ。鳥は神に向かって飛ぶ。神の名はアブラクサス。

ヘルマン・ヘッセ『デミアン』

CONTENTS

PROLOGUE

*バルトライナー社の最新鋭の宇宙船、*武装*クリッパー「*ローヌ・バルト」の航路上に何かあるのが発見されたのは、第三当直への交替が終了した直後だった。*宙港から*標準時間で百二十時間たったばかり、ローヌ・バルトは外宇宙に向けてまだ加速中だった。

　船の中央に位置する管制室は操舵（そうだ）、通信などを集中的に管理する天井の低い小部屋である。

「それ」を発見した管制室要員は、**ジーンマイナー差別の小咄（こばなし）にゲラゲラと笑いころげている最中だった。

　管制室の第三当直員の間では、勤務中に「上品ではない」冗談をとばさなければならないという暗黙のノルマがあった。勤務シフトの関係上、船長や航海長が管制室にいない場合が多い。彼らはそのチャンスを大いに活用していた。

「その男は*ジーンメジャーらしからぬことに、か…、ひでぇ話だな…」

　ジーンマイナーの管制員は笑いをこらえながら*統合レーダーコンソールに目をやった。

が、次の瞬間、彼の指は反射的に*宙域シミュレータへデータを転送するべくコンソール上を躍っていた。

照明のほとんどない管制室の中央にある宙域シミュレータがオンし、柔らかな光が室内に拡がり、室内の笑い声は瞬時に収まった。

*加速ベクトル表示の上に載ったローヌ・バルトの*可能機動領域を示す朝顔型の空間に、R面側から軌道を交差させるように接近する赤い点があった。何かがローヌ・バルトの航路に向かってきている…。

赤い点の上に表示されている文字を管制官が読みあげた。

「*アラート・フェーズワン」

「加速しているか」

最先任の二等航海士が尋ねる。

「加速してます。軌道も変更しています」

リアルタイムに可能機動領域が表示されている宙域シミュレータ上で赤い点の行動領域はローヌ・バルトの領域との重なりを大きくしつつある。

しかも、赤い点は加速ベクトルの表示を点滅させている。

あきらかに人工の飛翔(ひしょう)体である。

「アラート・フェーズトゥー」

二等航海士が宣言する。ジーンメジャーの二等航海士は*フロー言語に切り替えて船と短

い会話を交わす。
　ジーンマイナーの管制員にはその内容はわからない。が、それに気をとられている暇はなかった。
「さらに軌道を変更、航路襲撃パターンと相似しました」
「ローヌ・バルトは航路変更する意思がない」
　二等航海士は通常言語に戻って言った。それに応えて今度はジーンメジャーの操舵員がフロー言語での会話を船「ローヌ・バルト」と交わしはじめる。
　二等航海士は管制官に次々に指示を出す。
「ミスタ・ハラー、船長と航海長を…」
「ミス・アイバース、航路索敵準備」
「船長が管制室に入った時点でアラート・フェーズスリーを宣言する」
　二等航海士の身体からはかすかな不安の匂いがたちのぼっていた。
　その男はジーンメジャーらしからぬことに…。
　オルス・ブレイクはベッドに入ってまどろみかけたところを起こされた。
　若い甲板員がうるさいくらい小刻みにオルスの肩を揺すっている。
「起きてください、索敵要請です」
　甲板員の顔をぼんやり眺めていたオルスは、相手が放っている強い不安の匂いで目が醒めた。小さなベッドから身を起こし尋ねる。

「あれからどのくらい…」
「着艦後二時間、当直員交替直後です。船はまだ加速中で、航路前方に何かがあります」
何かが、と言ったところで相手の不安の匂いが強くなった。
甲板員はオルスと同じくらいの年頃のジーンマイナーだった。
マイナーは自分の匂いに鈍感だ。哀しいといえば哀しみの匂いを、楽しければ歓(よろこ)びの匂いを身体にまとう。動物のように…。
オルスはメジャーらしくしなければと自分に言い聞かせて、感情を抑制するようにして言った。
「ノーマは？」
「ハンガーで*航路索敵(シェルブリット)待機中です」
下着だけのオルスがシェル格納庫に駆けこんだ時には、ノーマのシェル*がカタパルトに通じるエアロックに装塡(そうてん)されようとしていた。
狭いエアロック内にまだ収まりきっていないシェルの機体に、金属の塊のようなロックドアが上下左右から鈍くうなりながら押し潰(つぶ)すように迫っている。
こうして外からカタパルト装塡を見ると、あまりいい気持ちがしない。丸みを帯びたシェルの体が無理やり金属の洞窟(どうくつ)にねじ込まれているようだ。それとも、新型のオレンジ搾り器か…。
複数のロックドアが次々に閉じられ、金属のきしみが室内に響く。帯電しているのか青

い火花が飛ぶ。

「クイック機、射点に」

デルビー・アイバース管制官の声が近くの甲板員のヘッドセットから聞こえる。

地鳴りのような重低音が響き、気体が吹き出す大音響が頭蓋を震わせる。裸足の足の裏がビリビリと痺れる。部屋そのものが今にも爆発しそうな音だ。

オルスは自分のシェルの前で整備員から洗浄したばかりのストラップを受け取り、手伝ってもらいながらそれを装着した。鼓膜を守るために整備員が予備のヘッドセットを被せてくれる。

オルスは自分のシェルを見上げた。

それは巨大な金属性の卵子が人間に分化しつつあるように見えた。

背骨を生やし、手足を生やした段階で自分自身の重さに耐え切れなくなり、そのままうずくまっている…。

古代の奇怪な潜水服、深海の蟹、有史以前の種族の眷属…。こいつは見る度に違った印象を与える。

頭と胸は区別できなかったが、先端部には触角のようにアンテナが伸びていた。今日のオルスには、まるで蛹から変態途中の昆虫のように見えた。

巨大で太い腕にはバルトライナー社の社章である放射状の螺旋が白で、その下に拳骨を図案化したマーキングが薄い黄色で描かれている。

複雑な曲面で構成された体は巨大な装甲板群が被いつくし、肩、腰には巨大なロケット＊モーターをまとっている。
その表面は磨かれた大理石のように輝いてはいたが、装甲のそばに立っているだけで押し潰されてしまいそうな重量感があった。
そういえば子供の頃、熱にうかされて見た夢にもこいつが出て来たかもしれない…。
オルスは初めてシェルを見る人間のように見上げ続けた。
存在が力そのものである重金属の巨人…。
何よりも強く…。
何よりも速く…。
無敵の…。
そうだ。
無敵の「勝利者」…。
部屋全体が鳴り響く大音響とともにヘッドセットからデルビー・アイバース管制官の声が聞こえた。
「クイック機、射出します」
現実に引き戻されたオルスの身体は、大音響のためにビリビリと振動している下着と氷のように冷たい床を感じた。
子供の頃の夢の巨人は消え去った。

目の前のこいつはまだ「勝利者」じゃない…。
「ブレイク機、カタパルト装填準備」
デルビーの声が聞こえる。
オルスの身体は機械的に反応して、シェルのコクピットに這い込んだ。
整備員の手がオルスをしっかりとコクピットにはめ込む。
コクピットが密封されて外音が遮断されてから、オルスは自分の身体が恐怖の匂いを発しているのに初めて気づいた。
いつからだろう？
もっとメジャーらしくしなければならない。さもなければ…。*
心の中の恐怖の根源さえもがそう告げている。
「オルス・ブレイク搭乗」
オルスの口は勝手に動いてそう言った。
「了解、船外作業の前に装備確認をします」
デルビーの声は確認リストを読み上げる。オルスはリスト確認に応える。
最後にデルビーの声が言った。
「ブレイク機、射点に」
薄暗い洞窟の中に押し込まれ、金属製の歯のようなロックドアが周囲に迫ってくるのを見ながらオルスは考えた。

船外作業。

確かにその通りかもしれない。

だが、これからオルスは船の長さほどもある電磁*パチンコで航路の前に投げ出され、「船外作業」をこなさなければならない。船外作業はたいていの場合、「航路索敵」任務、通称「シェルブリット」のことである。

さらに航路索敵任務の「敵」とは何かと言えば、ライバル企業のシェルだった。

企業間*の戦争というものに実力行使が含まれているとはオルスは夢にも思わなかった。

つい三ヵ月前までは…。

1

ローヌ・バルト

Verginity Balt

「君はローヌ・バルトの乗員？」
見知らぬ男に背後から話しかけられたオルスは軽い驚きを感じた。
連絡船のロビーに人影がないことを確認したはずだったのに。
スリット窓から目を男に向けると、男は船員風の身振りを交え、
「いや、邪魔して申し訳ない。君が熱心に船をみてるから…」
と、少し困惑したように言った。オルスは自分の警戒心が表情に出てしまっているのに気づき、急いで無表情の仮面を作った。
男は典型的ともいえるジーンメジャーだった。
いや、正確に言うと典型的な男性型のメジャーだ。
人工的にデザインされた遺伝子を持って生まれるジーンメジャーは、基本的には両性具有体といって男女両性の生殖器を持ち、中性的な容貌なのだが、さまざまな理由で在来種のジーンマイナーと同様の性差がある人々もいた。もちろん、そうした男性型や女性型のジーンメジャーも両性具有であるのだが…。
浅黒い肌、漆黒の髪を別にしても、この男には一目でジーンメジャーだとわかる独特の

優雅さのようなものがある。何が違うのだと問われてもはっきりとは言いようのないそれ…。
ジーンメジャーであるはずのオルスにはないものだった。
——「勝利者」の匂いだ…
オルスは苛立ちを感じた。
と、同時にその感情を無表情の仮面の下に上手に隠し込んだ。
子供っぽいと自分でも思う。
すべてを知り抜いているかのようなメジャーをメディアの中に発見したとき、あるいは何かを諦め悟ってしまったような態度をとりたがるマイナーの大人たちに接したとき、オルスは強烈な苛立ちを感じる。
それは瞬間的には殺意に近い感情だった。原始的で凶暴な大波が心の中で荒れ狂い、一瞬で消滅する。
理性はそれを抑えることができず、かろうじて隠し、取り繕うことができるだけだ。
「いえ、退屈してましたから」
オルスは心の中の嵐など存在しないかのようにそっけなく言った。
自分の言葉「退屈」は嘘だ。
オルスはこれから宇宙船の乗組員として初の乗船をするところである。緊張感は退屈な

どよせつけない。これまでも宙港に来たことはあったが、それはあくまでロビーまでである。乗船のため、これほどまでに宇宙船群に近付くのは初めてであった。オルスは初めて見る景色に夢中になっていた。
「そう、それじゃ俺たちは同志だな。俺の名は《メジャー》レイモン・フレイ」
フレイと名乗った男は癖のある片えくぼを作って、手を差し出した。
がっしりとした体格には威圧感さえ感じるが、柔和ないい表情がそれを感じさせない。
オルスは相手と握手した。大きな手だ。
「《メジャー》オルス・ブレイクです」
オルスは相手の健康的な浅黒い肌の色に気をとられた。オルスの肌は白い。
これだけはうまく胡魔化（ごまか）せなかった。
心のどこかで別のオルスが、うまくやれとささやく。
フレイはオルスのそばに来て、スリット窓をのぞき込んだ。
「だが…、ミスタ・ブレイク、あれを見て退屈できるとは、よほど贅沢（ぜいたく）に育てられたんだな」
窓から外を見ているフレイは体から歓びの匂いを漂わせている。
確かに窓から見えるものは壮観だった。
きらめく小さな光に包まれた船が見える。

信じられないくらい美しい船だ。
太陽の光を受けた船体は純白に輝き、流線型のラインが漆黒の宇宙から浮き出している。
それは、ただの流線型ではなかった。よく見ると、そのディティールにはどこか女性の身体を思わせるものがあった。いや、女性の身体というよりは少女の裸体…。
その流線型はまぎれもなく、処女の純潔の塊だった。
そのためか、初めて「あれ」を見たとき、オルスは衝撃を受け、動揺してしまったほどだった。宇宙船を見るつもりで窓をのぞくと、全裸の少女がそこに横たわっているのを見てしまったかのように…。
それは軌道ドッグに入渠(にゅうきょ)している宇宙船「ローヌ・バルト」だった。
彼女はジーンライナー船でクリッパー級の貨物船だ。*宙軍が使用している人造型タンカーよりも大きく、通常空間での速度でまさっている。
ローヌ・バルトは十数もの定期航路で速度記録を塗り替え、そのほとんどが記録更新の気配さえない最速のクリッパーだった。ジーンライナーの進化の究極ではないかとの声もある。
進化するジーンライナー。
そう、ジーンライナー船は生きている。
あれほど巨大なものが生物であるとは…。
ローヌ・バルトの腹の下に繋留(けいりゅう)されている二隻の小さな宇宙船はオルスが搭乗している

宙港からの連絡船*と同タイプのもののようにみえる。連絡船はローヌ・バルトのスタビライザー*の陰に隠れてしまいそうなサイズしかない…。

オルスはこのクリッパーにこれから乗員として乗り込もうとしている。初めての乗船だ。身震いするような経験だった。

「すごい美少女だな……。見るだけで罪悪になるくらい…」

フレイが感嘆したように言った。窓の側のバーにもたれかかっているフレイの横顔は心の底から驚嘆しているようにみえる。

オルスはその横顔の無防備さに少し呆(あき)れながらも、用心深さの上に無防備さをよそおう必要がある、と考えていた。隙のなさは結局、相手の注意を自分に向けることになる。オルスは空気のようなメジャーにならなければならないのだ。

「さっきから気になってるんだが…」

フレイがこちらに顔を向け言った。

「ひょっとして、君は男性名のミス・ブレイクなのか」

オルスは一瞬、相手が何を言っているのかわからなかった。が、かろうじて、こういう場合の慣用表現が出た。

「どちらでもけっこうです。でもわたしはミスタ・ブレイクですが」

「そう…、じゃ、やはり俺が邪魔したかな」

今度は本当にわからない。
オルスは相手の顔を見つめるしかなかった。
そして、相手の言葉を待った。
「いや、君の体から軽い怒りの匂いがするから」
気がつかなかった…。
だが、オルスは動揺することなくそれに答えた。
「いろいろと考えてましたから」
「そうか、素直にそれを信じるよ」
「……」
「俺がよくしゃべるのも許してくれないか。軍隊*にいたんだ」
オルスはどう反応すべきかわからなかったので、そのまま聞き手にまわることにした。
自分の感情を抑え込むようにしながら…。
「部下は全員マイナーだ。そいつらは喰(く)ってないときはしゃべってる連中で、その上、自分の体の匂いもわからないやつらだ。叱りつけたり、激励したり、気配がわからないから何もかも全部言葉にしてやらなきゃならなくてね」
うんざりしたような言葉とは裏腹に、フレイの表情や大仰な手振りはにこやかにオルスに語りかけてくる。
「俺はパイロットだったんだが、マイナー歩兵と一緒に蛸壺(たこつぼ)*を掘ったり、手榴弾(しゅりゅうだん)を投げた

りしなきゃならない事態が予想外に多くてね。ビスケットを分けあってるうちに*塹壕(ざんごう)のなかでジーンマイナー風味のジーンメジャーの出来上がりって寸法だ」
遺伝子操作された鶏「メジャーチキン」のCMコピーをもじっているらしい。
フレイは子供に話しかけているつもりだ、とオルスは感じた。
また、自分の中で小さな嵐が吹き荒れるのを感じたが、オルスはそれを抑え込んだ。
「大変でしたね。*メジャー議会の*派兵決議には疑問を感じますけど」
あっさりと言ってのけるつもりだったが、オルスの口調には堅いところがあった。それに精いっぱい背伸びするつもりで議会のことを持ち出したが、元軍パイロットに話すには穏当な話題ではないのに言ってしまってから気づいた。
が、フレイは、
「*交戦規則(ルール)が確立できないんで、議会は戦線からジーンメジャーの撤退を決めるらしいな。現地のマイナーどもに勝手にやらせるらしい」
と変わらぬ様子で返してきた。
子供扱いされていると感じたのは気のせいだったのかもしれない。
フレイのにこやかな表情からは何も読み取れない。
「ところで、君はあの船の乗員なのか？」
フレイの目に映る自分の姿について考えていたオルスはとっさに返答できなかった。
返事をしなければというあせりが身振りとなって言葉よりも先に出てしまう。

オルスは黙ったままうなずいた。
オルスは自分の身振りを子供の仕草のように感じた。
軽い屈辱、軽い失望、軽い怒りがわきあがって消える。
自分を見ている自分を見ている自分…。合わせ鏡のような呪縛にオルスはとらわれる。
だが、目の前のフレイは何も変わらぬ日常を続けている。
「そうか。俺は彼女に乗りたかったんだが、どうやらダメらしい…」
フレイは目を窓の外のローヌ・バルトに移した。
「報酬の面で折り合いがつかなくてね」
大人のジーンメジャーであることにうまく適応できない自分自身にとらわれたオルスは適当な返事をかえすことしかできなかった。
連絡船がローヌ・バルトに接舷するまでの間、オルスはフレイの話の聞き手にまわって時間を過ごした。うまくやっていく自信が急になくなって、不安感だけが大きくなってゆく。
窓の外のローヌ・バルトはいったん近付きはじめると、急激に大きくなりはじめ、もはやその全貌が窓枠に収まらないサイズにまで膨張している。
自分はこの凄い船に似つかわしい人物ではない。
そのことを目の前の「戦争から帰ってきた男」「大人のメジャー」に思い知らされたよ

うに感じていた。
自分にできるのだろうか。この男のように。
オルスの理性はやるしかない、戻れないと告げていた。
「《メジャー》オルス・ブレイク」の名を手に入れ、それを手放さない決意をした時から確定してしまったことだ。
フレイの話にあいづちをうっているうちに、いつの間にか連絡船はローヌ・バルトに接舷していた。どこかにあるスピーカから野太い男の声が接舷完了と搬入作業の開始を告げている。
フレイとはキャビンに戻る途中で別れた。フレイは言った。
「機会があればまた会えるだろう。俺はこれから最後の営業活動だ」
そして、最後に言った。
「君もしっかりやれ、ジーンメジャーであることを忘れずにな」
オルスにとっては意味深長に聞こえる言葉だった。
オルスは巨大なコンテナ類が搬入されるわきを歩いてローヌ・バルトに乗船した。
バルト側で書類を搬入係官らしいマイナーの男に提示すると、予想よりも無愛想な態度で船内で事務手続きを済ませるように言われた。係官は八本足*のリフトを避けながら通路に向かうオルスの背中にこうも言った。

「このガキ、搬入路を歩くな！　俺は掃除なんかしたくないからな！」
どうやら警告してくれているらしかった。
通路に通じる隔壁にたどりついてドアの横にあるボタンに触れると、ドアは音もなく開いた。その奥に伸びる通路は、人間の通り道ではなく何かのダクトではないかと思えるほど狭く薄暗かった。
オルスは周囲を見回してみた。他に通用路にみえるところもない。おまけに搬入係官がまだこちらを見ているのに気がついた。手にしたボードの角で太股(ふともも)を打ち付けている様子は遠目に見てもイライラしているようにしかみえなかった。
しかたなく通路にもぐり込むと、背後ですぐにドアが閉まった。あの搬入係官がリモコンで閉じたように思えた。
手にした小さな鞄(かばん)さえ邪魔に感じるような通路をしばらく進むと、路が二股(ふたまた)に分かれているところにぶつかった。行き先を示すような文字はなく、Uの字型の分岐は平行に奥に伸びている。両方とも同じ方向に向かっているようだ。
あの男の話では一本道だったはずだが…。
どちらに行くべきかわからなくなったオルスは手がかりを求めて再び周囲を見回してみた。
その結果、分岐のつきあたりの壁に小型の発光素子が二つ並んで取り付けてあるのを発見した。右側が点灯している。

だが、なんの表示もないのでそれが何を意味しているのかがわからなかった。
何かの啓示のような発光素子を前にして、しばらく迷ってから右側の通路に入り込んだ。
この通路を進んでいくと向こうからも人が歩いてくるのにでくわした。
こちらに進んでくる男はオルスに気づくといまいましそうに舌を鳴らしてから、道をゆずるようにして壁を背にした。男は簡易気密服のような作業服を着ていたので、体がぶつからないようにすり抜けるのもやっとのことだった。
ぶつぶつ言いながら歩き去る男を背にしてしばらく進むと、通ってきた通路が別の通路とつながって一本の通路になっているところに来た。合流している別の通路は先ほどの分かれ道の左側のようにも思えた。そこにも発光素子が二つ並んで取り付けてあったが、今度は両方とも点灯していなかった。
そこからすぐのところに二人並んで歩けそうな通路と目指す事務オフィスがあった。
事務オフィスはマイナーの女性係員一人だけの小さなものだった。
オルスがバルトライナー社の契約シート*を見せ、名前を告げると係員はこう言った。
「私に自己紹介しても無意味ですよ。私は宙港の派遣会社から来ている人間ですから。バルトライナー社やこの船とは直接関係ありませんし、出港前には下船して他の船のオフィスにつめてますから。それに私、結婚していますの」
係員はオルスの契約シートをリーダーで素早く読み取らせると、目の前で再生機*に捨て

てしまった。大切に持参した契約シートが再生機の中でこなごなに噛み砕かれる音をオルスは呆然と聞いていた。
「乗船は承認されました」
彼女は事務的に言った。
そして、端末のコンソールに向き直って、別の仕事を始めてしまった…。
オルスがこのまま立ち去るべきなのかどうか、これからどうすればよいのか質問すべきなのではないかと思い悩み口を開きかけると、その先を制するように係員が言った。
「もう少しお待ちになれば非番の船員がここに来ると思います」
「……わかりました」
「他に何かご質問は？」
係員の作られた笑顔に気圧されながらもオルスは質問してみた。
「…通路の分かれ道についてる信号のようなものはなんですか」
「点灯している側に人がいます」
係員は簡潔に答えた。

しばらくして事務オフィスに現われたのはオルスと同じ年頃の赤毛の女の子だった。
彼女は小さなベンチに腰掛けているオルスを見ると歩み寄って来て、手を差し出した。
「ミスタ・オルス・ブレイク？」

オルスは反射的に立ち上がって、その手を取ろうとして膝（ひざ）に置いていた鞄を落としてしまった。何を最優先にすべきかを一瞬迷い、

「《メジャー》オルス・ブレイクです」

と答えてから彼女の手を取った。

彼女は握手したまま、左手で床の上の鞄を拾い上げ、鞄をオルスに渡しながら言った。

「あなたを迎えに来ました。ローヌ・バルトでC群管制官*をしている《メジャー》デルビー・アイバースです。よろしく」

オルスは右手で鞄を受け取ろうとしてからデルビー・アイバース嬢の手のおかげで阻止され、かろうじて左手で受け取りながら答えた。

「…どうぞよろしく」

窮屈な姿勢で答えた途端、彼女が右手を離したので、オルスは腕を前に交差させた間抜けな格好で置き去りにされた。

見ると、デルビー・アイバースは既に事務オフィスから出ていこうとしている。ドアから係員に挨拶（あいさつ）する。

「ミセス・カサーレス、どうもありがとう」

「どういたしまして」

女性係員が答えた。

オルスはあわててデルビーの後を追って外に飛び出した。

デルビー・アイバースはオフィスのすぐ外で待っていた。彼女は外に飛び出してきたオルスを黙って見ている…。
オルスは自分のあわてぶりを取り繕うために何か話す必要を感じた。
「ミス・アイバース、彼女……ミセス・カサーレスはいつもあんな感じなんですか」
デルビーは即答した。
「勤務時間外だからデルビーでいいわ。ミセス・カサーレスとは初対面。でも、ほら」
デルビーが指さした先にはオフィスのドアのネームプレートがあった。
「外から来ている人は紫色のネームプレート。だから、紫色のプレートは必ず読む必要がある。それから『あんな感じ』ってどんな感じなのかわからないわ」
オルスは先ほどのやりとりを話した。
「よくわからないけど、派遣会社のマニュアル通りじゃないかしら。でも、質問を受け付けてくれたのは彼女の好意だと思うけど…。忙しい職だから自分の名前を憶えてくれない人にはもっと冷たくするわよ、ふつう」
オルスは忙しい職と言われて、初めて、音もなく端末にデータを入力していくミセス・カサーレスの指のスピードの意味に思い当たった。あれを一日続けると大変な激務かもしれない…。
デルビーが歩き始めたので、オルスは黙って彼女についていった。
歩きながらオルスはローヌ・バルトに乗船してからの自分と、自分には見えていなかっ

たものについて考えていた。
　前よりも広い通路に出たところでデルビーが言った。
「この船は大きいけど、地上にある街ほど大きいわけじゃない。だから無駄なものはないし、通路の連結は比較的簡単に憶えられると思うわ。まず手順ね。あなたの寝床(ベッド)を中心に広い通路と使用頻度の高い通路から憶えて。コツは道順の暗記じゃなく雰囲気で憶えること」
「雰囲気？」
「船内通路は全部異なるデザイン*がされてて、ジーンメジャー用に匂いもついてる。不気味な通路や無闇にやかましい通路なんてのもあるけど、それもデザインよ。いったん憶え始めるとあっという間に艦内マップが埋まって、全通路が把握できるようになっているの」
「でも…、そういうデザインって無駄なものじゃないんですか？」
　前を歩くデルビーは横顔を見せて言った。
「あなたの上司じゃないから、堅苦しいしゃべり方しなくていいのよ」
　デルビーの言葉「あなた」を聞いてオルスはあることに気づき、言った。
「オルスでいいよ」
　それを聞くとデルビーはこちらに向き直り、後ろ向きに歩きながら笑いかけた。唇の両端をキュッとつり上げる愛らしい笑い方だった。

ジーンメジャーらしい健康的な褐色の肌に対して明るい瞳と唇からのぞく白く小さな歯が映えてみえる。彼女の容姿と利発さを感じる元気の良さを見ながら、この娘がメジャーでなければな…、とオルスは無意識に考えた。

「デザインは、人工物の部分はローヌ・バルト、そうでない部分は彼女のご両親よ。必ず何かの副産物を利用してて無駄なものなんてないわ」

そうだった。ローヌ・バルトは武装クリッパーであると同時に人間でもあるのだ。そして、彼女が所属するジーンライナー種はデザインできないものがないと言われている。みずからの遺伝子さえデザインするのだ…。

通路が次の交差点にさしかかり、隔壁の一部らしい段差が近付いて来た。デルビーはまだ後ろ向きに歩きながらオルスの顔を見ている。

「あっ、そこ」

デルビーはオルスの声を聞くまでもなく、後ろ向きのまま通路の段差をスイッと飛び越えた。

「これもデザインよ。障害物の周囲には必ずヒントがデザインされてるの」

オルスは周囲を見回してみた。が、それらしいものはどこにも見あたらなかった。

オルスは途方にくれてデルビーを見た。

デルビーは微笑むのをやめて前に向き直った。彼女を前にして、二人は乗船する時に通ったような狭い通路に入った。

「『規範(コード)』、或(あ)るいは『規則(ルール)』を知らなければ駄目なのよ」
デルビーが前を向いたまま言った。
「この船のデザインの規則性(ルール)のこと、だよね」
「それもあるけど、目に見えないこの船だけのルールみたいなものもあるわ」
オルスは通路についていた信号のような発光素子のことを考えた。あれも目に見えるものだけでは理解できないものだった。
「この船に乗船してからなんだか急に自分が間抜けになったような気がするでしょ？」
デルビーに言われてオルスは思わずうなずいた。相手には見えないのに…。
「私もそうだった。つい最近の話よ」
彼女が見せた横顔には悪戯(いたずら)っぽい笑みが浮かんでいる。
「ローヌ・バルトは無愛想で、不親切で、ルールを知らない人が困ってキョロキョロしているのを見るのが大好きなのよ。きっと彼女、楽しそうに笑ってるんだと思うわ」
「じゃ、ひょっとして、僕が乗船してからずっと、ローヌ・バルトは…」
「見てたと思うわ。あたしの場合、コンテナを運ぶロボットリフトに轢(ひ)かれそうになって叱られて、迷路みたいな通路で迷って、乗船登録のオフィスでかなり待たされた。乗船登録のオフィスの不親切で無愛想なマニュアルは彼女が書いてるのかもしれないわね」
楽しげなデルビーの言葉はオルスを不快にさせた。
「それもこの船のルール…なんだ」

「そう、あたしもしてあげたでしょ。新人歓迎の挨拶。事務オフィスで握手」
オルスは握手しながら左手で鞄を受け取ったことを思い出した。
「君はわざと、あれを…」
「半分は即興だったけど…、昔のヴィデオグラムのコメディで見てから一回やってみたかったの」
「………」
「怒らないでね。これは新人歓迎のルールでもあるし、テストでもあるのよ。コメディ風味かもしれないけど」
「テストって…。乗船登録は済ませたのに」
「オルスとバルトライナー社の契約に変更はないし、いくら変な行動をとっても契約が破棄されることもない。ただ、ローヌ・バルトは誰がどんな風に『隠されたコードをデコードする』か、どんな風に『ルール』をとらえ、それを守っていくのかを見るのよ。そして、何もしないわ。ただ、見ているだけ…」
さっさと歩いてゆくデルビーの肩ごしに通路の分岐点が見えた。例の信号も見える。
「難しいな…。社会生物学みたいだ」
「どっちかといえばハッキングね。応用と実践のゲームよ」
デルビーはそう言うなり信号の素子が光っている側の通路に入っていった。
「デルビー、そっちは人が来てる」

「知ってるわ」
オルスは信号の前で立ち止まったが、デルビーは振り向きもしないで、
「置いてくわよ」
と言って進んでゆく。結局、デルビーの後を追うしかなかった。
デルビーとオルスは狭い通路の中で、向こうからやって来る作業服の男と出会った。男はデルビーと当直や出港予定の話をした後、オルスに紹介された。
作業服の男とすれちがってからオルスは尋ねた。
「どうして人がいる側の通路を使ったんだ?」
「『ルール』を破るのを見せるためよ。よく聞いてね。この船のルールは人に聞くだけじゃなく自分でも見つけなきゃならない。ルールは守るためにあるんじゃなくて利用するためにあるのよ。あなたならわかるでしょ?」
オルスはデルビーの背中を見つめた。
どういう意味で言ったんだろう…。
オルスはつとめて冷静を装った。
「そうかな、破るためにあるんじゃルールとは言えないと思うけど」
「破るためじゃないわ。利用するのよ。確信はないけど、ルールの変異、シフト、意味の震えは期待されているのよ、ローヌ・バルトに…」
「人のいる通路に入ってゆくのとどういう関係があるの?」

デルビーは得意のバックステップに切り替えて言った。
「名前を憶えてもらったわ。この船で唯一の十代の女の子ですもの。こういう逸脱は期待されていることだし、許容範囲よ」
「なるほどね…」
オルスは無表情の仮面で目の前の少女に接しながら、自分がたまたま彼女と同年代であったことに感謝していた。もし、デルビーのことを年端もいかない小娘だなどと見くびっていたら、見かけによらない利発さに虚をつかれてボロを出していたかもしれない…。
デルビーは無邪気にも見える笑みを浮かべてオルスを見つめている。
が、見た目ほど彼女は単純じゃない。なにしろ、最速のジーンライナー船の乗員であり、ジーンメジャーなのである。
デルビーを迎えによこしたのもローヌ・バルトなのだろうか、とオルスは考えた。

宇宙船内には実質上、夜がない。
一日のサイクルは標準時間をもとにした三交替制の当直で成り立っている。
結局、「その日」は寝床に案内してもらって、共同浴場の利用方法と食事の受け取り方を教えてもらって終わってしまった。デルビーの当直時間が迫っていたのだ。
鳥の巣箱のような個室の前で、オルスは自分の仕事の内容について初めて聞くことになった。

「オルスはあたしと同じC群管制所管で、職掌は火器管制官補。勤務先は火器管制室。この部屋に近くて良かったわね」
「火器管制？」
「そう、武装クリッパーだもん。最終兵器*くらい付いてるかもね」
オルスは、民間の貨物船にそんなものあるわけ…、と考えてからデルビーの顔を見て、黙っていることにした。冗談かもしれないし、そうでないとも言い切れなかった。
ジーンライナー船が何を装備しているかは誰も正確なところは知らない。
「乗船から二十四時間以内に一回顔を出さなきゃいけないのを忘れないでね。守秘義務があるから、いろいろと面倒な手続きがあるわよ」
別れる時にオルスはデルビーに礼を言った。
「本当にありがとう。いろいろ教わって助かったよ」
「義務でもあるし、ちょっとした好意みたいなものだから気にしないで。それに、あたしに礼を言うんだったらミセス・カサーレスのことも忘れるべきじゃないわよ。それじゃ、また」
手を振ってデルビーと別れた後、オルスは自室に入った。
個室にはベッドと作り付けの机に小さなキッチンが付いていた。通気口がなければ窒息してしまいそうな狭さだ。
オルスは先に来ていた荷を広げて、仮眠をとってから火器管制室に行くことにした。標

準時間ではすでに真夜中になっていたのだ。デルビーの言う通り、初対面の相手との出会いは『制御されたトラブル』の連続になりそうだった。が、そういうルールで事が運ぶとわかってさえいれば、それをうまく乗り切る自信が出てきた。

ベッドに横になったオルスは長く感じた今日一日のことを考えた。

今日の朝はやくにはまだ地上にいたのだ。衛星軌道上のクリッパーにうまく乗り込んだという実感はまったくわいてこなかった。

それにわからないことはまだたくさんある。デルビーや連絡船のあの男の言葉についても考えなければならないだろう。やはり、肌の色はなんとかしなければならなかったのだろうか？

宙港から戻ってきた船長パースウォーデンは、航海長ノヴァーリスから索敵要員(シェルドライバ)のノーマ・クイックを船長室に入れた事を聞いた。

「索敵関連の話か」

船長の問いに航海長は肩をすくめた。

「私は部屋から追い出されましたから」

「半分はプライヴェートの話だからな。ミスタ・フレイはどうなった？」

「契約はなされませんでした」

「本社の意向があるからな。だが、惜しい人材だ」

「腕はいいようです。支局調査部*が確保しろとせっついてましたから」
パースウォーデンは管制室の椅子に腰掛けた。
「私が最後にローヌと話したのはいつだったかな…」
「ノーマの件でしたから、一年たちますね」
「ずいぶんたつな…」
「うまくやっている証拠ですよ」
それについてはパースウォーデンにも確信はなかった。

ローヌ・バルト各部解説

船体(キャラック)

砲弾型の船体はジーンライナーの中でローヌ・バルトだけの特徴である。キャラックと呼ばれる船体にはほとんど外板の継ぎ目らしいものはない。絹のようななめらかでやさしい光沢をもつ船体が継ぎ目なく広がっている。この船体の各部から超高速航行、カーニハンドライブに移るときフルレット・フォーンが後方に流れていく。フルレット・フォーンを形成する「ヒートファイレ」は船体そのものから飛び出してくるので、ヒートファイレ放出口などはまったくない。詳しくは巻末「用語事典」のジーンライナーを参照。

後部デッキ

ここはカッターや輸送船のベイとなっている。奥にドックがある。プラズマ・ロケットモーターが稼働中は使用できず、停泊時のみの搬入口である。メインデッキとはつながっている。

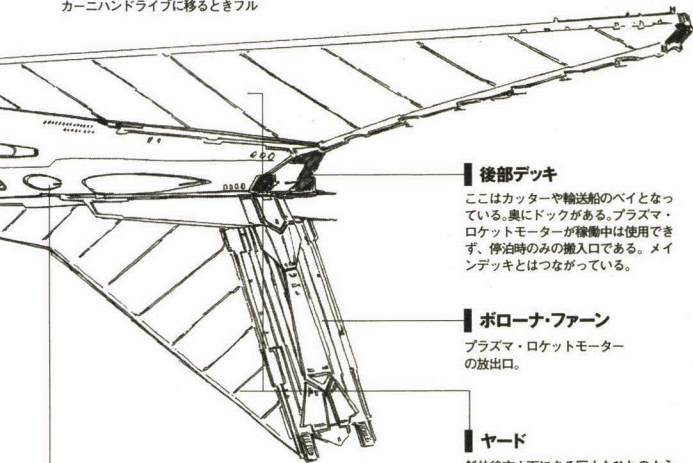
ボローナ・ファーン

プラズマ・ロケットモーターの放出口。

ヤード

船体後方上下にある巨大なひれのようなものがヤードと呼ばれるカーニハンドライブのモーターである。通常の巡航ではヤードの後ろにある「ボローナ・ファーン」が振動して移動する。フルレット・フォーンが発生して「プラズマ・ロケットモーター」の強力なエネルギーが放出される。ヤードとは帆船の帆を吊り下げ、支える指示棒のこと。

下部メインデッキ(オルゴンボックス)

ここからシェルや戦闘艇が発進していく。奥には巨大なエプロンがある。冒頭プロローグのシーンは、ここにあるオルゴンボックスから始まった。詳しくは後述。

先端衝角(ビークヘッド、もしくはラムトップ)

先端が尖っているから速いというわけではなく、この衝角にはジーンライナー、ローヌの最も重要な感覚器官が集合している。実際にこの部分には立ち入れる者はなく、フルレット・フォーンを出しながら姿を変えて航行しているときでも、ここだけはそのままの姿で突き出ている。

外部認識器官(フォクスル)

ビークヘッドのすぐ後ろにある楕円がフォクスルと呼ばれる管制器官になる。フォクスルは帆船用語で「船首のやぐら」でその名の通り、このすぐ後方にジーンメジャーやジーンマイナーのブリッジがある。外部感情認識ポイントとして、ローヌの「ご機嫌」状態を示すところでもある。

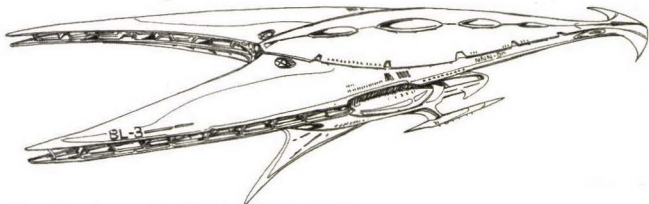
船体の楕円(バルジ)

一見船窓に見えるがこれはローヌの船体アクセスベイ。メインデッキからも貨物などの搬入は出来るが、ステーションに横着けしたときはこちらのベイを開いた方が早い。また、パルスビーム砲などもここに装備されている。バルジは船体の出っ張り、膨らみを言うことばである。宇宙空間では物体の大きさがつかみにくいので一見これが船体の窓なのかと勘違いしてしまうが、メジャーやマイナーなどの人間が使う本当の窓は船体に点々とついている小さな穴がそうだ。

ニューロン光線砲

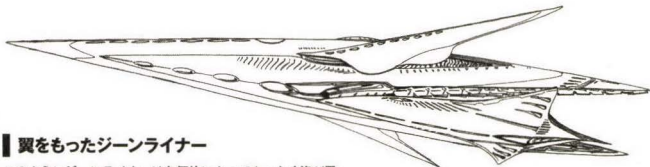
ローヌはこのほかにもエルマー社のパルスビーム砲をもっているが、このニューロン砲は砲弾でいうところのHEAT(ヒート)光線ともいうべき粘着光線砲でBVR(認識しているが射程外、もしくは効力低下レンジのこと。ビヨンド・ビジュアル・レンジというミサイル用語)戦闘領域時に柔軟な対応がとれる。威力は非常に強力。ジーンライナーの装甲を打ち抜くことができる。

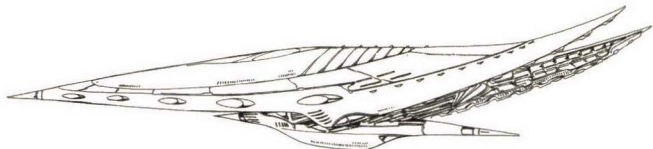
ジーンライナー

人類の進化形態の頂点にいるのがこのジーンライナーなのだろう。 物語に登場する「ローヌ・バルト」や「ベルタ・ギース」以外にも多数のジーンライナーが就航?し、その優雅きわまりない姿を宇宙に漂わせている。

BL-3のテールレターを打たれたジーンライナー

このジーンライナーは後部ボローナ・ファーンが2段になっているのがわかる。彼らもその進化と方向性にいろいろな試みをしているのがわかるが、「ローヌ・バルト」の砲弾型やこの船に見られる紡錘形の姿はあくまで停泊中の巡航スタイルで、超高速巡航時にはヒートファイレと呼ばれるオーロラ状の物質が船体から飛び出し、ジーンライナーの特徴である「フルレット・フォーン」をたなびかせながら不定形船体となる。あまり多くはないがこういう番号を打たれたジーンライナーも存在する。ジーンマイナーが識別できるようにつけられたものなのだろう。ジーンライナーが船首あたりにもつ楕円のバルジは透明フードを内側から金コーティングしたように見える。透けているようにも見えるし、金属の固まりのようにも見える不思議なテクスチャをもっている。 これらはジーンの体外感覚器官である。

フルレット・フォーンを放出しながら超高速巡航をするBL-3

フルレット・フォーンはその速度にもよるが、最大地球と月の10分の1ほどの長さになることも確認されている。だが、それがジーンライナー達の本当の能力を出し切っているのかどうかは、まったくわからないのだが……。深海域の発光するクラゲのような美しさである。このフルレット・フォーンを形成するヒートファイレこそがジーンライナーのすべての能力を決定するもので、生まれてすぐに高速巡航~カーニハンドライブに移ったとき性能のほとんどが外見からわかってしまうというものでもある。しかし、ヒートファイレの形状やその伸び方よりもジーン自身の航行方や思考、そして後に登場する「シェル」によって大きくクリッパーレースの行方が左右されることになる。クリッパーレースは「ドッカンレース」とは違うのだ。「ローヌ・バルト」と「ベルタ・ギース」はもっとも強力なヒートファイレを放出し、フルレット・フォーンを引いて騎行する姿は宇宙空間に流れる色とりどりの羽衣のようであるという。

翼をもったジーンライナー

このようにジーンライナーは各個体によってまったく姿が異なり、おのおの特徴ある船体、いや、容姿をしている。後述するジーンライナーではない船、つまり戦艦や輸送船などとはまったく次元の違う形態をしている。このジーンライナーもそうだが、下部に船体からはオフセットされて第2船体のようなものがついているのを多く見かける。大体においてこれは貨物や物資の搬入口であり、前方はエプロンになっていて艦載機やシェルの打ち出しベイをもっている。

フィンが跳ね上がったジーンライナー

非常にまとまった形をしていることから、最近のローヌ・バルトなどに近い構造をもつジーンライナーかもしれない。今回見られるジーンライナーの船体は皆、紡錘形の尖った衝角（ラム）をもっているが、ほかにも平べったいお盆のようなジーンライナーや、ひょうたんのような形をしたジーンライナーもある。細部はほぼ「ローヌ・バルト」と同様のディティールであると思われる。

クリッパーレースについて

クリッパーレースとは中世の大航海時代、バイキングの船や、南洋のガレー船がそれぞれオールで漕いでいたものを帆船にし、それぞれの造船技術を高めた。この後、ここから生まれた全装帆船（1枚でなく複数の帆をもつ船）がキャラックで、有名なバスコ・ダ・ガマやコロンブスの「サンタ・マリア」などはすべてこのキャラック船である。とは言ってもこの時代の帆船を指すことばは非常に多く、一概に帆船すべてをキャラックと呼ぶのは正しくはない。ジーンライナーの船体を技術者たちが「キャラック」と呼ぶのにはこういったいきさつがあるのだ。 その後16世紀に入り戦闘力をもったガレー船（軍艦、戦闘艦）とこのスピードをもったキャラック船が合体して「ガレオン船」となり、この高速武装船（当時としては）で東洋や南米の特産品を運んだ。これらの船を人々は「クリッパー」と呼び、積み荷をいかに早く持ち帰るかという速さを競ったのが「クリッパーレース」である。これは18世紀まで続いた。 ジーンライナーがクリッパーと呼ばれるのはこういう由来があったからにほかならない。ローヌ・バルトが最新の航続力と速さ、そして最高の戦闘能力をもっていることもガレオン船とまったく同じだ。

2

シェル

Schell

オルスが乗船して三日後、ローヌ・バルトは宙港*ポート・クレアから出港した。
積荷は機械部品、*データボックス、*自立型軍用コンテナ、*冷凍された脊椎（せきつい）などだった。
目的地は*ポート・リヴァプールで、宙港に提出されたシートによると航海所要日数は百二十標準日となっている。
オルスの職場である火器管制室は、ローヌ・バルトのほぼ中心に位置する中央管制室からワンブロック外側に位置している。
「ブロック」は隔壁で区切られた領域のことで、さまざまな容積のものがあり、一般に中央から外側に向けて容積が大きい。
すなわち、最深部の中央管制ブロックが最小で、外縁部の非与圧カーゴブロック群が最大のものだ。各ブロックは*半自立型の生命維持機能を持ち、隣接するブロック同士が相互に相手を補い合っている。
この、ゆるやかに結合し自立した数ブロックの単位に「管制区」「貨物区」などの名前が付いている。なかには「ヌーディストビーチ」だの「*オルゴンボックス」「第四エルサレム」という妙な名前もあったが…。
出港までの三日は迷路のような通路と各ブロックの配置を憶（おぼ）えることがオルスの仕事だ

った。
少なくとも、それが火器管制室長であり、オルスの上司であるミスタ・マウントオリーブの指示だった。
ミスタ・マウントオリーブはジーンメジャー風に見える壮年のジーンマイナーだ。
「ミスタ・オルス・ブレイク、今は憶えるだけでいい」
マウントオリーブは言った。
「許可なくしゃべるな。コンソールに触るな。室内を歩くな。音を立てるな…」
マウントオリーブはおとなしく制御卓(コンソール)の前に座っているオルスに向かって数え上げるように言った。オルスの勘定では四十八項目を…。
「…許可なく質問するな」
四十八項目を言い終え、
「復唱してみろ、ミスタ・ブレイク」
とマウントオリーブは言った。
オルスは四十八項目を難なく復唱してみせた。
「素晴(エクセレント)らしいぞ、ミスタ・ブレイク」
ニコリともせずオルスを誉め上げたマウントオリーブはそれ以降、口をきくことはおろか、オルスと視線をあわせることもなかった。
オルスの同僚であるミスタ・キムはそれをこう表現した。

「消毒済み」
オルスは周囲を注意深く観察し、特に自分が特別扱いされているわけではないことを確認して安心した。火器管制室の要員はすべてマウントオリーブによって「消毒済み」だったのである。
火器管制員の仕事は船体の人工外殻部*に設置された十二基の砲塔の制御だった。砲塔には*エルマー社の57*ミリパルスビーム砲が装備されている。口径は小さいが強力な火器だった。
出港後にミスタ・キムと二人で第一当直任務についたオルスはそれについての資料をむさぼるように読んだ。武装クリッパーの武装の部分に興味があったからだ。
ミスタ・キムはそんなオルスを冷ややかな目で見ていた。
「護身用の拳銃(けんじゅう)みたいなものだ。たいしたもんじゃない」
そして、こう言った。
「おまえのおちんちんじゃないんだから、勝手に触るな」
だが、キムの警告を受けるまでもなく砲塔の制御は完全自動だったのである。
中央管制室のコンピュータとそれを補佐する人工知能セットがそこから直接砲塔を操作し、射撃することができるようになっていて、それが通常の操作手順(デフォルト)となっている。火器管制室側のコンピュータに制御を移し、さらにそこから手動操作することも可能だったが、船長の許可が必要だった。

だが、それ以前に、これらのパルスビーム砲は実際に射撃したことがないらしい。
勤務二日目でそのことを「発見」したオルスはキムに質問した。
「どうして、我々がここにいるんですか」
「哲学的な質問をするな」
怒ったような声とは裏腹にキムは楽しそうに答えた。
話をしていないと退屈なくらいヒマなのだ。
「完全自動が完全じゃないからいる、が正規の解答だが、本当のところはコレが仕事だから俺たちがいるってのが正解だな」
「仕事…だから？」
「お前、給料もらうはずだろ、七百時間後に」
「はい…」
「額は言わなくていいぞ、メジャーのガキの給料なんか知りたくないからな」
「……」
キムはジーンマイナーだった。
そして、一般にメジャーの方が給与額は高い。
「仕事があるから俺たちはここにいる」
とキムは断言した。
「でも、実際には仕事はないんですよね」

オルスはキムに食い下がった。
「ある」
キムは断言した。
「その証拠に我々は給料をもらっている」
「……」
「ひょっとして、お前、エイリアンの宇宙船をこの豆鉄砲で撃ちたかったのか？」
キムが眠たそうな顔を作って言う。
「エイリアン船はこれまで発見されてませんし、もし発見した場合もあらゆる種類のコンタクトが禁止されています」
キムの挑発にオルスは模範解答で答えておいた。
人類が植民している多くの星系で固有の動植物が発見されてきているが、エイリアンと呼ぶにふさわしい知能を持ったものはなかった。
ある惑星のかなり知能の高い海生哺乳類（ほにゅうるい）がエイリアンと呼ばれるべきかどうか議論がなされたし、ジーンライナー種はエイリアンであると発言したメジャー議員が失脚した事件もあったが、すべては過去のこととされている。
はるか昔の「最初のジーンライナー＊」事件が、本当にエイリアンとのファーストコンタクトにあたるのかどうかが好事家の最大の話題になるほど、人類の勢力範囲にはエイリアンの痕跡（こんせき）は皆無だった。

「素晴らしい」
キムはマウントオリーブの口調をまねて言った。
「それくらい模範的なら、この航海が終わったらすぐに異動があるぞ。中央管制に行ったらおてやわらかに頼むぜ」
最初、オルスにはキムの言っていることがよくわからなかった。が、キムの愚痴と皮肉を要約するとこうなる。
火器管制官の職は船内の他の部署への異動が多かった。異動するのはたいていメジャーである。数種の部署を経験して航海士となってから船を降りる。これは若いメジャーのエリートコースのパターンだった。
航海士として他の船での勤務を続け船長を目指す者、地上勤務に切り替えて重役のポストを目指す者、退職して政界や軍関連企業に入って行く者、その目的は様々だったが、ジーンライナー船に勤務した経験はどこに行っても重く見られている。
その一方で、マウントオリーブのように長期勤務を続けるマイナーもいる。
地上で働くのとは比較にならない報酬額につられて宇宙勤務を希望したのだが、「時間に喰われた」人々である。
高速航行するジーンライナー船の船内と外の世界では流れる時間が異なる。船内の時間は外界よりもゆっくりと流れているのである。そのため、外の世界に適応できなくなってしまった人々を「時間に喰われた」と言う。

基本的に独身者の集団である宇宙船勤務者の中では珍しくマウントオリーブは結婚していた。

彼は自分の子供たちに良い教育をしてやるためにこの世界に入り、結果として子供たちの行く末を知り、その墓参りをしてしまった男だった。

地上には既に彼の居場所はどこにもなかった…。

キムは口癖のように「マウントオリーブのようにはなりたくない」と言っていたが、その彼も船を降りる潮時を逃し、船内勤続八年目となっていた。キムの信託預金は小さな会社を二つ、三つ設立できるほどになっていたが、彼自身には今、地上で何を買い、何を売ればいいのかがわからなくなっていた。

キムは有能なジーンマイナーだったが、家族も恋人もなく、自分の欲しいものが何であるかわからず、変貌（へんぼう）する世界に無関心だった。

キムは目的を見失った男だった。

出港から六百時間あまりでオルスはこれらを学ぶことになった。

それはあまり楽しい体験ではなかった。

「それ、先輩のミスタ・キムに同情するほど自分はエライって言いたいわけ？」

デルビーは呆（あき）れたように言った。

「そういう意味じゃないよ…。でも、そうともとれるのかな……」

デルビーの予想外の反応にオルスは口籠（ごも）った。

当直交替の合間の簡易食堂で出会った二人は一緒に食事をとることにして、いろいろな会話を交わしたのだが、そのなかに火器管制室の噂話もあった。オルスはキムのこともいろいろと話したが、デルビーの言う通り同情のニュアンスがあったのかもしれない。
デルビーはオルスにフォークを突きつけるようにして言った。
「ミスタ・キムが船内勤続八年なのは、バルトライナーが彼を手放さないのもあるかもしれないけど、ホントのところはあの人が外の世界を恐がってるだけよ。ヒマそうにしてるかもしれないけど、あの人、宙港に入るたびに学術論文を発表したり特許をとったりしてるの知らないんでしょ？」
「でも、本人は何をしたらいいのかわからないって言ってるけど」
「そんなの船を降りたら全部解決よ」
デルビーは自信たっぷりに言ってのける。オルスは相手のそういう態度に反射的に反発を感じてしまう。
「そんなに単純でもないと思うけど」
「単純よ。それにミスタ・マウントオリーブが『時間に喰われた』って言うけど、あの人の息子さんたちはマイナー議会の議員でジーンマイナー差別と闘った人たちよ。ミスタ・マウントオリーブは無為に生きたわけじゃないわ」
「……それは知らなかったよ」
「そうでしょ。個人的問題をなんでもシステム側の問題点に責任転嫁するモノの考え方は

無責任体系の出発点よ。ミスタ・キムもミスタ・マウントオリーブも自分で自分の居場所を作れる大人だと思うわ」

オルスは「大人(おとな)」という言葉に自分のなかの深いところにある部分が反応してしまうのを感じた。

自分は大人だろうか、とよくオルスは考える。

結論は出ない。

大人の定義がなされていないからだ。だが、実際にそれを定義しようとすると、年齢だの、社会的責任感だの、結婚やセックスの問題だの、さらに検討しなければならない言葉が山のように出てきて、すべては混迷の淵(ふち)に沈んで見えなくなる。

要はめんどうになる。

にもかかわらず、相手が大人であるかどうかは判別できるようにも思える。

自分の両親は大人のふりをしていた人達だったようにも思える。

では、キムやマウントオリーブは大人なのだろうか？

これはわからない。

デルビーには反論できない。

だが、当のデルビーは無言のままのオルスを見て気弱に付け加えた。

「……でも…確信ないけど…」

オルスはデルビーの様子の可愛らしさに思わず笑ってしまった。

デルビーは自信たっぷりで、利発で、あらゆることに独自の見解を持っていたが、やはりオルスと同い年だった。デルビーが時折見せる、マイナーの少女のような顔は魅力的だった。

デルビーはオルスの顔を見つめて言った。

「人のことより、オルスはどうするつもりなのよ」

「どうするって？」

「四年で船を降りるつもり？」

オルスは返答につまった。これまではジーンライナー船に乗り込むことが自分自身の最大の目的で、実際に乗り込んでからのことを考えたことがなかったからだ。

「それはこれからゆっくり考えるよ」

本当にそうとしか言いようがなかった。

デルビーの話を聞きながら、自分こそ目的のない人間なのかもしれない、とオルスは考えていた。

食事を終えて食堂から出る時、オルスの耳許(みみもと)にデルビーがささやいた。

「話してる時、身体から怒ったような匂いがしてたわよ。マイナーみたいに…」

デルビーはそれだけ言うと、オルスに背を向けて行ってしまった。

その翌日、当直時間ぎりぎりで火器管制室に顔を出したオルスはマウントオリーブにオルゴンボックス・ブロックに行くよう指示された。

「オルゴンボックスですか？　外縁部の？」
「私は行ったことがないので知らん」
「何があるんですか」
「さあな、行けばわかるんじゃないのか」
マウントオリーブの対応はにべもない。
目をそらしてため息をついてみせるマウントオリーブをみて、オルスは質問を禁じられていたのを思い出した。
交替時刻より前に管制室に入っていたキムは、オルスと視線が合うと唇を突き出しながら肩をすくめてみせた。キムにも何もわからないらしい……。
オルゴンボックス・ブロックは最外縁部に位置していたので、オルスは簡易気密服のパッケージを持って出かけた。
コンテナなどの貨物を運搬するシャフトの周囲に作られた通路を通って進むあいだ、周囲の非与圧カーゴブロックに通じるエアロックをいくつも見かけたが、オルゴンボックスに通じる通路はすべて通気されていて気密服を使う必要はないようだった。
オルゴンボックス入口には警備員の詰め所があった。防弾ガラスごしに身分証を提示した後、スピーカからの声がその場で少し待つように言った。
詰め所の警備員たちは武装している。武装した警備員が配置されているのは中央管制ブロックだけだと思っていたオルスは緊張した。

なんだろう、ここは？
ローヌ・バルトの船体外縁の大型ブロックはすべて貨物用のカーゴスペースのはずだった。火器管制室で見た船内マップではオルゴンボックスも周囲の非与圧領域と同色のカーゴスペースになっていた記憶がある。
火器管制室と何か関係があるブロックなのだろうか。
詰め所の中では警備員たちがこちらをちらちらと見ながら何かを話しているのだが、かんじんの声が聞こえてこない。
妙な雰囲気だった。
オルスがここにいることが何かの間違いのように扱われている。そんな雰囲気だ。恰幅（かっぷく）のいい警備員が詰め所の奥の部屋に消えたあと、残った二人の警備員は監視するようにこちらを見つめている。
オルスは警備員たちの視線をしばらく返し続けて、その雰囲気に耐えられなくなり視線をオルゴンブロックの隔壁へと移した。他のブロックの隔壁と大差ないようにみえた。
デルビーは船内のあらゆる物に様々な意味がデザインされ織り込まれていると言っていたが、オルスの目には何も読み取ることができない。
オルスは目を詰め所に戻してみた。
警備員たちは飽きもせずオルスを監視している。
彼らはオルスの容姿から何か隠された意味を読み取ることができるようだった。

ふと、そう思いついたオルスは最悪の事態に思い至った…。

――わかってしまった

と考えた途端、オルスの背に冷たい戦慄が走り抜けた。

警備員たちに拘束される自分を想像したオルスは、今来た通路を逃げ出すことを考えた。

だが、どこに逃げる？

宇宙船の船内に逃げ場所はなかった。

痺れるような恐怖を感じながらも、オルスは無表情の仮面を捨てていなかった。一瞬の恐慌も誰にも知られずにすんだ。

いずれにしろ逃げ場所はどこにもないのだ。

こう考えると逆に心が落ち着いた。

「ミスタ・ブレイク、通行許可を確認しました」

詰め所の警備員の声が聞こえ、オルゴンボックスの隔壁が開き始めた時もオルスはそれが当然であるかのような態度でそれに応じた。隔壁内部の気圧が低いのか弱い風が中に吹き込んでいる。

オルスは開いた隔壁の奥へと踏み込んだ。

後から考えると、それがオルスの人生の分岐点だった。

オルゴンボックス・ブロックの内部はカーゴブロックというよりも工場の内部のようだった。ガントリークレーン状の設備が天井と壁面にあり、床面には目の高さよりやや低め

のパーティションで区切られた機械群が広がっている。
室内はひどく寒い。息が白くなるほど空気が冷たいし、空調がきいてないのだろうか軽い息苦しさを感じるほど気圧が低い。
これは何の設備だろう。
オルスには見当もつかなかった。
天井の高さは倉庫や格納庫を連想させたが、周囲を見回してみても貨物コンテナ類もなく、何を収納する場所なのかわからなかった。普段の狭苦しい生活空間や低い天井に慣れた目には異様に思える場所だ。
目についた作業服の男に名前と来意を告げると、男はここでそのまま待つように言ってオルスをじろじろと見ながら離れていった。その男の反応で初めて気づいたのだが、オルスはこのブロックに入ったときから注目されていたらしかった。作業服の男たちがオルスを遠巻きにして見ている。そのほとんどがマイナーのようだ。
この雰囲気は、少なくとも歓迎されているわけではないらしい。
やはりバレたのか…、とオルスは考えた。
そう考えてもあせりはなく、ただ泰然自若とこれから何が起こるのかを見届けてみたい気分だった。オルスはその場に立ちつくし、五感を開いて待った。
この冷たい部屋で何かを宣告されるのだろうか。
太古の船の船員は不名誉に対して死を宣告されたという。

オルスは、死を宣告されることはないだろう…、だが死ぬよりつらい状況が待っているかもしれない、と考えた。
*スパルタンな戒律とも言える独自の法を持つジーンメジャーのことだ、何が出てきてもおかしくない…。
ただ未知の何かを待ち続けているオルスの周囲で、作業服の男たちの動きが慌ただしくなってきた。それだけではない、床面の下から響いてくる重低音がだんだんと大きくなり、ついには耳を聾するばかりとなった。
このブロックよりも巨大な装置が作動している、そんな感じの音だ。
耐火服や重気密服を着た男たちの姿も見える。
何が始まるのか。
オルスは待った。
そして、オルスの待つ未知の何かは意外な姿をとって現われた。
巨大な金属の塊がぶつかり合うような音が腹の底を震わせたと思うと、隔壁の一部だと思い込んでいた壁が動きはじめた。あまり大きいので動くとは思えなかった壁が開き、オルスは見上げるようにしてその奥から押し出されて来たものを見た。
鋼鉄のモンスターが穴ぐらから這い出してくる……。
シェルの第一印象は作業用ロボットとはまったく違うものだった。
その圧倒的な量感に押し潰されるような気がして、オルスはシェルを見上げながら一歩

後退してしまった。
巨大なエアロックからシェルの機体が出ると、すぐに背後のドアが閉まり始める。そして金属塊とも見えるロックドアが完全に閉鎖されると、目の前のシェルは両腕を床面につく形でその場にうずくまった。
その動き方は生きているのではないかと錯覚させるようなものだった。
床面を震わせていた重低音と甲高い駆動音が収まり、オルスが最初にこのブロックに入ってきた時と同程度の騒音となる。
オルスには静寂のように思えた。
——なんだ、これ……。
シェルを啞然と見上げたまま、オルスは思考停止の状態からさめた。
作業用のロボットではないことは一目見ればわかる。
その種のロボットにありがちな軽快さを印象づけるデザインではない。剝き出しの機能性、それも人間を威圧し、恐怖させる圧倒的な重量感があった。
この種のデザインは…、いやこれはデザインされた形態ではない。むくの素材が外界に削りとられ不純物が摩滅した造形物、人工自然の進化の形態……。
「これ…、兵器なのか?」
オルスは白い息とともにつぶやいた。
動きを止めたシェルの胸にあたる部分が二重、三重に開き搭乗員の姿が現われる。

搭乗員は女性のようだ。褐色の肌はジーンメジャーを思わせるが、体つきはジーンマイナーの女性のように豊満だった。ボディスーツのような服装がそれを強調している。女性パイロットはシェルに固定されたタラップを使って体に密着しているコクピットから抜け出したが、その足は裸足(はだし)だ。床に降りたつとコートとかかとのない靴を受け取って身につけながら、こちらを見た。

そばにいる男がオルスのことを説明しているようだ。オルスは、部外者である自分が見ていてはいけなかったのではないか、と一瞬思い、すぐにその考えを打ち消した。むしろ、自分にこれを見せるためにここに呼ばれたと考えるほうが理にかなっている…。

女性パイロットはそばの男に何か返事をして、オルスと視線を合わせたまま、こちらに向かって歩いてきた。

「オルス・ブレイクか？」

女性パイロットはよく通る力強い声で尋ねた。

これが《メジャー》ノーマ・クイックとの出会いだった。

ノーマはオルゴンブロック内にある無人の制御室にオルスを案内した。クレーン類の制御卓がある小さな部屋で外にいるよりは温かい。

ノーマはドアを閉めると言った。

「どうしてこの部屋に入ったかわかるか」

性の体型で両性具有体には見えない。オルスはあわてて目をそらした。

「この部屋が完全防音だからだ」

ノーマは簡潔に答え、オルスの前にある椅子に腰掛けて足を組んだ。

コートの前がはだけて下着のようなボディスーツがあらわになった。ノーマは完全に女

ノーマは平然とそんなオルスを見ている。

その冷たいブルーの瞳はまばたきもしない。

青い瞳はジーンメジャーにしては珍しいタイプだ。だが、それがジーンメジャー特有の異常に整った容姿と組み合わさると恐ろしく冷たい印象となる。

血のかよった人間には見えない、とオルスは思った。微動もせずオルスを見ているノーマは彫像のようだった。

沈黙が続き、いたたまれなくなったオルスはノーマに尋ねた。

「ミス・クイックが私をここに呼んだんですか」

「そうだ」

「……、仕事の話ですか。勤務時間中ですので――」

「どうしてここに呼ばれたと思う？」

ノーマはオルスの言葉をさえぎって言った。

「……、わかりません」

ノーマはオルスの困惑した表情を見て微笑した。
「これから、ここで楽しいことをするんだ」
「………」
ノーマはあっけにとられているオルスから目を離さず、片手で制御卓を操作した。
制御室のすべての窓に音もなく金属製のシャッターが降りた。
オルスが窓に降りたシャッターを見て視線を戻すと、ノーマは椅子から立ち上がった。
そして次の瞬間、オルスは顔面に衝撃を受けた。
顔を押さえて目を開けたオルスは両手が血まみれになっているのを見た。
そして、口のなかの硬いものを吐き出した。
床の上に落ちたのは前歯だった。
鼻と口からボトボトと落ちる血を見て、オルスはその色にショックを受けた。
殴られた、と意識し、鈍い痛みを感じたのはその後だった…。
「ニセモノ！」
とノーマが叫んだ。オルスは口を押さえたまま顔を上げた。
ノーマは口にやっていたオルスの腕を取り、後ろにねじ上げた。右肩の関節が凄まじい痛みを脳髄に叩き込んでくる。声にならないうめきをあげるオルスをノーマは壁のパネルに押し付けた。
「このまがいモノのウジ虫野郎！　石の裏を這ってろ！」

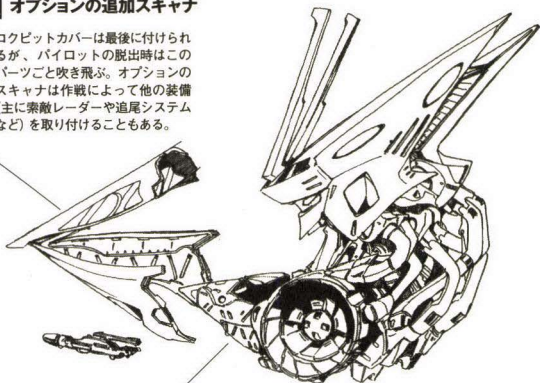
陸軍式の罵倒を、肩の激痛から逃れるために爪先立ちになったオルスに浴びせかける。
「丸めてかあちゃんのなかに戻してやるぞ、この糞モドキ野郎！」
美しいノーマの口から出たとは思えない言葉だった…。しかし、ノーマは強い怒りの匂いを発しながら、オルスの腕をねじ上げている。すごい握力だ。
「ひねり殺してやる、この助平糞虫！」
ノーマはオルスの襟首をつかみパネルに何度も打ち付けた。額が壁にぶつかり、視界の色彩がおかしくなる。
激痛に支配されたオルスの脳は何も考えられなくなり、身体が反射的に悲鳴をあげた。身体が恐怖の匂いを発したのである。
ノーマはそれに気づいて、オルスを突き飛ばした。
オルスは床の上に倒れこんだ。
床から顔を上げた時には、ノーマは先ほどと同じ格好で椅子に腰掛けていた。呼吸などしない彫像のように…。
「おまえ、本当に自分がオルス・ブレイクだと思っているのか」
ノーマの声にはさっきまでの凶暴さなど微塵も感じられない。
「…何が楽しくてメジャーのふりをしてるんだ」
ノーマの言葉にオルスの体は凍り付いた。

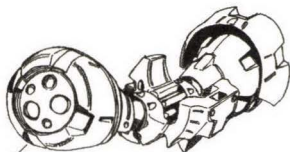
シェル各部解説

コンパート・システム

最新鋭のクリッパー、ローヌ・バルトは2機の「シェル」を格納する。武装クリッパーが本格的になれば機体数を増やせる可能性は非常に大きい。 シェルは特徴である「ロケットモーター」のほかにブロックごとのコンパート・パーツに分解、組立されるいままでにない構造をもつロボットである。 ブロックは頭部&胸部、胴部、腰部、各手足、各手足ロケットモーター、コクピットカバーのたった12基のコンパートによって分解組立される。この結合、分離は非常に簡素で、組み合ったパーツの3、4カ所をクリップすればおしまいである。コードやボルトなどの結合、接合はまったくない。 腕と脚を接合する重要な各主関節は、テーパーのついた受け軸によって結合される。逆テーパーではないのですぐ外れてしまいそうだが、電磁ブロックによってしっかり密着(クラッチング)しているので、戦闘破損以外で外れることは絶対にない。このテーパージョイントは何千トンもの衝撃を支えるときに非常に有効なジョイント方式である。このシェル独特のコンパート・システムによって、損傷や破損の回復が迅速に行なえる。また、オルスとノーマ各機のパーツ入れ替えも可能だ。 完全に分解されたシェルを組み立てる所要時間は25分。動力確認と調整に15分。信じられない戦闘稼働までの速さはこのシステムならではのものだ。

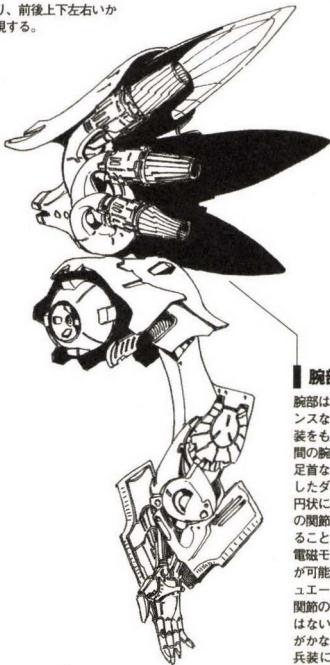
コクピットカバーとオプションの追加スキャナ

コクピットカバーは最後に付けられるが、パイロットの脱出時はこのパーツごと吹き飛ぶ。オプションのスキャナは作戦によって他の装備(主に索敵レーダーや追尾システムなど)を取り付けることもある。

頭部・胸部コンパート

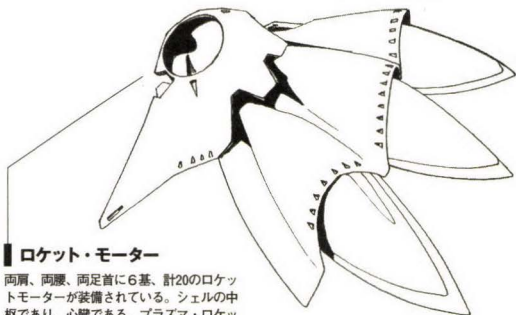
背面を見ればわかるとおり、シェルの頭部は背筋につながり胸部を支えている。このため頭部と胸部は分離できない。おもちゃのロボットのように180度横を向いたり、360度1回転したりする必要はないため、頭部は頑丈に胸部とつながっている。両肩はテーパージョイントの受け口で大きく広がっているが、前方のコクピットブロックの後ろを通り、もう片方の肩につながっている。中心にはジョイントがあり、肩が前後だけでなく上下に上げ下げできるようになっている。のは、言いたくないがMH以上の運動性である。ヤバイ。コクピットはこのイラストでは外されている。

腰部コンパート

最もGがかかる腰部は、ごついジョイントブロックとテーパージョイントから成っている。電磁モーターにより脚部コンパートと密着し回転する。見ての通り、前後上下左右いかなる動きも再現する。

胴部コンパート

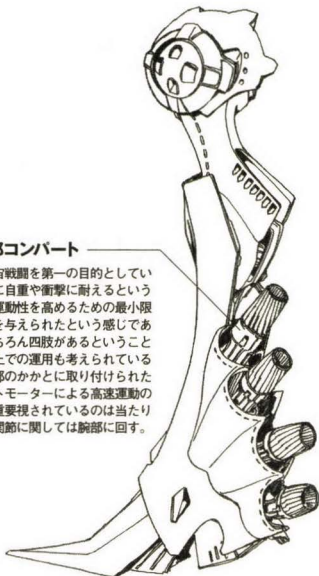
背面には頭部からつながるムービングポイントを接合するための巨大なアームが2基インサートされている。全面の装甲は何枚もの装甲板で重ねられたチェインアーマーである。柔軟に胴体の動きを補佐する。

腕部コンパート

腕部は高速運動のモーメント、バランスなどを受け持つ以上に本来の武装をもつハードポイント、または人間の腕として使われる。肘、手首、膝、足首などの関節は円周運動を基本としたダンパーがインサートされ、楕円状に稼働する。これによって通常の関節を超越して強力なGに対抗することが可能になった。基本的には電磁モーターの反発により瞬間運動が可能になっている。ギアやアクチュエーターのたぐいも少し見えるが、関節の補機で本来の関節のパーツではない。人間でいうところの「肘」がかなり手首寄りについているのは、兵装による負担を考えてあるためだ。

シェル各部解説

ロケット・モーター

両肩、両腰、両足首に6基、計20のロケットモーターが装備されている。シェルの中枢であり、心臓である。プラズマ・ロケットモーターの役割は2つある。ひとつはそのロケットモーターの推力でシェルを航行させること。もうひとつはロケットモーターでシェルを稼働させるエネルギー源を供給すること。肩と腰についたロケットモーターはシェルにエネルギーの供給を行なう。従ってロケットモーターを外されたシェルは動けない（簡単にロケットモーターだけを外すことが出来るから、クルー達にはこう注意されているのだ）。高速で移動するためのロケットモーターは〝親〟のローヌ同様の推力システムをもっている。ノズル状になっているのはジーン・ライナーのような巨大なボローナ・ファーンを振動させる訳にはいかないためで、小口径のノズルの中でエネルギーが渦を巻き振動状態にする。プラズマ・ロケットモーターの本体自体は非常に小さく、肩のロケットモーターのところ、ぐるんと曲がっているところがエンジン本体だ。そこから振動機関になり、ノズルから噴射される。噴射されるエネルギーとは別にロケットモーターは強力な電磁エネルギーを生み出し、これを各関節のテーパージョイント部に伝えている。テーパージョイント部はコンデンサーの役目も果たし、そこから各部の動力にエネルギーを送っているのだ。母機でのチャージからロケットモーターのエネルギーを使い尽くすまでの時間は45分を切る。これがシェルの行動限界である。ロケットモーターに補助動力増槽を装着することによっていくらかは行動時間が延びるが、長時間の作戦行動はシェルの本意ではない。

脚部コンパート

高速宇宙戦闘を第一の目的としているために自重や衝撃に耐えるというよりは運動性を高めるための最小限の質量を与えられたという感じである。もちろん四肢があるということは地球上での運用も考えられているが、脚部のかかとに取り付けられたロケットモーターによる高速運動のほうが重要視されているのは当たり前だ。関節に関しては腕部に回す。

3

オルス・ブレイク

GMa. Ors Break

ノーマが話しかけた。
「質問に答えろ」
床から立ち上がったオルスは唇からこぼれる血を手のひらで拭った。
「私は……《メジャー》オルス・ブレイクです…」
オルスはそばにある制御卓にすがりノーマの目を見た。
「……そうか…」
ノーマは眉を軽く上げてメジャー特有の侮蔑の表情を浮かべ、ボディスーツのサイドポケットから携帯端末の機能を持つデ*ータフォルダを取り出して制御卓に接続した。
「セキュリティ、トップレベルで例のデータを目の前にいる男に見せてやれ」
ノーマがデータフォルダに通常言語で命令する。
トップレベルセキュリティの妥当性を確認した制御室のノ*イマン型コンピュータはデータフォルダの命令で逆にスレーブ状態となり、船内ネットワークから物理的に独立した。
オルスが手をついている制御卓に火が入り、ディスプレイがオンになる。
「何が映ってるか見ろ」
オルスはディスプレイを見た。

ディスプレイに映し出されているのは通常言語とフロー言語でモデル化されたライフ・ダイアグラム（図像）だった。

こうしたライフ・ダイアグラムはすべての人間の一生の間の出来事を記録するために世*界政府によって使われているものだ。

ある人物の生まれて死ぬまでの行動や能力、出来事（イベント）は図形の形によって記述される。二つの記録を比べてみてよく似た図形であれば、二人の人物はよく似た人生を送ったことになる。

ディスプレイには、あるジーンマイナーの集団の図形が広く見渡すことのできるマクロ視点で描かれている。

ほぼ均一の図形の層が果てしなく続いている。

そのほとんどが未完のものである。

このおびただしい図形は今現在、生きているジーンマイナーの記録なのだ。

その中にマクロ視点で見ても異質な図形がぽつんとひとつだけ混ざっていた。他の図形がほぼ同じ形をしているのに、その図形だけは歪（ゆが）んでいる…。

ディスプレイはその図形に高速でズームしながら、新しいオブジェクトウィンドウを開いてそのライフ・ダイアグラムを通常言語に展開（デコード）する。

歪んだライフ・ダイアグラムはジーンマイナーの少年の履歴書だった。

その少年はオルスだった。

通常言語に展開(デコード)された少年の記録は、ジーンマイナーでありながら、ジーンメジャー並の能力値を発揮する可能性を持っている、と示されていた。

《マイナー》オルス・ブレイク　19歳　GMi(ジーンマイナー)　男性

名前の表記のそばにはオルスの顔と全身の立体画像もある。マイナー風のスーツを着た姿だった。その下に赤い文字がゆっくり点滅している。

遺伝子特異体*　―ヴィ*シー自治区所管

「もう一人のデータも表示しろ」
ノーマがデータファイルに命令する。
ディスプレイの画面が分割され、再びライフ・ダイアグラムの群れが表示される。今度は様々な形に歪んだライフ・ダイアグラムの集合体だった。
これはジーンメジャーのライフ・ダイアグラム集合だった。ジーンマイナーのものと比べて形が極端なものが多い。

画面はそのなかのひとつに高速でズームし展開（デコード）する。

《メジャー》オルス・ブレイク　19歳　GMa（ジーンメジャー）＊ジェンダー傾向－男性＋＋

『このオルス』の画像はなかった。上流階級ばかりのメジャーはテロや誘拐を恐れて、世界政府から一族全員の画像データを買い取る場合が多いのだ。

「面白い…。これをどう理解したらいいと思う」

ノーマはディスプレイから目をあげてオルスを見た。

「…………」

オルスはディスプレイから目を離すことができなかった。

「可能性1、《メジャー》オルス・ブレイクが、実は《マイナー》オルス・ブレイクだとあらぬ嫌疑をかけられている。可能性2、《マイナー》オルス・ブレイクが《メジャー》オルス・ブレイクを名乗っている…」

自明のことをもてあそぶかのようなノーマの言葉に、オルスはもう何を言っても無駄だと悟った……。

《マイナー》オルス・ブレイクは辺境の星のジーンマイナー自治区で生まれた。両親は世界政府職員の中産階級マイナーで、兄弟はなかった。

オルスは他のマイナーの子供たちと一緒に平凡で幸福な子供時代を送っていたが、十一歳の春に突然それは終わりを告げた。

オルスは月に一度、地区の国立病院に通っていた。両親からは「体が弱いから、病気にならないように」と言われて通院していたのである。

確かにオルスは女性のように華奢（きゃしゃ）な顔立ちではあった。それは本来、ジーンメジャー特有の特長だったので、そのことをよくクラスメート達にひやかされたりもしていた。もちろん、彼らは単にその特長を羨（うらや）ましがっていただけのことなのだが。それに、その華奢な顔つきに反しオルスは風邪ひとつひいたことがないくらい健康で頑健だったので、本当の自分はジーンメジャーなのだ…などと楽しく夢想することすらあった。

十一歳のオルスはいつものように他の病棟とは離れた研究棟に一人で入ってゆき、いつもの検査の後、医師の診察を受けた。医師はこれまでオルスの担当だった老医師から若いインターンに変わっていた。

若い医師の卵は子供好きで、善良で、そしておしゃべりな男だった。

このインターンは不注意にも何も知らないオルスが「遺伝子特異体」であることを知らせてしまった。

遺伝子特異体。

まがまがしい響き。

この言葉でオルスの幸福な子供時代は終わった。

ジーンマイナーのなかには、ごくまれに遺伝子特異体と呼ばれる者が生まれることがある。

そうしたジーンマイナーの能力は後天的に獲得されたものではなく、遺伝子レベルでの突然変異であった。

こうした個体は「最初のジーンライナー」が地球に帰還して、人工的な遺伝子デザインによってジーンメジャーという種族が生まれてから初めて見つかるようになった。

ある種のウィルスに原因を求める説、生体場という科学的に立証されていない一種の生気論の実証であるとする説、こうした突然変異体は過去にも存在したがこれまでは検証されていなかったにすぎないとする説などの諸説があったが、こうした子供たちが生まれてくる原因は不明のままだった。

「恐がらなくて大丈夫だよ、将来キミはジーンメジャーと同じくらい優秀な大人になるんだから」

理由のわからない戦慄(せんりつ)に震える自分をなぐさめてくれる若いインターンの顔は今でも忘れられない。

もちろん、遺伝子特異体の潜在能力がメジャーと同じだなどとは立証されていない。遺

伝子特異体は単に研究材料として珍しいだけだ。オルスは子供だったが、そのくらいは分かっていた。
　他の人間とは違うという感覚、集団から孤立してしまうという考え…。
　これは十一歳のオルスには恐怖以外の何ものでもなかった。

　ジーンマイナーのなかに生まれる遺伝子特異体の存在はべつに秘密でもなんでもない。一般家庭で視聴できるニューズリンクで扱われるような珍しくはあるが一般に知られた存在だった。
　だが、オルスは用心深く振る舞い、自分が遺伝子特異体であると知ってしまったことを両親には秘密にしておいた。
　その結果として遺伝子特異体の少年は、両親についていろいろと学ぶことができた。
　両親はオルスを政府保護下におくことに同意していた。
　保護下におかれたオルスのために、政府は細心の注意をはらって医療検査、就職、そして交配の計画を立てていた。
　オルスの人生は政府によって綿密に計画されていたのだ。
「結婚」は「交配」と表現されていた。
　人権のある実験動物だ、とオルスは思った。

それに関した膨大な量の同意書に両親はすべてサインしていた。
約一年がかりで…。
オルスは生まれ育ったヴィシー自治区から一ヵ月以上離れることはできない。
オルスの子供が遺伝子特異体ではなかった場合、両親はオルスの子供の養育権を主張できる。
オルスを政府保護下におく代償として、両親は通常の四倍額の終生年金を受け取る。ただし、その年金はオルス名義の口座に振り込むように指定されてはいた。
両親は「平均的で善良な人」だった。
だから、政府の指示に対しても取れる選択肢を選んだだけだった。オルス名義の口座に年金を振り込ませるようにしたのも、ただ「平均的で善良な親」を演じたかっただけなのだ。
両親は、オルスがすべてを問いただしたとき、こう答えられれば安心できたのだろう。
「おまえのためを思ってのことだよ」
初めてその目でジーンメジャーを見たのも丁度その頃だ。
それは、父にせがんで宙港へ宇宙船を見に連れて行ってもらったときのことだ。
接舷（せつげん）された眩（まばゆ）く居並ぶ宇宙船群には、むろん興奮したが、それよりも衝撃的だったのは、ロビーで入港手続きをフロー言語で行なうメジャーの大人を見たときだった。

瞬間、血が騒いだ。
浅黒い肌、漆黒の髪、中性的な容貌、引き締まった肉体…。
容姿の違いだけではなく、隣に立つ父、学校の教師たち、自分がこれまで見てきた大人たちとは明らかに違う何かを彼らは持っているように見えた。
オルスは初めて人間に匂いを感じた。
メジャーは「勝利者」の匂いがした。

それまでオルスはメジャーをメディアでしか見たことがなかった。ニューズリンクやローカルネットで放送されていたメジャーの伝統芸能であるスポーツ中継などでだ。
伝統芸能。
そう、すべてのプロスポーツは、それぞれのメジャー達が特権的に受け継いだ遺伝子デザインの優劣を競うための伝統芸能であった。
幾世代もの時を経てメジャーとマイナーの能力差は埋めようも無いほどに開いてしまっていた。それはメジャー達が特権的に自らの遺伝子デザインを改良し続けた結果だった。
メジャーの恩恵的交配でマイナーの子がメジャーになることも可能だったが、マイナーとの掛け合わせによって、自らの遺伝子デザインを「劣化」させるようなことをするお人好しのメジャーは、そういない。ただ、ローカルネットで放映されていた「メジャーとマイナーの種を越えた純愛ドラマ」は、自治区に暮らす多くのマイナーに「くだらない」と

言われながらも人気を博していたのだが。

十二歳になったオルスはネットワークゲーム*に参加するようになっていた。世界中から多数のプレイヤーが参加する惑星統治シミュレーションゲーム*である。ただし、参加者は「平均的で善良な人々」、つまりマイナーに限られていた。オルスはゲームの中の世界の議員選挙に立候補し、当選した。選挙公約は「平和な世界と緑の街づくり」だった。

この公約を実現するためにオルスは本気で取り組むつもりだった。

だが、議員になったオルスは「平均的で善良な人々」が何故このようなゲームに多数参加したのかをすぐに悟った。

「平均的で善良な人々」は、現実世界で得ることのできないエリート意識を、虚構世界で満喫したいだけだと悟った。

僕はまともでも平均でもいたくない…。

オルスはあらゆるものに腹が立った。

そしてゲーム世界の軍人や不平分子と交流をもつようになったオルスは、十三歳の誕生日に軍事クーデターに参加することになった。

ゲーム世界の平穏さに退屈していた多くの者たちが面白半分で協力したため、このクーデターは成功し、クーデター軍機甲部隊は議会を包囲して議員を皆殺しにした。

軍事政権の中枢に入ったオルスが次に実行したのは、面白半分でクーデターに参加した人物の粛清だった。

二百人が特別諜報警察に逮捕され裁判なしで処刑された。

*ロベスピエール、スターリンの時代がゲームの中で再現されたのだ。

処刑された議員や反政府勢力の人々はネットワークに再びアクセスし、生まれ変わり、レジスタンスとなった。

また、暴力を非難する良識的な人々、リベラルな政治運動家、平和運動家、ネットワークゲームは娯楽であってこんなことは許されないと主張する人々もいた。

内務省長官になったオルスはこうした人々を徹底的に弾圧した。

凄まじい殺戮と暴力が架空の世界に吹き荒れた。

正論や正義をとなえる人々が、街角で警官に撲殺されるようになった。

オルスは十歳の少年が操る中年男「アウグスティヌス」を特別諜報警察の長官に任命し、その翌日には処刑した。

それは理性では理解しきれない世界だった。

オルスたち軍事政権の面々は、現実ではやり場のない怒りを仮想の世界で思う存分荒れ狂わせていたのだが、そんなオルスたちに信奉者が出てくるのが不思議だった。

彼らシンパは軍事政権が残忍であればあるほど熱狂的に信奉した。

そのほとんどが十代の少年たちだった。

軍事政権の統治がゆるがないのがわかると、統治シミュレーションゲームをやめてしまうプレイヤーが出始め、結局、ゲーム管理者(マスター)の命令で軍事政権は解体された。
ゲーム管理者からのメールにはこうあった。
「選挙公約―平和な世界と緑の街づくり―を実現してくださいね」
オルスはネットワークゲームをやめた。

このゲームで特別諜報警察長官になった十歳の少年「アウグスティヌス」は、オルスに頻繁にメールを送ってくるようになり、二人はネットワーク上で友人となった。
この少年は実はジーンメジャーだった。マイナーの名前を使ってネットワークゲームに参加していたのだ。
「これくらい、どうってことない」
とアウグスティヌスのメールにはあった。
「それにしても、あんな感情の爆発をみせるほど自分の人生に不満があるんだったら、さっさと人生をハックすればいいのに。僕みたいに別の名前を盗んで」
人生をハックする、というのは笑い出したくなるような新しい考え方だった。が、オルスは、そんなことは良識に反することになる、と返信した。
アウグスティヌスはこう答えてきた。
「良識は何も助けない。良識は君を救わない」

この少年から学ぶことはたくさんあるようにオルスには思えた。
オルスは少年アウグスティヌスの協力を得て、五年がかりで自分の人生をハックした。《マイナー》オルス・ブレイクは世界政府データバンク*に静かに侵入し、《メジャー》オルス・ブレイクの名前を盗んだ。
いや、正確には盗んだのではなく作りだした。

ジーンメジャーの家族構成には厳密な規則性がある。
遺伝子デザイン上の問題、遺産相続の上での必要性、ジーンメジャー特有の戒律、地域によっては宗教的必然などによってそれは支配されている。
オルスと少年アウグスティヌスはまずジーンメジャーの家系図を自動作製するソフトウェアを書くことにした。家系図の自動作製は変数項(パラメータ)の入り組み方が尋常ではないので簡単なことではなかった。そのため、まずそのソフトウェアを書くための支援ツールを先に作らなければならないことがわかった。ここまでで二年かかった。
次にネットワークに侵入するための通信回線を数百本捜しだして、その安全性を検証しながら、ネットワーク上で自動的にデータあさりをする使い魔(デーモン)プログラムを作った。
ネットワークに放たれた使い魔(デーモン)は六十秒ごとに使用回線を乗り換えながら、規則性から外れたジーンメジャーの家系図を捜し続けた。世界政府は家系図という形のデータを持っ

ていないので、戸籍とも言えるライフ・ダイアグラムから家系図を再構成する必要があった。
家系図に不自然な穴があるジーンメジャーの一家を見つけたのは四年目のことだった。遺産相続のため子供を作らなければならないはずのジーンメジャーの女性が子供をもうけていなかったのだ。
その理由はいくら調べてもわからなかった。
少年アウグスティヌスもこうコメントした。
「さあね、いろいろあるんだろ」
このジーンメジャーの女性、ジェンダー傾向女性++、の子孫の一人が《メジャー》オルス・ブレイクだった。
相互参照する数百のデータバンクを同時に書き換えた後、少年アウグスティヌスはメールを送ってきた。
「おめでとう、オルス。君はニュートラルで空気のような男になれた。何の役割も与えられてないのは本当に羨ましい」
少年アウグスティヌスはその年、大学院を卒業して脳外科医になることになっていた。
「いい思い出になったよ。でも、これから僕たちは他人だ。僕は君のことを知らないし、君は僕のことを知らない。コレは子供時代の悪戯の記憶と一緒で誰にも語るべきじゃない。わかるよね」

それ以降、彼からのメールはなかった。
オルスと少年アウグスティヌスはお互いの本名を知らないままだった。
オルスは与えられてほっぽりだされた格好となったが、与えられたものに狂喜し他の何も気にはならなかった。
《メジャー》オルス・ブレイクの名は「ここ」から脱出するためのパスポートだったのだ。

「……ジーンライナー船に乗りたかった…」
オルスはノーマを見た。
「……子供の頃からの夢だったし、ヴィシー自治区にいたら遺伝子特異体として旅行もできない生活が待ってる」
前歯が折れているのでしゃべりにくい上に、血が口からたれそうになる。
「勘違いするな。私は政府の役人じゃない。理由なんかどうでもいい」
ノーマは淡々と話す。
「お前がジーンマイナーであることを政府に通報するつもりもないし、誰かに教える気もない。このことを知っているのは私とあと一人だけだ」
「……じゃ、どうして…」
ノーマはデータフォルダに命令した。
「契約シート表示、記録しろ」

オルスの前にあるディスプレイが、ライフ・ダイアグラムから契約書らしき書面へと切り替わる。右上にバルトライナー社の社章である螺旋(らせん)型の家系図がついている。
契約書の書面には小さな文字がぎっしりとつまっていて、何が書いてあるのか読み取るためにはディスプレイに顔を近付ける必要がありそうだった。
「読む必要はない」
ノーマがぴしゃりと言った。
「それにサインしろ。おまえに選択肢なんかないんだ」
「これは……何の契約シート…」
「黙ってサインしろ。サインすればさっき見せた怪物(モンスター)に乗せてやる」
怪物(モンスター)とはシェルのことだった。
オルスはあんなものに乗りたいとは思わなかった。
「さっきのあれに乗るって…、どういうことなんだ。さっぱり、わからない」
「わからなくていい」
「……サインしなければ、どうなる…んですか」
「そんなことは考えてない。サインするまで手の指を一本ずつへし折ってやるからな。全身から汗が吹き出すほど痛いぞ」
ノーマは穏やかに笑っている。
先ほどオルスの腕をねじり上げた時の異常なほどの手際よさを思い出すと、ただのおど

しとは思えなかった。
ノーマは人を殺した経験がありそうに思えた。
オルスはまだ知らなかったのだが、ノーマ・クイックは陸軍地上攻撃機パイロットとして従軍経験があり、苛烈な局地戦争に投入され、歩兵と一緒に白兵戦にも参加したことがあった。
オルスの勘は当たっていた。

オルスは契約書にサインした。
血が乾き始めて顔面がひどく痛みだしていた。もうこれ以上の痛みには耐えられそうもなかったし、指を折られる苦痛に耐えても助けが来るわけでもなかったから…。
サインを終えて顔を上げると、いつの間にかノーマが背後に立っていた。
オルスは驚き、後退りしようとしてそばにあった椅子を派手に蹴倒してしまった。
「手を出せ」
ノーマは言った。
「…サインはしました……」
「いいから手を出せ」
有無を言わせぬ強い調子だった。
「………」

指を折られる、と思った。
オルスは左手を前に出した。
手は恥ずかしいほど震えている。
「手のひらを上にしろ」
オルスは手のひらを上にした。
ノーマはその上に何かを置いた。
それは血まみれの前歯だった。
「医療室で固定してもらえ。元通りになる」
ノーマはそっけなく言うと、データフォルダを制御卓から乱暴に引き抜いて部屋から出ていった。

制御室に一人残されたオルスは自分でもよく理解できない感情の高ぶりを感じていた。身体が震え、涙が抑えようもないほど出てきた。
有無を言わさぬ暴力に屈したためだけではない。
オルスは思い出したのだ。ネットワークの世界では思うままに力をふるい、あらゆるものを支配することができると考えていた自分は、実は現実の世界では支配されている側でしかなかったことを。
オルスは疑似体験で頭がいっぱいの子供だった。

それに今頃気づいたことに激しい怒りを感じた。
――力で対抗しろ！
オルスの精神の深い部分から叫びがあがっていた。
――なにもかも叩きつぶせ！
狂おしく甘美な叫びだった。
――やつらを屈伏させろ！
すべてを叩き潰す力が欲しかった。
「勝利者」になりたかった。
あの怪物、シェルは自分に必要なものだ…、とオルスは思った。

「どう思いますか、船長」
航海長ノヴァーリスは指先でペンをもてあそびながら言った。
ペンはノヴァーリスの細い指のまわりをくるりと一回転し、今度は逆方向にまわった。
船長パースウォーデンはその動きを目で追いながら答えた。
「どうもこうもないな。こちらの頭越しにことが運んでいる以上、何を言っても感想でしかないだろう」
船長と航海長は船長室で相対している。
話題はC群所管火器管制員オルス・ブレイクの人事についてだった。

つい数時間前、船長パースウォーデンは、火器管制員オルス・ブレイクがバルトライナー社から解雇されたことを船内ネットワークのメールで通告された。発信者はローヌ・バルトだった。

次いで、バルトライナー社の子会社*バルトカーゴサービスが《メジャー》オルス・ブレイクを契約社員・シェル乗組員（ドライバ）として雇用することを通告してきた。これも発信者はローヌ・バルトだった。

理由や経緯についてはまったく述べられていない。

パースウォーデンにとっては寝耳に水だった。

バルトカーゴサービスの契約社員といえば、この船では索敵要員のノーマ・クイックだけだった。

パースウォーデンは、すぐにノーマとローヌ・バルトが出港前に会話していたことを思い出した。

何が起こっているのかは正確にはわからないが、ノーマとローヌ・バルトが船長の頭越しに何かを画策しているのは確かだった。

これを座視しているわけにはいかない。だが、船長には乗組員の人事に関する発言権は非常事態を除いてなかった。

そこで船長と航海長は二人の会話を記録に残しておくことにした。

会話の大要は「オルス・ブレイクが解雇されたことに対する遺憾の表明」だった。

この記録は何か不測の事故が起こったときに、船長と航海長に対する責任追及を軽減してくれるはずだった。
「残念ですね、適切な人事かどうかは私には判断できませんが……」
「そうだな、本当にオルス・ブレイクがシェルドライバを務められるのか、私にもわからん。だが……危険すぎるな」
船長は喋り（しゃべ）ながら、ローヌ・バルトもこの会話を聞いているだろうか、と考えた。
ローヌ・バルトは船内のあらゆる部屋をモニターできる。
パースウォーデンとノヴァーリスは、第三者に聞かせるために「作られた会話」を演じているのだ。
「テストパイロットが数人死んでいるほど扱いが難しいのは考慮されたのか、疑問を禁じ得ないな」
——元宙軍パイロットも持て余すモンスターマシンをあんな子供に……
「ミスタ・フレイという選択肢もあったのだが」
——ミスタ・フレイを雇えば何の問題もなかったのに！
「無事故運航のためにもミスタ・ブレイクには慎重さを期待したいところだ」
——馬鹿め！…事故が起こるのは目にみえている…
パースウォーデンは本心を隠すのに苦労した。

ノーマ・クイックと契約することでオルス・ブレイクはシェルドライバとなった。
シェル(schell)とは、正式名称「G‐SCHLL‐1554宙間作業機」のSCHLLの部分を無理やり音読したものだが、開発段階から使用されていた上、「shell/甲羅、砲弾」のイメージもあって俗称として定着した。
「G‐SCHLL‐1554宙間作業機」は、バルトライナー社の依頼でジーンライナー系企業ライナーメタリカ社*で開発された宇宙空間作業用有人ロボットで、開発終了から五年が経過していたが一般には公開されておらず、写真も存在しない。
それはシェルが額面通りの宙間作業機ではなかったからだ。
シェルは最新鋭の戦闘マシンだったのだ。
宇宙空間を移動する人工飛翔(ひしょう)体のなかで最も高速で、過激ともいえる機動が可能な機体がシェルだ。最高速度は史上最速のクリッパー、ローヌ・バルトをも凌駕(りょうが)する。
人類が制御できる最速の有人機がシェルだった。
こうした高速性が実現できたのはジーンライナーが独占し秘密としている異星人のテクノロジーがある、とされている。が、シェルのパーツはブラックボックス化されているモジュールの存在が多すぎて、ローヌ・バルトで実際にシェルの整備をしている技術者にもその真偽はわからなかった。
この最速の戦闘機械の存在はジーンライナーとジーンメジャーの一部にしか知られていない。逆にある意味、公然の秘密ではあったが、実機を見たことのある人間は少なかった。

宙軍はライナーメタリカ社と交渉してこのシェルを実験機として購入しようとしたことがあった。

交渉はまとまりかけて破談となった。

宙軍の予算で購入できず、また買っても維持費を捻出（ねんしゅつ）できなかったからだと言われている。相手が政治力のあるジーンライナー系企業であったため、その方面で体質的に弱い宙軍が売却を拒絶されたという噂もあった。

シェルを実際に保有し運用しているのはバルトライナーの他にもう一社の企業だけだった。

それはバルトライナーのライバル企業であるギース*シッピング社だった。

ギースシッピングはバルトライナーに遅れること一年後に傘下の*サカイ重工製のほぼ同性能のシェルをロールアウトさせた。

そして、その二週間後にバルトライナーとギースシッピングのシェル同士による最初の戦闘が宙軍の哨戒（しょうかい）船に観測された。

4

クリッパーレース

Clipper Race

い。
四年前、辺境宙域で行なわれた最初のシェル同士の戦闘についての記録は残されていない。
シェルドライバ、母船となったジーンライナーは誰だったのか不明である。宙軍にはそうした戦闘が観測された事実すら残っていないのである。
記録はすべて抹消されていた。
当時、ジーンライナー船同士の戦闘の報告を受けた宙軍上層部は、それに対してどういう対応をするべきなのか、とまどいを隠せなかった。
そうした事態に対応するマニュアルがなかったのである。
ジーンライナー船同士の戦闘行為は犯罪行為なのか。もし仮にそれが犯罪だとしても宙軍に警察権を行使させていいのか。そして、宇宙空間を事実上「領有」しているジーンライナー種に警察権を行使することは何を意味することになるのか…。
世界政府指導部と宙軍は困惑した。
前例などもちろんない。
こうした事態は世界政府軍の参謀本部作戦課ではやくから問題として指摘され、実験的にシミュレーションが行なわれたこともあった。しかし、それは純粋に軍事的な問題と

して取り扱われ、いちばん重要な政治的判断はすべて留保されていた。マイナー議員はもとより、名門の出のメジャー議員も歯切れの悪いコメントしかできない微妙な問題だったのである。

事件後、数週間たってからメジャー議員とバルトライナー社、ギースシッピング社の代表による会談が「懇談会」という形で開かれた。その内容は政府極秘となり、宙軍の記録は政府の要請で破棄された。

さらにその数日後、史上初のジーンライナー船同士の戦闘を観測した哨戒船*の艦長は、

——観測し、救難要請を受けよ

との宙軍からの指示を受け取った。

これが膨大な量の観測データに対する宙軍の返事だった。

異星人の宇宙船と接触したとされる「最初のジーンライナー」が地球に帰還し、ジーンライナー種という遺伝的には人類である生きた宇宙船が高速大量輸送を担うようになってから数百年がたっている。

先に「宇宙空間を事実上領有」と表現したが、実際には宇宙には領有する何ものも存在しないし、法的な根拠もない。

しかし、諸星系の間に横たわる広大な空間はジーンライナー種の活動領域だった。

もっとも高速で低コストに星系間航行できるジーンライナー船は経済原理で全機械船を駆逐し、「生きていない宇宙船」は航続力のない小型船や宙軍の艦艇だけになってしまっ

ている。

通常、こうした独占状態は富と権力の集中をもたらすことになっている。

マイナーやメジャーすらを雇用し、企業を作り、それが星間航行に関する企業であれば自らを役員兼資産とした。

ジーンライナー種は富には手をのばした。

当初、ジーンライナー種による企業の設立は世界政府の神経を苛立たせることになり、経済的独占状態に抵抗する動きもあった。だが、異星の遺伝子デザイン技術を部分的に共有することでジーンライナー種と結びついているジーンメジャーの政治力ですべてが押し切られてしまった。

議会のあるメジャー議員はこう演説した。

「ジーンライナー種は同じ人類でありながら、あまりに異質であるため我々のライバルにはならないと明言できる。ジーンライナーたちは居住する土地も資産も欲してはいない」

この言葉は真実だった。ジーンライナーたちはメジャーやマイナーの住む惑星にはいっさいの干渉をしなかった。

ジーンライナー系企業は世界政府の福祉政策を経済面でサポートしようとする姿勢を一貫して取り続けていたし、また局地戦争の仲介役を務めることも多かった。

ジーンライナー種以上に中立的な「人間」は他に考えられなかったからである。

あらゆる星系のメジャーやマイナーは、ジーンライナー種は平和的であると信じて疑わなかった。
当初、宇宙におけるジーンライナー種の覇権を恐れていた世界政府は数世紀にわたるこうした状況に安心しきっていた。
——ジーンライナー種は権力には興味がない
これが世界の常識となっていたのである。
その平和的なはずのジーンライナーたちに変化がみられるようになったのは、この数十年のことだった。
ジーンライナーたちは企業間で「*クリッパーレース」と呼ばれる競*争を始めたのである。
レースといっても競技ではない。
クリッパーと呼ばれる高速航行が可能なジーンライナー輸送船が定期航路間の所要時間を競うのである。
すべての発端はギースシッピング社の宣伝部のメジャー社員が「何よりも速く…ギースクリッパー」という宣伝コピーを提案したことに始まる。この案は採用され実際に宣伝に使用された。
事実、ある航路の最速記録をギースシッピング社が持っていたのである。
それに対してライバル社のバルトライナーは最も船足(ふなあし)の速いクリッパーを他の航路から持ってくることでこれに対抗した。

バルトライナー社最速のクリッパーはこの航路の記録をたちまち更新してしまい、ギースシッピング社は宣伝コピーを使えなくなってしまった。
このクリッパーの名はニナ・バルト。
遺伝的にはローヌ・バルトの母親にあたるジーンライナーである。

ギースシッピングとバルトライナーのクリッパーはすべての星系のあらゆる航路で航海所要日数を競い始め、クリッパーレースという死語が復活した。

この言葉は人類が内燃機関の実用化を始めたばかりの頃、地球上の海洋で帆船によって競われていたスピード競争を指すものであった。主にオーストラリアや中国から英国へ羊毛や茶を運ぶ高速帆船クリッパーは、嵐のなかでも縮帆せず、危険をおかして全力航行を続けた。
それは利益や報償金のためではなく、クリッパーの栄誉をかけた競争だった。
当時、名を馳せたクリッパーに「カティ・サーク」という船があった。このクリッパーは長距離航路で凄まじい記録を叩き出し、帆を何度も失いながらも全速航行をやめなかった。その名はクリッパーの名誉として現在も記憶されている。

クリッパーレースという名は一般の人々の目を向けさせるきっかけともなった。

ジーンライナーという世界で最も「足の速い」人々のことに、大衆はあらためて気がついたのである。
実況こそ行なわれなかったが、クリッパーレースの結果はスポーツやモータースポーツ同等の扱いでニューズリンクに登場するようになり、世界最速の船の名を知っていることは子供たちの間では「常識」であった。

そのクリッパーが武装していることに最初に気づいたのは宙軍の輸送船だった。星系から遠く離れた外宇宙を航行していたクリッパーがエネルギー系の兵器らしきものを「発砲」しているのをたまたま観測したのである。
宙軍の報告を受けた世界政府は、当該クリッパーが所属するギ・ースシッピング社に事実関係を問い合わせた。
ギースシッピング社は、
――武装は航路上の障害物を取り除くためのものである。また、武装クリッパーを所有しているのは当社だけではない
と回答した。
「武装クリッパー」という単語に世界政府は衝撃を受けたが、それ以上の追及はなされることがなかった。
議員や官僚たちは、ホームランを打つよりも失点しないことが重要だと考えていたから

だ。
宙軍は警戒体制を強化したが、それだけでできることのすべてだった。脅威を現実のものとして認識できる宙軍には意見を通すための政治力が欠落していた。
そして、シェル同士による戦闘が起こった。
その事実はジーンライナーたちが力で世界政府をねじ伏せ、秘密となった。
宙軍には対抗できそうな兵器がなく、世界政府指導部は今さら何を言うべきなのかがわからなかった…。ジーンライナー種は権力機構には興味がない、という常識は幻想だった。
地上にいる人々は宇宙で何が起こっているのかをまったく知らなかった。

オルスはその渦中に投げ込まれたのである。

「あら、久しぶりね」
声をかけられたオルスは相手を見上げた。
相手はデルビー・アイバースだった。
「…デルビーか……」
「ここ、座るわよ」
オルスの返事など聞かなくてもわかる、といった感じでデルビーが向かいの席についた。
食堂で食事をすればデルビーに出会うのは避けられないだろうと思っていたのだが…。

前に座ったデルビーは食事を始める様子もなくオルスの顔を凝視している。
「な、なんだよ…」
「……よく見えないわね」
「え?」
「前歯よ」
ノーマに折られた前歯のことだ。
——どうして歯のことを知ってるんだろう…
「ねえ、前歯見せてよ。喋ってるだけじゃ見えない」
デルビーは片肘をテーブルについて、オルスの口元を凝視している。
ふざけているのかとも思ったが、デルビーの表情は真剣だった。
オルスは困惑の匂いのサインでデルビーを静かに説得しようかと考えたが、彼女ならそれくらいのことにはひるまないだろう、と思って諦めた。
オルスは上唇を上げて前歯を見せた。
「あはっ、あはははは」
デルビーが弾かれたように笑いだす。
こうなることはわかっていたから嫌だったのに…。
オルスの前歯は強化プラスチックのカバーで保護されていた。カバーは門歯列全体をぴったりと被うような形をしていた。

それ自体は多少ぶかっこうだが、人を笑わせるほどヘンではない。
ヘンなのはそのカバーにローマ数字が大きく入っていたことだった。
オルスのカバーには「II」という黒い文字が入っている。
数字のそばには船医のメモまで書き込まれていた。
医療室の船医は、
「不満はすべて却下だ。これから歯なんか折るなよ。それでなくても忙しいのに」
とオルスの抗議をはねつけた。なかなか乱暴な医師だった。
デルビーはテーブルに両手をつき顔を伏せるようにして、クックッと苦しそうな笑いをもらしている。
ギースシッピング社の武装クリッパー*「ベルタ・ギース」はローヌ・バルトと平行進路を取り続け、航行六十日目でシェルブリット射程内に入った。
船長ティプタフトはシェルドライバのレイモン・フレイとピナ・パワーズに総体的な作戦の確認を行ない、船側のシェルブリット準備はすべて完了したことをフレイに告げて、再度、出撃計画書(ミッションプラン)の早期提出を強く求めた。
攻撃を目的とするシェルブリットの具体的な出撃計画書はシェルドライバが提出し、船長とベルタ・ギースの承認を得ることになっていた。
だが、リーダーのフレイは出撃計画書をなかなか提出しなかった。
フレイには船長が、それにもしかしたらベルタ・ギースも、焦(じ)れていることがわかって

いた。
今、目の前にいる船長はかすかな怒りの匂いを身にまとってさえいる。
シェルブリット関連の作戦会議やブリーフィングはすべて記録に残される。何か失態があった場合、裁判の証拠とするためである。
船長は記録に残らない「体臭」で自分の個人的意見を表明しているつもりらしかった。船長の体臭は、警告、叱咤、それに軽い失望を連想させるものだった。子供を叱りつける教師の態度とも似ている…。
——あるいは侮蔑もあるかも…
フレイはそう考えて、腹の奥に渦巻くものを感じたが、
——……怒るのはやめよう。相手に合わせてコドモになることもない…
と思い直した。
「わかりました、船長。シェルのインターフェイスの調整がまだ不充分なのですが、明日までに出撃計画書を提出し、即時出撃要請に応えられるよう努力します」
「整備課はインターフェイスの調整も問題ないレベルで終了していると報告しているが…」
船長はフレイの答えを予期していたかのようにすぐに切り返した。
「船長は技術的な討論を望んでらっしゃる、と解釈していいですか」
フレイは注意深く言葉を選んだ。

船長は探るようにフレイを睨んだあと、
「技術的なことはいい。シェルのインターフェイスの調整はできているのか、できていないのか、どちらか答えてほしい」
——船長は元軍人だったな…
これは軍隊式の「引っかけ」問題だった。調整ができている、調整ができていない、そのどちらを答えても揚げ足をとられることになる。
以前のフレイだったら即座に「軍隊式間抜け」を演じただろう。どちらか一方をわざと不用意に選んでみせるか、
「わかりません」
と大声で答えるか…。
だが、三十歳を目の前にしたフレイはこうしたコドモ大人と形式的につき合うのにだんだん疲れを感じてきていた……。何もかも投げ出してしまいたい…という突発的な衝動を抑えて、
「ミス・パワーズ、私の発言を裏づけるため、君が答えてくれ」
フレイはかたわらにいるピナ・パワーズに船長の問いをふった。
ピナはすらりとした肢体の少女を思わせる女性（ジェンダー傾向女性＋＋）だった。
ピナも元軍人だ。独特の姿勢の良さで一目でわかる。
フレイの回答をギラギラした目つきで待ち受けていた船長は一瞬気をそがれた表情をみ

せて、すぐに元の威厳のある船長に戻った。
「ミスタ・フレイの機体のことはわかりませんが、私の機体はベストの状態ではありません。出撃に若干の危惧を感じます」
海軍式のまったく抑揚のない報告口調だった。
船長はピナの愛想のない言葉を聞いて、一瞬顔を赤くした。フレイは何喰わぬ顔で船長が爆発するのを待った。
が、船長は持ちこたえた。
記録されているのを忘れない程度の理性は残っているようだ、とフレイは考えた。
「…………君たちの言うことを信じて出撃計画書はもう少し待つことにしよう。…だが、この遅れは君たちの失点だということを忘れないようにしたほうがいい…」
船長は追及をあきらめたようだった。
船長室から解放されたフレイは疲れを感じるとともに、
──少なくともピナは会社側の人間ではないな…
と漠然と考えていた。
インターフェイスの調整云々は真っ赤な嘘だったから……。
フレイが出撃計画書を提出しないのには理由があった。
何か匂うのだ。

フレイが陸軍パイロットだった頃、敵戦線の奥深くで感じたあの雰囲気だ。
フレイの勘はよくあたった。なにか妙だ、と感じた地域には巧みに偽装されたSAM（短距離対空ミサイル）や対空地雷の罠（トラップ）が必ずあった。
彼は霊感や超能力といったものは信じていない。
意識が見逃してしまうような微細なサインを脳が受け止め、意識下でその意味を分析し展開（デコード）しているのにすぎない。そのため、意識にはその理由が理解できない…、とフレイは考えていた。

今回のこの船での仕事には最初から妙な雰囲気を感じていた。
シェルドライバの経験があるフレイはバルトライナー社の武装クリッパー「ローヌ・バルト」との契約に失敗した直後、ギースシッピング社から声をかけられシェルドライバとして契約を結んだ。
だが、搭乗してから初めて「ベルタ・ギース」は「ローヌ・バルト」を攻撃するためだけに、わざわざ出港するのを知った。「ベルタ・ギース」は武装クリッパーだったが、船倉はほとんど空だったのだ。
それに「ローヌ・バルト」にかつて戦友であったノーマ・クイックがシェルドライバとして乗り組んでいる……。
偶然、運命の皮肉、そして…

――世間は狭い、か……

フレイは苦笑した。

ただし、元戦友を敵にまわすのを躊躇(ちゅうちょ)しているわけではない。

少なくともフレイ自身にはそんなつもりはなかった。特に相手があのノーマだとしたら、臆(おく)した隙を徹底的に攻撃してくるだろう、とフレイは思った。

――そうではない……、ただ……妙だ……。

何が妙なのかはフレイにもわからない。

ただ、彼の勘がそう告げているのだ。

状況が明確でないときは動かない。これがフレイの戦術的鉄則だった。

――こういう場合、ノーマならどうするだろう……。

かつての相棒(パートナー)のことを無意識のうちに考える。

――彼女ならかまわず突撃する。それを引き止めるのが俺だったが……。

フレイの現在のパートナーはピナ・パワーズだった。

――ピナなら……。彼女のことはまだわからん……。

ピナはフレイと一緒に「ベルタ・ギース」に乗り組んだ新米のシェルドライバだった。

軍務経歴、シェルドライバの経験でフレイがシェル要員のリーダー役を引き受けることになったのだが、ピナの経歴*を読んだフレイは舌を巻いた。

ピナ・パワーズは海軍の攻撃型潜水空母のパイロットとして十七歳から二十歳になるま

での四年間に敵八十七機を撃墜したエースパイロットだった。紛争地域を転戦し、海軍長距離侵攻戦闘団という地上軍最高のエリート部隊に所属していた。
この部隊は作戦成功率と死傷率の高さで有名である。
そして、今までのところシェルドライバの死傷率はこの部隊を上回っていた。
――たいした新米だ…。だが、いったいどうして…
どうしてこんなところに来た？
ギースシッピング社が海軍と交渉の末、強引に引き抜く形で除隊したらしい。ピナの経歴は適当な言葉で飾られているが、フレイの目にはそう読み取れた。
これだけの経歴があれば、もっと安全で安定した職につける。宙間救助隊という別名を持つ戦闘のない宙軍に移るとか民間の地上勤務に落ち着くとか…。
フレイは個人的に興味を感じて、ピナにセックスパートナーにもなってくれるよう持ちかけた。
ピナはあっさりと承諾した。
軍のメジャーパイロットのパートナー同士は肉体的相性が合えばこうした関係を持つのが普通だった。フレイのジェンダー傾向は男性＋＋で、ピナは女性＋＋だった。
だが、寝室を一緒にしてもわかることはたかが知れていた。
六十日の共同生活でフレイの印象に残ったのは体操選手のように引き締まったピナの肉体と彼女がふともらした双子の妹の話だけだった。

ピナが六歳の時、双子の妹が溺死した、という話だ。フレイが妹の名前を尋ねるとピナは、
「忘れたわ。負け犬だもの」
と答えた。それきりの話だったが、フレイには強烈な印象を与えた。
船長室から自室に戻ったフレイは、以前から用意していた出撃計画書をロッカーから出して再読してみた。
ローヌ・バルトの航路に対するいわゆる「いやがらせ攻撃」がその主旨だった。
こうした作戦自体、既にルーティンになりつつあるな、とフレイは考えた。バルトライナー側のシェルドライバにも新米がいる。未知数の要素だが何かの障害になるとは思えない。
計画書自体には問題はない。
――だが……
フレイは室内を見回した。
ピナがベッドの端に物音一つ立てず座っていた。彼女はこちらを見ている。
共同生活を始めたばかりの頃は、フレイは彫像のように静かに自分を見ているピナに気づいてぎょっとしたこともあった。ピナが気配をまったく感じさせず、……獲物を見ている獣を連想させたからだ。

だが、もうそれにも慣れた。
フレイは自分の最後の懸念をピナにぶつけてみた。
「俺たち、誰かの作った舞台に上げられて操られている…。そんな感じがしないか」
ピナの返事はあっさりしていた。
「しないわ」
「そうか…」
「じゃ、誰が操っているの？　船長？」
「……奴も操られている側だな……。戦場のいちばん危険な局面…、今そんな感じがしないか」
フレイの唐突な言葉をピナは受けなかった。
沈黙が続いた。
ピナはベッドから立ち上がると、机のフレイに近付き肩に手をのせた。
「恐い？　ロートルパイロットさん」
「…よくわからん」
「私は恐いの好き。私たちなら恐がって、そして生き延びることができるわ」
ピナはフレイの頭に顎をのせた。
それはサインだった。
「ベルタ・ギースが見てるぞ…」

これはおきまりの台詞(セリフ)だ。

「見せてやるわ」

ピナはくすくす笑いで答えた。

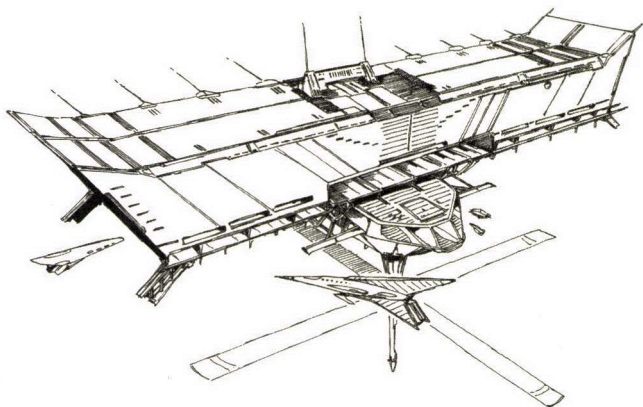
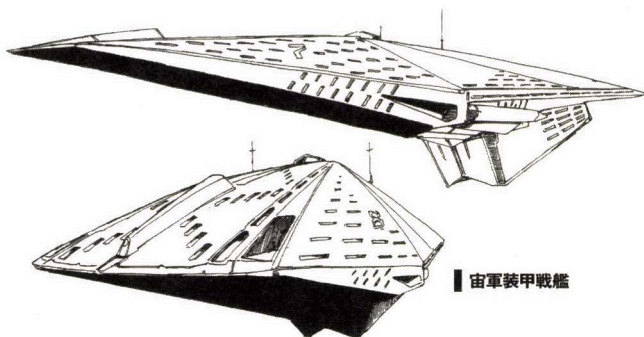
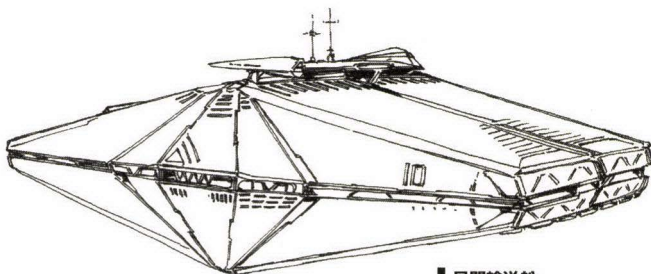
フレイはこの言葉のやりとりでいつもノーマを思い出してしまう。

ピナとノーマは似ている…。フレイはこのことを考えるといつも複雑な気持ちになる。

——恐がって、生き延びる、か…

フレイは目の前のピナの顔に集中するため、ピナの言葉を反芻(はんすう)した。

中継ステーションとローヌ・バルト

人間であるジーンライナーと比べればこういった人工建造物はあまりに「重工業」的なもどかしさがある。これは宇宙空間に点在する中継ステーションで巨大なドックといろいろな施設がある。船の乗組員のオアシスといったところか。ローヌが補給のために立ち寄った場所。

宙軍戦艦および民間輸送船

宙軍装甲戦艦

民間輸送船

5

封鎖面突破

Barricade Break

ベルタ・ギースはギースシッピング社最速のクリッパー級ジーンライナーであった。

だが、そのことが彼女にとっては不幸の始まりとなった。

ベルタはローヌ・バルトと競い、勝つことのみを会社に期待されたのである。ベルタはローヌ・バルトと同じ航路に投入され、善戦した。

しかし、ついに勝てなかった。

その理由はわからない。

ベルタとローヌの「性能」はほぼ互角だった。

ある航海では、ベルタはローヌ・バルトの航路記録を三日も早く走り切った。しかし、その数日前にローヌ・バルト自身が記録を更新しており、ベルタと船長は終着港に入ってからそのことを知った。

歓喜と落胆。

ベルタと船長を始めとする乗組員たちはそれにもめげず奮闘した。

努力が常に報われるのならベルタはローヌに勝つはずだった。

しかし、どうしても勝てなかった。

ギースシッピング社上層部のジーンライナーたち、すなわちベルタの親族たちは彼女の

ことをこう呼んだ。

「負け犬」

これを伝え聞いた船長ティプタフトは性格が一変してしまった。

冷静で温厚だったティプタフトはヒステリックで弱い立場の人間をいたぶるような人間に変貌してしまったのである。「ギースシッピング社最速のクリッパー」の船長から「負け犬」の船長に転落してしまったのがティプタフトには強烈なストレスとして作用したらしい。

航海士や管制官は船長のヒステリックで高圧的な声にビクビクしながら勤務するようになった。

どんなに競争の激しい共同社会でもこうした人物像は最終的にはリーダーとして認められにくい。航海士は秘かに転属願いを会社に提出し、甲板員たちは船長を「あいつ」と呼ぶようになった。

その変化に気づいていないのは当のティプタフトだけだった。

船長は自分の前に出るとビクビクしてしまう航海士たちを見て、自分の「父親ぶり」に満足し、一人でニヤニヤ笑うような人物にまで精神的に退行していたのである。

だが、こうしたことはベルタの悲劇の序の口だった。

ベルタはナンバー2のクリッパーでいることを許されなかった。

そのため、彼女は特別に任務を与えられることになった。

――ローヌ・バルトを追尾し、航行を妨害すべし

このギースシッピング本社からの指示はベルタをローヌのライバルという立場から引きずりおろすものだった。もはや、ベルタはローヌと正々堂々と競争することさえ許されていない。

しかし、ベルタは船長とともにこの指示を忠実に実行した。

今度の航海でそれも五回目となる。

その間、ベルタは誰にも何も語らなかった。

短距離の精神感応の一種と考えられているジーンライナー同士のおしゃべりも、合成された音声を使ってメジャーやマイナーに語りかけることもなかった。

ベルタはローヌ・バルトに負けないくらい美しいクリッパーだった。

人間型の人類であれば若い娘の年頃である。

だが、負け犬であるベルタは徹底的に孤独だった。

――虚無を旅するひと

これはジーンライナー船のことを歌った流行歌のワンフレーズだ。

地上では想像することのできない果てしない無の空間を旅するジーンライナー種は人間型の人類とは異なった精神構造を持つと考えられている。

しかし、本当のところは誰にもわからない。
宇宙船には顔がなく、流す涙もない。

だが、こうしたことは現実世界には何の影響も与えない。
せいぜい「かわいそうなベルタ」或いは「負け犬ベルタ」の歌ができるくらいのものだ。
でも、これまでのところ、そんな歌で何かが救われたためしはなかった。
武装クリッパー「ベルタ・ギース」がローヌ・バルトを追ってポート・クレアを出港したことは既にバルト船内に知れ渡っていた。
こうしたことは乗組員たちに秘密にしておけない。守秘義務があるはずの事項でさえ、誰かの口から洩れ、あっという間に艦内に広まってしまう。
先に述べたようにベルタがローヌにいやがらせを仕掛けるのは既に五回目だった。今までローヌのシェルドライバはベルタ側の航路妨害*をすべてはねのけ、ローヌの航行スピードに影響が出たことはなかった。
――だが、今回はいつもと違うだろう…
ローヌの乗組員全員がそう感じている。
前回の航海で双方のシェルドライバに戦死者が出たからだ。
いや、戦死者ではない。正式には事故による死亡者だ。
少なくともバルトライナー社とギースシッピング社の書類にはそう記載されていた。

戦闘による死者もこの二社にかかれば事故死となる。
死者たちはポート・クレアの土に還った。
ローヌ側の死者の葬儀には中年のジーンマイナーのコックだけが立ち会った。同僚であったノーマ・クイックは葬儀には出席しなかった。
地上の葬儀から帰ってきたコックは仲間たちにこう言った。
「きれいな墓地だったな。俺もあそこに埋められたいよ」
今すぐ埋めてやるぞ、という野次を無視して彼は付け加えた。
「でも墓の心配よりこれからの心配だな。奴らも二人死んでるんだ。お礼参りは覚悟しないとな」
徴兵された経験のあるコックの言葉には独特の凄みがあり、気の弱い者の背筋に悪寒を走らせるに充分な迫力があった。
――軍艦でもないのに戦争なんて……
――このまま世界政府が黙っているだろうか
――大丈夫だ、クリッパーが被弾したことはないはずだ
おしゃべりなマイナーたちは様々なつぶやきをもらし、メジャーたちは逆に重苦しい沈黙を守り通した。だが、全員の思いは一緒だった。
――これからどうなる？
そして、ローヌの乗組員たちから同情と軽い侮蔑のニュアンスを付け加えられて発音さ

れていたベルタ・ギースの名は畏怖のニュアンスを帯びるようになっていた…。
こうしたことをオルスは知らされていなかった。
仮に教えてもらったとしても何の感想も持たなかっただろう。
オルスはシェルのシミュレータ訓練でくたくたになっていた。
障害物がまれに浮かんでいる何もない空間を猛スピードで機動する訓練は凄まじい集中力を必要とした。シミュレーション空間の仮想のシェルの機体は障害物にほんのわずか接触したり、少し無理な機動をしただけで簡単に木っ端微塵に分解した。
オルスはシミュレータ空間で何度も死を経験した。
——これは死ぬ訓練だ…
シミュレータとして使っているシェルから這い出しながらオルスはこう考えた。数十分の訓練が終わると全身がガタガタと震え、整備員の手を借りないと立っていられない。
頭の中は空白状態だ。
そして、虚脱状態でベンチで休んでいるとノーマが現われてオルスに告げるのだ。
「接触による大破7回、高慣性機動による分解4回、敵に捕捉されること5回、仕上げは着艦失敗」
いつもノーマはスコアを告げた後、床に唾を吐く。
ノーマのような容姿の女性（女性＋＋）が唇を突き出すようにして唾を吐くのを見るの

は苦痛だった。整備員によると陸軍伝統の侮蔑表現らしいが、オルスにはノーマの美しさを台無しにするその身振りが見るに耐えないものに感じられたのだ。

それこそがノーマの計算なのかもしれない。しかし、オルスにはそれ以上考える力は残されていない。精神力が消耗しきると起きていても夢うつつの状態になる。今のオルスがそうだった。

半分失神したような状態で訓練を終え、眠りにつくと夢のなかは再びシミュレーション空間だった。

——早めに右にひねり込まないと、左半身がついて来れない！

夢のなかでもオルスはシェルの機動訓練をしていた。

何も教えてもらえず、いきなりシミュレータに押し込まれたオルスはノーマに思い切って質問をしてみたこともあった。

だが、何を聞いてもノーマの返事は一緒だった。

「お前は考えなくていい。努力しろ」

この言葉を聞くたび、オルスの身体はかっと熱くなり、抑えようのない怒りの匂いを発散させてしまう。ノーマはそんなオルスを動物でも見るような目で見返してくる。

頭の芯が痺れるような怒りの発作が収まると、オルスはこの境遇からなんとか脱出できないかと考え始めた。

――この元軍人の女は何も考えてない力押しのバカだ！

――こいつの下にいると死ぬことになる…

――…あの契約書……、あれをなんとかしないと…

この船から逃げるにしても、あの契約書を無効にしなければ駄目だ。あれさえあれば、バルトライナー社はオルスを一生、裁判所に缶詰にすることもできるのだから…。

疲れ切った頭は契約書をなんとかする方法を模索するが、何も思い浮かばない…。

こうしてひと月近くが経過すると、オルスはいつの間にかシェルの基本的な機動運動をマスターしていた。

もう訓練の後に立っていられなくなることもなくなったし、最大の難関だった超高速の着艦も失敗しなくなった。武装を扱う訓練はまだだったが、実際に宇宙に出て着艦の訓練も終えた。

オルスは不遜(ふそん)なほどの自信を取り戻した。

ノーマのような薄のろの指導でここまで来れた自分には才能がある…、いや、天才なのではないかとさえ思った。

たまに食堂で出会うデルビーやキムに対する態度も変わった。

デルビーは憔悴(しょうすい)したオルスを気遣って訓練や仕事の話題を避けてくれていたのだが、オルスは自分の方からベルタ・ギースの所在を聞いたりするようになった。もちろん、知っ

ていても喋れない事柄だと知っている。
オルスの急な変貌にとまどうデルビーにこう言ってみたこともある。
「いつも気遣ってくれてありがとう。でも、もう大丈夫だ。自分にはシェルドライバの才能があるらしいってことが、だんだんわかってきたんだ」
キムにはこう言った。
オルスは心の中でひそかにほくそ笑んでいた。
——俺は「勝利者」なんだ
「敵シェルだけじゃなくベルタ本船を攻撃させてくれたらいいのに」
呆気にとられた顔のキムを見てオルスは考えた。
——大人になりきれない哀れなマイナーめ……
キムは今までとは違うよそよそしい言葉遣いで、
「君は意外と大胆な人間だね……」
とだけ答えた。

先に「オルスはいつの間にかシェルの基本的な機動運動をマスターしていた」とあるが、これは正確に言えば「シェルはいつの間にかオルスの基本的操縦パターンをマスターしていた」となる。
それはこういうことだ。

シェルには学習能力がある。シェルはパイロットの失敗のパターンを学習し、パイロットが失敗しないように操縦を補佐する。

また、パイロットがある操作をした時に、その操作が何を意図しているのかを学ぶことができる。

極端な話、あるパイロットがシェルの左腕を上げる操作を右腕で行ない続ければ、そのシェルは右腕で操作しなければ左腕を上げることができなくなる。この場合、右腕で操作してシェルの右腕を上げさせる一般的だと思われる操作と異なるのはシェルの学習スピードだけである。

このため、すべてのシェルはそれぞれがパイロットがカスタマイズした機体となる。もちろん、シェルの学習能力に大きな負担をかける人間もいれば、ほとんどの操作をマニュアルで実行しているパイロットもいる。長時間、搭乗すればシェルがパイロットの意思を正しく解釈する可能性は高くなる。

着ているうちに自然に身体に合ってくるオーダーメイドの服のようなものだ。

この学習内容はソフトウェア化して他の機体に移植することができる。レイモン・フレイはベルタ・ギースに乗り込む時に今まで育ててきた自分のソフトウェアを持参してきていた。

さらにこの学習内容は複数のシェルを接続して互いに「会話」させることで変異させることができた。フレイは白紙状態のピナ・パワーズ機と自分の機体を接続し、機体の基本

的挙動をパワーズ機に教えこんでから、ピナのシミュレータ訓練を開始した。
ノーマはオルスを白紙状態の機体で訓練していた。

これは方法論の違いだった。
長距離侵攻戦闘機と対戦車攻撃機という相違があるにしろ同じパイロットだったピナとフレイ。それに対してオルスは人間の方も白紙状態だった。
ノーマはこの圧倒的にもみえる不利を承知でオルスと契約したのである。
ノーマには仮説ではあったが持論があった。それは、
――シェルは航空機ではない
というものだった。
至極当たり前のことのように思える。
だが、開発元のライナーメタリカ社がシェルのテストパイロットに元宙軍のパイロットを選んだように、シェルは既存のカテゴリーに分類されがちだった。潜在意識のもとで。
先の航海でノーマは非常なプレッシャーに苦しんでいた。
相手となるベルタ・ギースのシェルドライバ二人は元宙軍パイロット、自分の相棒は元海軍の腕利きだったのである。
対戦車攻撃機が技量を必要としないとはとても言えない。だが、超高速で機動するシェルとは最もイメージ的にかけ離れたのが低速で地上すれすれを飛行する対戦車攻撃機であ

るのは事実だった。
ところがいざふたをあけてみると生き残ったのはノーマひとりだった。
これは偶然や幸運だろうか？
ノーマの理性は否と答えた。
――私は他の三人を技量で圧倒していた
――三人は共通する機動をシェルにさせていた。それは航空機の機動を連想させた……宙軍の戦闘機は航空機とは言えないが、戦術や運用法は大気中を飛行する航空機の変種として扱われているようにもみえた。
――シェルは航空機ではない
――これがもし正しければ、シェルを航空機というカテゴリーに入れてしまうのは致命的な誤りだ！
ノーマはこのことをローヌ・バルトと相談してみる気になった。

オルスはこの事も知らなかった。
そして、ノーマにも知らないことがあった。
レイモン・フレイ、ピナ・パワーズにも…。
ポート・クレア出港後、六十日目。外宇宙を航行するローヌ・バルトの走査（スキャン）システムは

航路を交差する軌道を持つ人工の飛翔体を発見した。
　これは間違いなくベルタ・ギースのシェルだった。
　パースウォーデン船長はシェルブリットをオルゴンボックス・ブロック甲板部に依頼した。当直のC群管制官はデルビー・アイバース。彼女がシェルの管制を担当する。
　パースウォーデンはミス・アイバースに指示を出しながらほっとしている自分に気づいた。
　――こちらの予想より一週遅れだったな……
　ベルタの出港がわかっている以上ギースシッピングのシェルの襲来は必然だった。
　この十日近く、ローヌの管制区はベルタのシェルの影に怯えながら過ごしてきたのだ。航海長ノヴァーリスなどは敵シェルが襲って来ないのではなく、管制官が相手を見落としているのではないかと疑い、メジャーのレーダー手と口論までしていた。
　――何はともあれ見落としではなかった…
　パースウォーデンはローヌ・バルトから射出され加速してゆく二機のシェルをホログラムスクリーン上で確認し、それを頼もしく思い、
　――だが…、奴らはどうしてこんなに遅れたのか
と考え始めたところで体が再び緊張するのを感じた。
　――何か特別な準備でもしていたのか？
　パースウォーデンは肘掛けに腕をつき手で顎をしごいた。

今回の航海には心配の種がいくつもあった。

戦死したベルタのシェルドライバの交替要員の氏名経歴が不明であるのもその一つだった。バルトライナー社調査部は急にガードがかたくなったギースシッピング側の防諜体制のために割り出しに失敗したのだ。

――それに、あのミスタ・ブレイクは使えるのか？

パースウォーデンの胃はシェルの一機はあのオルス・ブレイクだと思い出した途端、キューと収縮した。

――ノーマ・クイックめ！　くそいまいましい！

ホログラムスクリーン上の二機のシェルはたちまち頼もしい存在からくそいまいましい存在に転落した。パースウォーデンは上着のポケットからピルケースを取り出して、錠剤を口にほうりこんだ。

――うむ…、薬を飲む船長の信頼度は低下するというが、この胃の状態では…。いや、それよりノーマ・クイックめ。この船を降りたら絶対に出世できないように工作してやるぞ！　それにしても…、この苦難の連続はひょっとしてロース・バルトが私をテストしているのかも…

船長は心配の種に事欠かなかった。

電磁カタパルトから機体が離れた途端、メインブースタ*が点火されシェルはさらに加速を始めた。

オルスの意識の深い部分はこの加速に悲鳴をあげた。
――もうたくさんだ！　スピードなんか出すな！
計器表示よりも有視界部分を多く取ってカスタマイズされたオルスのシェルのコクピットからはもうローヌ・バルトが見えなくなっていた。
「こちらブレイク、射出後第二巡航加速中」*
「こちらバルト管制、確認。お気をつけて。……本当に気をつけてね…」
途中から小声になったこの通信はデルビーの声だった。
「了解。バルト管制、ありがとう」
通信途中で補助ブースタがガーンという騒音とともに切り離され、少し離れたところで爆砕された。こうした状態変化に関するインターフェイスはオルス機ではオーバーとも言える「表現様式」となっていた。すべてノーマの指定だ。
最初の射出訓練後にオルスはコクピット内の騒音のひどさをノーマに訴えた。ノーマは
「お前のようなやつでも、これだけ音がすればわかるだろ」
と言ってコクピットの外に唾(つば)を吐いた。ノーマはこの設定の変更を許さなかった。
――ノーマの機体はこんな音しないはずだ…
ノーマのことを考えた途端、オルスはやるべきことを思い出した。体に密着したコクピットのどの部分かがとっさにわからなくて躊躇(ちゅうちょ)した隙にノーマからの通信が来た。
「どうした？　さっさとリンクしろ」

——左中指！

オルスのシェルはノーマのシェルとリンクした。

見るといつ現われたのかノーマのシェルがすぐそばにいた。このスピードでは危険なくらい近い。オルスの体はビクリと反応した。

しかし、オルスのシェルは軌跡を乱すことなくノーマのシェルに張り付いたように加速を続けている。オルスのシェルはノーマ機とリンクして、今は半スレーブ状態で制御されている。

ノーマ機はオルス機にアンカー*を打ち込んだ。通信が有線に自動で切り替わる。

「ショートブリーフィングだ。質問するな」

ノーマの顔がディスプレイの一角に現われる。オルスはまたノーマが冷たく怒っているのではないかと予想していたが、ノーマの表情は船内では見たこともないほど生き生きとしている…。

「今回は遊覧航行だ。敵シェル二機を相手にする」

ディスプレイに宙域図が転送されてきた。無数の光点が見える。

「敵シェルはサカイ重工製長距離型シェル、パイロットの経歴は不明。バルトの航路前方に小型機雷を多数散布し封鎖面を形成しつつある。シェルの走査（スキャン）能力では機雷は長距離ではシェルと区別しにくい。機雷には近付くな。シェルにも反応する場合がある。これは忘れるな」

サカイ重工製シェルと機雷の画像が表示された。ベルタのシェルは軽快な運動性能を予測させるフォルムだった。
「戦術は機雷に対する縦深一撃離脱。*反転攻撃や反撃はしない。航路中央の必要な機雷だけ破壊する。お前の機体は武装していない。*リンク列機として私の背後を守れ」
　ノーマ機は両腕に銃砲のような兵装を装備していた。オルスにはそれが何だかわからなかった。
　ノーマにいろいろと質問してみたかった。だが、質問は禁じられている。
「お前は前以外を見てろ」
　ノーマ機はそう言うなり、いきなりアンカーを引き抜いて加速した。
「第一巡航加速後、封鎖面前面で戦闘加速*」
　メインブースターが一瞬最大加速域にブーストされ減速、前方に出たノーマ機は航路修正する。リンクされているオルス機も続いて荒々しく航路修正した。何かがぶつかるような音がした。
「戦闘加速カウントダウン、5、4」
　ノーマの声ではなく合成された音声だ。
　第一巡航加速に入って数秒しか経っていない。走査（スキャン）ディスプレイにも封鎖面は一つの光点としか表示されていなかった。
「3、2」

オルスはまだ戦闘加速の経験がなかった。本当なら今日訓練するはずだったのだ。メインブースタが急にうるさくなってきた。

「1…」

次に何かが爆発した。

オルスは思わず肺の中の空気を残らず吐き出し、妙な声をあげた。

最大加速は数秒も続かなかった。メインブースタは故障でもしたようなカラカラという音を立てている。

周囲を見回すのが何故か難しい。

「まわりを見てろ」

ノーマの声が聞こえたが、オルスの目は走査(スキャン)ディスプレイに釘付(くぎづ)けになっていた。小さな光点がみるみる膨張し、星を散らすように多数の光点となって展開している！

――封鎖面だ！

面とはいうものの奥行きがかなりある。外縁の光点が走査(スキャン)ディスプレイの倍率からはみだしコクピットの中を飛んで消え去った。

すぐにノーマ機が点滅した。

いや、射撃しているのだ。

ノーマ機が手にしていた銃砲は光学散弾砲*だった。

目にうまくとらえられないような光の点滅の中をオルス機は微妙に機動しながらノーマ

機に追随している。
　もちろん、ノーマ機とリンクしているからこそ可能な機動だった。オルスは凍りつき、シートに張り付いた。
　轟音と衝撃。装甲板に被弾！
　ノーマ機が視界から消え、すぐに現われた。
　ノーマ機はもう射撃していない。
　二機のシェルは封鎖面を通過していた。
　メインブースタは減速しつつあり、封鎖面は走査ディスプレイ上で小さな光点に戻っていた。
「第三巡航速度まで減速、バルトを待つ」
　ノーマの声を聞いてオルスは我にかえった。前頭部がズキズキする。
「了解」
　自分の声が震えていないのを聞いてオルスは安心した。
　唐突にノーマが聞いてきた。オルスは質問の意味がわからなかった。
「あれを見たか？」
「何ですか？」
「…………見てないか…」
「……」

「封鎖面通過中、ベルタのシェルが一瞬並走していた。お前の後ろだ」
「…そういえば、通過中被弾しました！　右大腿部装甲板です」
「……いや、奴は武装してなかった…。ぶつかったのは機雷の破片の塵だろう…」
「…塵……」
　オルスは何も見ていなかった。
　沈黙がしばらく続いてノーマは言った。
「すぐにバルトが追い付いてくるぞ。反省は帰ってしろ」
　数秒後、バルトから通信が入った。
「こちらバルト管制。クイック、ブレイク両機を確認」
　デルビーの声をオルスはなつかしく感じた。
「こちらクイック。デルビー、首尾はどうだった」
「バルトは船速を維持。残存の塵の雲をバルトの砲塔で射撃しました。*砲塔制御ソフトウエアの特許でミスタ・キムは一攫千金です」
　デルビーの声の後ろで船長らしい咳払いが聞こえた。
「了解。帰ったらキムを拘束して飲み会だ。船長抜きで」
　管制室内で低く抑えた笑いがおこった。再び咳払い。
「了解です。着艦アプローチ待機*」
「ブレイク機から着艦させる。パンツのゴムはゆるゆるにしろ」

「了解。こちらバルト管制。ブレイク機着艦アプローチ待機」
「こちらブレイク機。管制指示待機中」
「了解、管制カウントダウン開始。……気を引き締めてね」
デルビーの声はやはり途中から小さくなった。
ノーマの声が割り込む。
「それは高価な機材だ。死んでも持って帰れ」
ノーマ機は加速してオルスの視界から消えた。
ローヌ・バルトへの着艦は一発勝負だった。
もし着艦に失敗してもローヌ・バルトは減速しない。そのことは契約書に明記してあった。再加速してバルトに追い付くのにはたぶん燃料が足りないだろう。着艦に失敗して宇宙に取り残されたらバルトライナー社の小型船が回収に来るまでそこで待つことになる。何カ月か…。
オルスはデルビーの声に導かれながら、急速に接近してくるローヌ・バルトを待ち受けた…。
「射撃されたらどうするつもりだった」
フレイの声は感情を抑えていた。
「リンクされた列機の死角にいました。それに一番機は機雷以外を射撃しません」

ピナ・パワーズは海軍式の抑揚のない報告口調で答えた。だが、顔は笑っている。それはフレイには見せたことのない笑顔だった。

音声のみの通信だったのでレイモン・フレイはその美しい笑顔を見ることができなかった…。

レイモン・フレイとピナ・パワーズのシェルはベルタ・ギースに向かって航行中だった。小型機雷による航路封鎖は失敗した。ローヌ・バルトは減速さえしなかった。だが、これは予想通りのことだった。

フレイにとって予想外だったのは、ピナがバルトのシェルをからかうように接近、並走したことだった。フレイ機、パワーズ機ともに*機雷コンテナのために非武装だった。

フレイは上司面（づら）することを避ける男だったが、ピナのこの行動だけは黙認しておけなかった。

「……相手が自分の相棒ごと敵を射撃する奴だったらどうした？」

「まさか…」

ピナの顔から潮が引くように笑みが消えた。

「…考えられません」

「……そうだな…。それは考えられないことだ…普通は」

フレイの声からは何も読み取れない。

ピナは沈黙を守ったまま考えた。

——武装さえしていれば何もかも証明できたのに…

ピナの表情は恐ろしく冷たいものに変貌していた。この顔もフレイには見せたことがなかった。

——反論など許さない！　この世界を叩き潰しても証明してやる！

帰還したフレイ機とパワーズ機を収容したベルタ・ギースは進路を修正し、次の作戦宙域へ向かった。

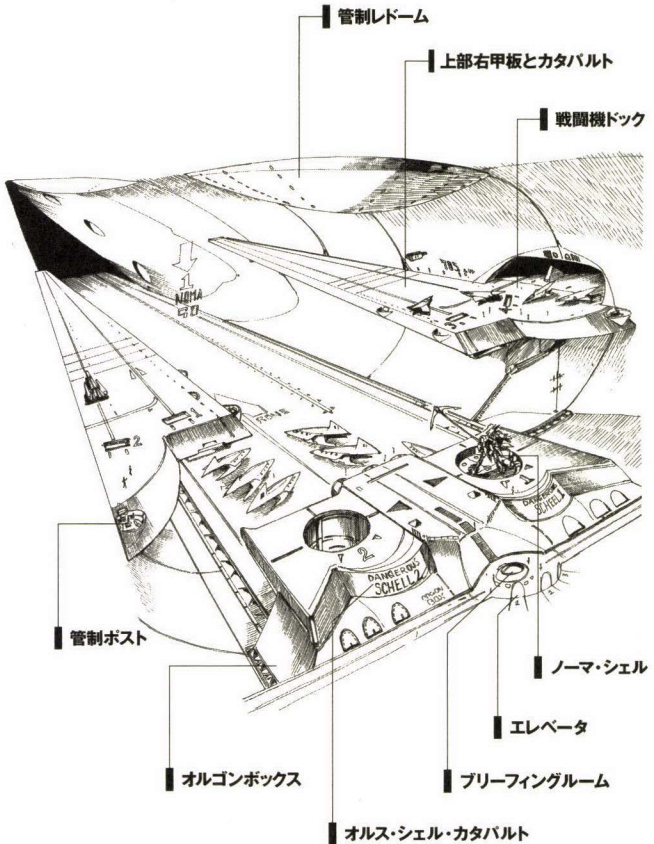
ベルタはふと思った。

——このまま加速を続ければ、ひょっとして…

そして遠く青く光る星ぼしを見ながら考えた。

——もういちどあの子と競争したい…

ベルタの船体は柔らかく光り輝いていたが、それを見る者はいなかった。

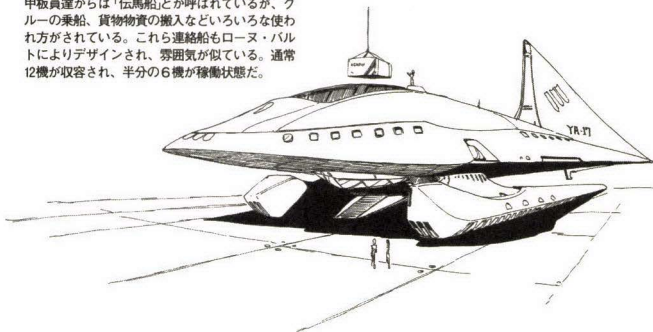
下部メインデッキとオルゴンボックス

中央メインデッキ

ローヌ・バルトの下部中央メインデッキである。2階建ての構造をもつこのメインデッキだけで船体の下部を3分の1消費している。200メートル級の滑走路が上下に4本。カタパルトは発進専用をあわせて、7本をもつ。上部甲板のカタパルトは左右共に発進専用で、主に戦闘機が使用する。ここには着艦はできない。ここから発進した戦闘機は下の滑走路に帰ってくる。下の主甲板滑走路には6機の連絡船が見えるが、本来は後方デッキに収納されている。真ん中のカタパルトはシェルの帰艦時と大型輸送船や民間船を収艦するときに使う。発進、着艦状況は正面に大きく3次元投影される。

オルゴンボックス

手前にノーマのシェルがエレベーターで上がってきているのが見える。シェルを載せているこの大きなブロックが「オルゴンボックス」と呼ばれるシェルの収納、発進場所である。 オルゴンボックスは上部甲板と下部甲板の間に位置し、オルゴンボックスのプレートがそのまま巨大なカタパルトになっている。上にも下にも作業員がいる中を電磁エネルギーではじけるように飛び出していくシェルのカタパルトは、大変に迷惑そうとも思えるが、意外やまったく問題なく、下部甲板作業員の頭の上をシェルを載せたカタパルトが豪快にかっ飛んでいく。電磁エネルギーのために猛スピードで飛び出しても、船体衝撃がほとんどないためだ。このカタパルトの下にシェルの整備ハンガーがある。これらを総称してオルゴンボックスと作業員は呼んでいる。2つのシェルのカタパルト中央、一番手前にあるのはブリーフィングルームで、ここは電磁シールドされていて空気がある。3つあるのは艦内からのアクセスエレベータ。デルビーがここからよくシェルを見学していたようだ。メインブリッジにいる管制員のデルビーは、直接オルスやノーマの発進を見ることはできないからかもしれない。

トランスポーター

ローヌ・バルトに搭載されている汎用連絡船で、甲板員達からは「伝馬船」とか呼ばれているが、クルーの乗船、貨物物資の搬入などいろいろな使われ方がされている。これら連絡船もローヌ・バルトによりデザインされ、雰囲気が似ている。通常12機が収容され、半分の6機が稼働状態だ。

6

ライフゲーム

Life Game

この航海での最初のシェル同士の接触の後、ローヌ・バルトは予定通り加速を続け、カ*ーニハン機関(ドライブ)起動速度に達した。

バルトはポート・クレア外宙域から空間転移*し、数十光年離れた外宇宙に出現した。

そこ、ポート*・ヴィアネイ外宙域には宙軍の哨戒(しょうかい)船が常駐していた。哨戒船はカーニハン機関を使って航行する宇宙船の監視を続け、航行予定にない船は臨検することになっている。

通常空間にワイプ*・インしたローヌ・バルトはこの哨戒船の船籍照合通信を受け、返信した。

「我、バルトライナー社属ジーンライナー船ローヌ・バルト。無国籍船。ポート・リヴァプールへ向け航行中。ポート・ヴィアネイ寄港予定」

宙軍の哨戒船は軍艦というよりも浮かぶデータバンクだった。すぐに航行予定を確認して返信する。

「ローヌ・バルト、船籍と航行予定を確認した。ところで、ちょうど今、売れる情報がある。買うつもりはあるか？」

バルトの船長パースウォーデンは自分名義の銀行口座からポート・ヴィアネイに在住す

る若い女性の個人口座に二百五十万カル*を移すよう指示した。
「ローヌ・バルト、入金を確認した。*新鮮な林檎(りんご)を暗号化してそちらに転送する」
バルト管制室は哨戒船から*ノンキーの配列暗号データを受け取り平文転換(デコード)した。
——ギースシッピング社の武装クリッパー、ベルタ・ギースが二時間後にこの宙域にワイプ・イン予定。これは*航路安全規定より一時間早いため当船は警告を発する予定。
——ギースシッピング社の低*速貨物船が入港をキャンセル。ポート・ヴィアネイのドックには入港中のギースシッピング社所有大型貨物船とベルタ・ギースが並んで停泊する模様。この大型貨物船の荷は*辺境自治政府機密扱いで宙軍も内容を把握せず…。
手元に転送されたこの文面を読んだ船長と航海長はかろうじて驚きを隠し通すことができた。ベルタ・ギースがこちらを追い上げてきているのは知っていたが、二つめの謎の大型貨物船は……。
——奴ら、何かベルタに積み込むつもりらしい…
何を積み込むのかはわからない。だが、ろくなものではないことはわかるし、さらにそれがろくでもない事態を引き起こすのをイメージして船長の胃は痛んだ。
「では、よい航海を」
宙軍の哨戒船は最後にノイズのひどい通信を送ってきた。空間転移後も加速を続けるロ

ーヌ・バルトは哨戒船の通信可能領域から既に外れつつあったのである。

最初のシェルブリットから帰還してこのかた、オルスは沈み込んでいた。

着艦するとノーマはすぐにシェルのフライトデータを分析、再生してみた。デルビーと航海長ノヴァーリス、オルスがその場に立ち会っていた。

ノーマは何も言わず、オルス機の背後に一瞬だけ現われるベルタのシェルの画像を何度も繰り返し再生した。

「やる気満々の敵だと思っていたが…」

ノーマは敵シェルの画像をディスプレイ上で拡大してみせた。

ベルタのシェルには星を貫く雷光のマークが描かれている。

「これが…、どうかしたのか」

ノヴァーリスが不満気に尋ねた。このマークの意味がわからないのだ。オルスやデルビーにもわからない。

バルトのシェルにもこうしたマーキングがつけられている。オルス機には拳骨(げんこつ)のマーク、ノーマ機は古風な丸*い爆弾をつかんだ鷲(わし)のマークが描かれている。

特に珍しくもなかったが、オルスはこうしたマーキングの意味や由来をまったく知らないのにこの時気がついた。

「このマークは*海軍長距離侵攻戦闘団(NLAC)だ。ベルタのシェル搭乗員の一人は最高の腕利き…

というよりプロの殺し屋だな」
オルスたち三人もNLACの名は知っていた。娯楽を装った世界政府のプ*ロパガンダ映画で有名だったのである。
その映画の内容はNLACのたった一人の陸戦隊員が反*政府ゲリラ数百人を皆殺しにするという荒唐無稽のものだったが、部分的に実話を元にしていることを知っている人間には戦慄すべきものだった。
本物の陸戦隊員は野性的な二枚目俳優よりももっと抜け目なく敏捷で、しかもまったく無害に見える…という点を除けばよくできた映画だったのだ。
ノーマはノヴァーリスとこれからの戦術変化について話し、船長を交えて話をするために部屋を出て行った。オルスには目もくれなかった。
ノーマに怒鳴りつけられるか、ことによると殴られることを覚悟していたオルスは拍子抜けした。リンクされた列機の義務である後方監視を怠り、敵に背後をとられたことさえ気がつかなかったのに…。
これ以降もノーマはこの件については何も言う気がないようだったのである。
オルスの失態は不問とされたのだ。
このことはかえってオルスにはつらい仕打ちとなってのしかかった。
オルスは自分の劣等感や負目を外部に敵を作ることで発散させるタイプの人間だった。

この場合、ノーマが自分を叱ってくれさえすれば、かえって、

――こんなウスノロが偉そうに…

と反発することであらゆる問題が解決したのである。

少なくともオルスの内面では…。

オルスには自分が世界でいちばん正しい人間であらねば満足できない、という子供っぽい性質があった。この世界の人間の多くがそうであるように…。

同時に、オルスの場合には神経症的なところが多分にあった。それは自分の犯した間違いをまったく認められない性質だったからである。

それが、自分が「遺伝子特異体」であることを知った時から強まったことは、オルス自身も意識はしていた。

――恐がらなくて大丈夫だよ、将来キミはジーンメジャーと同じくらい優秀な大人になるんだから

皮肉なことに、あの若いインターンの言葉が、これまでオルスのアイデンティティを救ってきたのだ。

――自分は選ばれた人間だ

――マイナーなんかじゃない

マイナーを蔑(さげす)むことで、オルスは自我を正当化してきたのだ。

だが、メジャー並に優秀なはずの自分が、初の出撃であの失敗をやらかしてしまった。本当のメジャーとの能力の差を知り、オルスのアイデンティティはぐらついていた。能力差を経験差だと思う余裕はオルスにはなかった。

デルビーも失敗を知っている。

いや、デルビーだけではない。船長や航海長や管制官や航海士や…、非番だった人間の間にもあっという間に広まるだろう…。

出撃前までは自分のことを「勝利者」だと自惚れていただけにこれはショックだった。本来なら自分のことを叱ってくれるはずのノーマも奇妙な沈黙を守っている。オルスは敵を作り、激しく相手を攻撃して現実から逃避することもできなかった。はたから見ればコメディだが、オルスには地獄だった。

オルスは別の解決法を見いだした。

それは、我々の世界でも、ごく一般的な精神的葛藤の解決方法だった。他に責任を転嫁するのである。

——悪いのは俺じゃない！

オルスは考えた。

——シェルだ！　俺のシェルの性能が悪いんだ！

オルスは解決法を発見した。
――ノーマのシェルの方が明らかに性能がいいから、あんな事が起こるんだ…
――でも、だからってどうすればいいんだ…
――会話だ！　シェル同士をコミュニケートさせて情報量を引き上げれば…
前に述べたようにシェルは接続して情報を交換することができる。これは相手の情報を吸いだして自分のものにしてしまうこともできるということだ。
オルスは頭のいい人間だった。
しかし、自分の力でシェルの経験値を高めることにはまったく思い至らなかった。
そのかわり他の人間から盗むことを思いついた。
――情報の均等化。これこそフェアプレイだ！
オルスは奇妙な論理でそれを正当化した。
自分でもそのおかしさには気づいている。だが、オルスは自分が論理ではなく感情で動く人間だという意識もあった。
負け犬にならないためには何だってできる。
これがオルスの行動原理だった。
皮肉なのは、これまでオルスの周囲に彼を負け犬と呼んだり、失敗を責めたてるつもりの人間がひとりもいなかったことである。

ノーマも例外ではなかった。

舞い上がったかと思うと、急に落ち込む。激しく反論してくるかと思うと、ひたすら沈黙を守る。狂喜したかと思うと、激しく怒り始める。

オルスは感情の両極のどちらかにいる青年だった。

彼に中間や安定した平衡状態というものはない。

使いにくい部下であるのは確かだったが、だからと言ってノーマは匙（さじ）を投げるつもりはなかった。

それはオルスのあらゆる行動の動機が「自分に対するコンプレックス」にあることをノーマがよく理解していたからだった。

もちろん、理解といっても底の浅いものであることはわかっている。自分は精神分析医ではないし、素人分析を振り回すつもりもない。

ただ、理解…、いや共感とでも呼ぶべきものがノーマにはあった。

オルスが痛みを感じているのをノーマは知ることができたのである。

知ることはできる。

だが、それを癒（いや）してやる方法はわからなかった。

——難しいな…、人間は……

ノーマは今さらのように考えた。

今まで通りの軍隊的な対応も限界だろうとも思った。これまでの同僚はみな元軍人のジーンメジャーだったのである。自分の言いたいことを自然と相手が察知してくれたし、相手の反応も予測できた。構成員が均質な集団独特の居心地のよさがあった。

オルスはそれにあてはまらない。

民間人で、ジーンマイナーで、しかもマイナー中の少数派「遺伝子特異体」だ。

それでも、ノーマは軍隊方式を押し通すつもりでいたのである。軍のやり方は乱暴だが、効率はいい。一部の企業が新人教育に採用しているのをみてもそれはわかる。

だが、オルスに対しては非効率的な方法にみえた。

オルスは誰かにものを教わることのできない人間だった。

教師や先輩に何かを教えてもらうと、授けられた知識そのものよりも「教えてもらっている自分」という人間関係の方に意識を強く引かれてしまうタイプの人間だった。

このタイプの人間は、実際に道で転んでみるまで自分は転倒などしないと思い込む。自分で実際に経験するまで何も信じようとしない。

——オルスには転んでもらうしかないな

とノーマは考えるようになった。

突き放したり、相手の失敗を願っているわけではない。

——こいつは自分流の転び方を学んで生き残るだろう

という漠然とした期待がノーマにはあったのだ。

「生存」或いは「生き残る」という言葉を聞くとノーマがいつも思い出すイメージがある。ライフゲームと呼ばれるコンピュータシミュレーションである。

遠い昔のように思える学校の初等教育課程でノーマもこのコンピュータシミュレーションをプログラミングしたことがあった。最初は、大人たちが与えてくれた子供向けの玩具、だと思っていた。

このシミュレーションは仮想空間のなかでセルオートマトン*と呼ばれる自立型のプログラム単位が生存競争を繰り広げるのを観察するものだった。

セルオートマトンは互いに情報を交換し、セックスして増殖する。個体の特徴を次の世代へ伝える遺伝子のような要素と死が存在する世界。生のシミュレーションがライフゲームの目的だった。

印象的だったのは、当時のノーマの学級の中でプログラミングが得意だった生徒が赤と緑色の二色どちらかだけで構成されたシミュレーションの世界を再構成して、全体像が虹色のグラデーションを描く美しいパターンを作ったことだった。

子供たちはその色彩と動きの美しさに魅せられ、その作製法を互いに教えあった。

「変異と世代交替の変数項を――」

たいして難しい操作ではなかったので、すぐに学級内の全員が自分のプログラムを書き

換え、別のもっと複雑なパターンを描くプログラムを組み上げてしまう子もいた。
それを見ていた教師――プログラミングを教えていたのは十八歳の美しい男性++だった――は即興で今の教室内の情報伝達の様子をライフゲームでシミュレートしてみせた。一人の生徒を示す赤い点が突然、虹色に輝き始め、それが教室のなかに次々に伝わるのがディスプレイ上に描かれてゆく。
出来の悪い子の様子まできちんとシミュレートされていたので、生徒たちはわきあがるように笑った。
ノーマは自分を示す虹色の光の点を見ながら笑ったことを憶えている。
そのライフゲームを再び目にしたのが、ここローヌ・バルトの船内だった。

ノーマはデルビーと食堂で出会うとよく一緒に食後の散歩に出かけた。
散歩と言っても立入り制限のない通路を歩くだけだが、そうした散策を目的として作られたブロックである「ヌーディストビーチ」に行くよりもノーマの性に合っていたし、道々で出会うデルビーの交友関係を観察するのも楽しかったのだ。
デルビーは船内の全員と顔見知りになり、おしゃべりするのが趣味のようだった。
「ねえ、ノーマ、これ見て」
デルビーがノーマの腕を引いて言った。デルビーは事あるごとにノーマを自分たちの会話に参加させようとした。ノーマが無口で冷たい印象を相手に与えることもあって、たい

ていの場合、それは失敗していたがデルビーはあきらめなかった。
ノーマはデルビーのそうした前向きの姿勢や優しさに感謝して、気が乗らないなりに努力はしていた。
デルビーが示す先にはひょろひょろと痩せた男が携帯端末を前にして座っている。火器管制員をしているキムとかいうジーンマイナーだった。C群管制官だが、デルビーと話しているのを見たことがあるくらいで直接会話したことはない。が、シェルのプログラム関連のミーティングで専門整備員たちと盛んに意見の応酬をしていたのを見て印象には残っていた。
「キムのコレ、すごく面白いわよ」
ノーマはキムの携帯端末をのぞき込んだ。端末のウィンドウ内をチカチカ光る多数の赤い点が動きまわっている。
——なんだ…、ライフゲームじゃないか…
これは退屈なことになりそうだと思ったが、ノーマは話を合わせるために言った。
「ライフゲームか。懐かしいな」
「でも、コレ、普通のライフゲームじゃないのよ。キム、見せてあげてよ」
デルビーがキムにせがんでみせた。キムは端末のファンクションキーを押した。
ディスプレイ上の平面的なマトリックスが歪むように変換されて、透視図のような立体構造物になった。それはローヌ・バルトの船体のようだった。

「これはバルトか」
「そう、これは別の世界の別のローヌ・バルト。えーと、あなたは…」
キムは少しドギマギしたようにノーマに尋ねた。マイナーらしい反応だった。
「索敵要員(シェルドライバ)のノーマ・クイックだが、それが…」
キムの指がキーボード上を走る。ディスプレイの別のウィンドウにノーマの名前が表示され、キムがＥｎｔｅｒキーを二度叩(たた)くと画面上にさらに別のウィンドウが現われた。
ウィンドウの名前は「ノーマ・クイック」となっていて、隅に現在時刻が表示されている。ノーマを示す赤い点は、今いる場所、サルヴァート回廊休憩所で別の赤い点と接触している。別の赤い点のそばには「デルビー・アイバース」と表示されていた。
「これは……、監視システムか？」
「違うよ、だってこの画面じゃキムがいないじゃない」
「うん、僕がイリーガルな行動をとってるから、このライフゲームじゃフォローできてないんだ」
ノーマはデルビーとキムが何を言っているのかとっさには理解できなかった。
「…そうか、これはライフゲームだから、こっちの現実とは無関係なのか」
ノーマが言うと、キムがそれを裏付けるような操作を加えた。ライフゲームの時間を早送りしたのである。
ノーマとデルビーを示す赤い点はサルヴァート回廊を通過し、食堂の前に戻ってから別

れて、中央管制室とオルゴンボックス・ブロックへと進み始めている。
　これはノーマの予定の行動だった。
「デルビーを示す点は管制室前で別の赤い点と接触した。
「デルビーはこれから管制室前で立ち話する可能性が高そうだな」
　キムの言葉にデルビーが笑った。
「ローヌ・バルトの乗員のシミュレータか…。よくできてるな」
「時間がかかってるからね」
「あっ、キム、自慢してるね」
　デルビーの声でキムも笑った。だが、ノーマは時間の早送りに加速がついたライフゲームの画面をつかれたように見ていた。ノーマを示す点は自室に戻って眠っているようだ。
「だが…、どうしてこんなものを作った」
「ローヌ・バルトの注文。元は船内通行シミュレータだよ」
「船内通行？」
「人づまり防止」
　そのシミュレータはバルトの船内に網の目のように存在する狭苦しい通路の管制用だった。バルトの各部署の勤務シフトは時刻をずらすように設定されている。だが、それでも通路は混雑したり、誰もいないガラガラの状態だったりした。
　それを緩和するためにバルトがキムにアルバイトとしてこのシミュレータのプログラミ

ングを持ちかけたのだという。
しかし…、
「しかし、デルビーと私がシミュレータ上でサルヴァート回廊にいたのは…」
これは説明がつかない。
この通路や周囲のブロックはノーマやデルビーの職務とは無関係だし、普段の通り道から外れている。
「行動の傾向とか人間関係もプログラムしたからね」
キムは簡単に答えた。
「デルビーが原因で…」

キムの説明によるとこうだった。
船内通行シミュレータが完成して、キムが予想以上の報酬に喜んでいると、すぐに一等航海士のジーンメジャーからクレームが殺到するようになった。その一等航海士は船内通行シミュレータの運用を船長からまかされているらしかった。
「こんなもの役にたたたん!」
喧嘩腰(けんかごし)の航海士の話を聞いてみると、その主な原因はデルビー・アイバースという管制官にあるらしかった。彼女が一方通行の通路を「逆走」して来て立ち話を始めるため、甲板部の一部で通行人の渋滞が発生し、その責任を一等航海士が厳しく追及されているらし

い……。
「それはプログラムの問題じゃなくて、アイバース嬢のモラルの問題だろう」
キムは当然の反論を試みたが無駄だった。どうも、一等航海士はデルビー・アイバースに対して強く出られない理由があるらしく、最後にはキムを泣き落としにかかる始末だった。
要は責任所在の問題だ。
――なんで俺が……
と思いながらデルビー・アイバースのもとに向かったキムは、すぐにデルビーを「逆走」しないよう説得することをあきらめてプログラムの修正を始めた。
その方が簡単そうだったからだ。
この方法論は吉と出た。キムは「デルビー・アイバース対応ヴァージョン」プログラムを再提出することでさらに小遣いを稼ぎ、一等航海士は言い訳の口実を一つ追加し、デルビー・アイバースのモラルは誰からも問われることがなかった。
それに最大の収穫はローヌ・バルトがこのシミュレータに興味を持ったことだった。
彼女はキムに研究助成金を支給して、このシミュレータの精度を高めるよう依頼した。
キムは噂話の女王デルビーの協力でこの乗員シミュレータに磨きをかけてきたのであった。

キムはシミュレータ世界の船長が中央管制室内を行ったり来たり歩き回っている様子を表示してみてから、ファンクションキーを叩いた。

ディスプレイ上のローヌ・バルトは渦を巻くように歪んで元の平面的なマトリックス画面に戻った。

「本当によくできてるな…」

うなるようにこぼしたノーマの言葉にキムだけではなくデルビーも満足そうな笑みをこぼした。

「僕たちは複雑そうでいて実は単純なところもあるからね」

「でも、あたしのプログラムだけ妙に単細胞な雰囲気があるんだけど…」

デルビーが割って入って話題はプログラムから離れ始めた。

――しかし…

データ更新という名目で管制室の噂話に興じるデルビーのそばでノーマは考え込んだ。

――このライフゲームにはセックスと死がない…

キムが知らない要素もあった。

――それに、シミュレーション世界の私はシェルドライバの任務とは無縁らしい

噂話の女王も守秘義務はしっかりわきまえているらしい。

――セックスと死のない世界…。これはキムが望んでいるものかもしれないな…

ディスプレイ上の光点は互いに接触し、離れながら仲良く情報交換を続けている。競争

のない清潔な世界…。
だがノーマは、その清潔さにかえってグロテスクなものを感じとってしまった。
宙軍の哨戒艇(しょうかい)が走査(スキャン)可能領域から消え去ると、船長パースウォーデンは中央管制室内を行ったり来たり歩き回った。疲れている時に考えごとをすると始まる船長の癖だった。
「航海長、ポート・ヴィアネイから返信は?」
船長は床に目を落としたまま尋ねた。
「返信はまだです。通信がまだ向こうには届いていません」
航海長ノヴァーリスは二度目の返事を返してきた。現在位置から中間寄港地ポート・ヴィアネイまで暗号通信が届くのにまだ時間がかかるのは船長にもよくわかっていた。聞いても無駄なことを聞いているのもわかっている。
——早急にポート・ヴィアネイの貨物船を調べねばならん
パースウォーデンの思考は一つの考えのまわりを堂々巡りしていた。
——何を積んでいるのか調べねばならん! 早急に! 最優先で!
それにしても、今回の航海に関する調査部の連中のふがいなさはいったいどうしたことだ! 宙軍の奴らに遅れをとるとは!
パースウォーデンは不健康なくらい頭に血がのぼってくるのを感じた。
信じられん! 前例のないことだ。

ベルタ・ギースが宙軍に警告されるほど、こちらを追い上げてきたのも前例のないことだった。

突然、パースウォーデンの脳髄は雷に打たれたような衝撃を感じた。ある可能性に思いあたったのだ。

「航海長、ベルタ・ギースはローヌに追い付けるか？」

航海長ノヴァーリスは即答した。

「加速性能が同等であれば、無理です」

「ベルタが宙軍の停泊地アウターヴィアネイを横切ればどうなる？」

アウターヴィアネイは宙軍の艦隊集結宙域で民間船の航行は禁止されている。

意外な質問にノヴァーリスは何か言いかけてから、口を閉じて自分の端末で計算を始めた。当直の航海士と管制官たちは事のなりゆきに耳をそばだてた。

「アウターヴィアネイ外縁部を通過すれば、ベルタは…ローヌに追い付く可能性がありますす」

船長よりも冷静だという風評のノヴァーリスがあえぐような声で報告した。

――まさか！　ありえない

その場にいた誰もが思った。

船長もその例外ではない。しかし、

――ポート・ヴィアネイの貨物船が臨時の補給のために停泊しているのだとしたら、べ

ルタはそれまでになにかを消費するはずだ。それは…たぶん弾薬と燃料だ…という疑念も捨て切れなかった。

「ベルタがアウターヴィアネイ通過進路を取るのを確認したらすぐ警報を出せ」

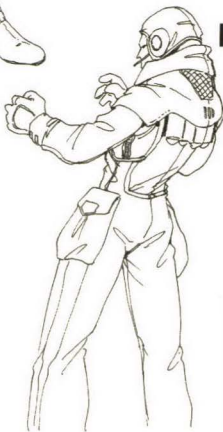
航海長に指示しながらも船長は思った。

——だが…まさか……

クルーたち

ミスタ・キム

ジーンマイナーの男性。ローヌ・バルトの乗組員。デルビーと同じC群管制官・火器管制員で船内勤続8年目。プログラマとして卓越した能力をもっており、ライフゲームなどの遊びの部分や、砲塔制御ソフトウェアなどローヌ・バルトに採用されるほどの優れたシステム開発者でもある。「ジーンマイナーとして」優れた技術・能力をもつ彼には種に対する無自覚なコンプレックスがあり、それが自虐的マイナー差別ジョークを口にさせる原因となっている。

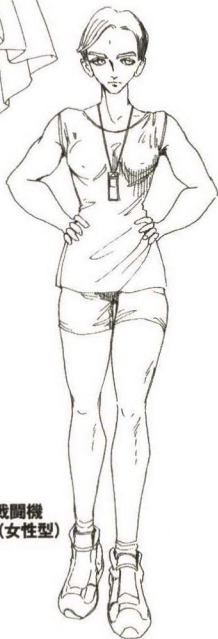
甲板員クルー

ミスタ・マウントオリーブ

ジーンマイナーの男性。ローヌ・バルトの火器管制室長で、ベテランの搭乗員。宇宙船にかなりの長期にわたって乗船し続けているため、時間の隔たりが彼から地上に残した家族を奪ってしまった。多くの乗組員は彼のことを「時間に喰われた男」と呼ぶ。だが、マウントオリーブ自身は、彼の息子たちがマイナー議会の議員としてジーンマイナー差別と戦いその生涯を終えたことを誇りに思っている。

ジーンマイナー

ジーンマイナーは我々と同じ人類だと思ってもかまわない。彼らにとって「上位」とも言うべきジーンメジャーと24時間、1年中船内で仕事と生活を共にしなければいけないために、彼らなりにいろいろと〝種〟の自己主張を、それと知らずにしていることがある。くだけた服装もそうで、キムのようにわざと制服を着用せず、2種作業服を好んで着るジーンマイナーが目につく。キムの首に下がっているのは認識プレート。武装クリッパーながら軍属ではない人間がほとんどのため、あまり規律にはこだわっていないようだ。

ジーンメジャー

雌雄同体、男性、女性両方の特徴をもつために、彼らにはまず「男のつもりなのか女のつもりなのか」(ジェンダー指向)を確認する必要がある。ピナとフレイたちのような、明らかに男か女かわかる外見と服装をしてくれていれば混乱もしないのだが、性の特徴が混在している個体では本人に直接聞くしかない。一般に中性的で浅黒い肌、濃い体毛で容姿端麗というのがジーンメジャーの原則のように言われているが、オルスのように色白で金髪でもジーンメジャーと言い切ってそれで通用していることから、例外が多いことは証明される。 そうでない人々が(ジーンマイナーが)劣等感を抱かずにいられないものをもっているのがジーンメジャーだろう。

7

航路索敵戦

Schell Battle

フォークト提督は混乱を楽しんでいた。
宙軍艦隊旗艦であるソブリン級大型戦列艦*パンジャブの戦闘艦橋には、フォークト提督を長とする*宙軍艦隊司令本部と艦長を長とする戦列艦パンジャブ司令部が同居している。
今、その二者の要員、参謀本部士官、連絡要員、航海士、管制官たち、それに艦長が互いに怒鳴り合い、相手を押しのけながら右往左往していた。
巨大軌道ドックと補給港のある宙軍の艦隊集結宙域アウターヴィアネイの外れをパンジャブの巨体は全力加速を続けていた。
こうした戦闘艦の常として天井が低く、決して広くはない艦橋は異様な熱気で室温が上がったようにも感じる。
喧噪(けんそう)と異様なほどの熱気。
そして、無能さや手際の悪さが引き起こす混乱。
その中心に座っている提督はそれを楽しんでいる。
自分がなすべきことは既に終えた。後は、これから何が起こるのかを待つのが提督の仕事だった。
その余裕が傍観者のような立場に提督を置いていた。

──こいつら全員、宇宙に放り出してやるのが宙軍にとっては得策かもしれん……
提督は冗談ではなく本気で考えていた。
宙軍艦隊司令本部と戦列艦パンジャブ司令部は、二つの事件によって大混乱に陥っていた。
第一の事件は四十八時間前に突然、通告された政府の査察である。
正式な通告以前に世界政府上層部から提督個人にリークされていた情報によると宙軍艦隊内の防諜体制を検証するのがその目的らしい。提督は誰にもそれを話さなかった。仮に艦隊内にスパイがいなかったとしても、自分の政府コネクションの存在を宣伝したいとは思わなかったのである。
そして政府から宙軍への通告、「艦隊会計監査のための査察官乗船要請」が届き二つの司令部が慌てふためくのを皮肉な目で眺めた。旗艦パンジャブには政府の役人どもに見られては困るデータが山のように集積されていたのだ。
そうした帳簿データは慌てて改竄され、暗号化され、消去され、別の場所に移管された。司令部要員が総掛かりで取り組んだが、査察官の乗船まではとうてい作業が終わらないことが判明し、艦長は査察官の到着を一秒でも遅らせるために艦の軌道を変更することにした。
だが、提督は旗艦パンジャブの軌道変更を許さなかった。

監査の本当の目的を知っていたためだけではない。

軌道の変更は追い込まれてとる行動だった。追い込まれて否応なく取らされる行動は常に自らを不利な立場に立たせることになる。

誰に対して？

敵に対してである！

フォークト提督は常に敵に向かい合うことで今の地位にまで登りつめてきた。否応なく取らされる行動は理由の如何（いかん）を問わず避けるべきであるという行動原理を曲げなかった。

そして、敵との衝突を待った。

しかし、この段階ではその敵がいったい誰なのか、まったくわからなかった。

そして、第二の事件、ジーンライナー船のアウターヴィアネイ侵入によって敵は明らかになった。

――ジーンライナーどもめ！　やりたいようにやりおる……

提督はいちばん近くにいた*フリゲート艦マーリガンを現場に急行させ、「*通常の対応」を指示した。

参謀本部付の法務官は、砲撃を含む「通常の対応」は、

「ジーンライナー船に対して前例がない」

としてこれに反対した。提督は、

「前例がない、ということは何もしないことの弁明にはならん」

としてこれを退けた。唖然とする本部士官たちに提督は尋ねた。
「フリゲート艦の次にジーンライナー船に近いのはどの艦だ？」
一人の若い士官が答えた。
「本艦です」
フォークト提督は簡潔に指示した。
「艦長、この艦でフリゲート艦を支援する。軌道を変更してくれ」
提督はこの不様な混乱の全容を知り始めていた。
艦長の要請通りに軌道の変更をしていたら、ジーンライナー船の迎撃が不可能になっていたという事実はその確信を深めた。
——この二つの事件は無関係ではない…。「防諜体制の監査」をすべきなのは政府内部の方だ。
そして、自分の頭で考えることのできる人材をこの混沌のなかから探し、拾いだす作業に没頭した。
提督のような人間にとってそれは同志を発見することだった。共に戦列に参加し、真の敵を粉砕するための…。
ヴィジョン……。
瓦礫の集積の向こうに広がる麦畑。遠い山並み。

麦の穂は重く実り、風に揺れている。
だが、麦は刈り入れされないだろう。
集落の人間は皆死んでしまったから。
ピナは子供の死骸の脚を掴んで家の中に投げ込んでから、農家の中庭で痩せた豚の解体に取り掛かった。老いて知恵をつけた豚はこれから何が起こるのかを理解して悲鳴をあげた。
血の匂いをかぎつけて鳥と蠅が集まってくる。
これでは火を使ったのと変わらない。敵の捜索隊の良い目印だ。
ピナはサバイバルキットと調達した水と食糧を農家にあったズタ袋に急いで詰め込んだ。
「ちょっと貸してくれ」
口をあんぐりと開けた農夫の死骸に話しかける。
敵地で撃墜されてから、もう三日も誰とも話をしてない。食事もなし。
ピナは生のままの豚の脂肪を口に入れてしゃぶった。
と、思うと口の中には何もなかった…。
ピナのシェルが衝撃とともにエアロックに装填される。
――また、酔った…
今使っている薬*は強すぎてどうしても「酔い*」が出てしまう…。
レイモン・フレイはこのことを知らない。

——真面目で間抜けな愛(いと)しいレイモン……
ピナはクスクスと笑った。
と、海面が急に盛り上がり、ピナは海水を飲んでしまった。
海面に顔を出して息をついたピナは妹の声を聞いた。
「姉さん！　助けて！」
——勝った！
とピナは思った。
彼女は海岸に向かって全力で泳ぐ。
透明な水底を横切る黒い魚の影は敵機となり、ピナ機の背後を取ろうとしている。
回避機動を開始した乗機＊ＦＢ－１０５バーサーカーは最大ブーストで追撃を離脱。凄(すさ)まじい機動でピナの眼球は変形する。出来の悪いコンピュータが敵機ロックオンを告げるよりほんの数瞬早く、ピナの指はスティックの火器トリガーを押し込んでいた。軽いストロークとしっかりとした操作感覚。素晴らしい感触だ。六連射された超高機動ミサイル＊(ＨＨＭ)は手練(てだれ)の敵機に吸い込まれるように到達してピナの僚機とともに四散した。
すべてが否応ない。
躊躇(ちゅうちょ)すれば自分は死んでいた。
負け犬どもの幻影を追い払うためにピナの指はシェルの兵装選択(セレクタ)＊スイッチをまさぐり、かろうじて理性がエアロック内での射撃を禁じた。

加速されたピナの意識は目の前の現実に戻り、ベルタ・ギース管制の指示に応答した後、再び時間をジャンプする。幸福感に満たされたピナは空白のディスプレイにむかってにこやかに笑っていた。

レイモン・フレイから通信が入った。

「……相手が自分の相棒ごと敵を射撃する奴だったらどうした？」

「まさか…」

ピナの顔から潮が引くように笑みが消えた。

「…考えられません」

「……そうだな…。それは考えられないことだ…普通は…」

フレイの声からは何も読み取れない。

ピナは沈黙を守ったまま考えた。

――フレイの存在は危険かもしれない

生き残るため、邪魔なものは排除しなければならない。それがたとえ同僚だとしても……。

「パワーズ機、エアロックに装塡」

管制官の声が遠く聞こえる。

ピナはこのことをじっくりと考えてみることにした。エアロックの中での十数秒は永遠のように長く、考える時間はいくらでもあった。

オルスはシェルの安定性(スタビリティ)を極限まで高めたセッティングデータを破棄し、バックアップしておいた標準セッティングをデータバンクにリロードした。

——これも時間の無駄だった！

オルスは焦っていた。

ベルタ・ギースが宙軍艦隊集結宙域アウターヴィアネイを横切る航路を取っているのが観測され、警報が出されて既に三十時間が経過していた。

敵シェルがいつ現われてもおかしくない状況である。

しかし、オルスのシェルは操縦(ドライブ)ができない状態になっていた。

もう少し正確に言うと操縦(ドライブ)が困難な状態だった。

ノーマのシェルと会話(コミュニケート)してからのことである。

二機のシェルをファイバーケーブルで接続するだけ、という呆(あき)れるほど簡単なハードウェア接続の後、オルスはシェルに会話を許可した。

二機のシェルは夢中で会話した。

夢中で、という部分はオルスの主観である。一時間にわたる会話プログラムが終了し、オルスが端末で会話終了を確認した時に、

——「会話」終了せず、延長認められたし

の文字でハードウェア切断を事実上、拒否されたからだ。

それから一時間、二機のシェルはさらに会話を続けた。それは整備員に見つからずに事を処理できるぎりぎりの時間だった。

ノーマのシェルと会話し、経験値を得ることでオルスのシェルの操作可能性（ポテンシャル）は飛躍的に向上した。

ノーマから渡された兵器を使う基礎火力演習プログラムをオルスは好成績でクリアした。

演習シミュレーションの成績を見たノーマは今回だけは床に唾（つば）することができなかった。

だが……。

オルスのシェルは基本的な機動ができなくなっていた！

それまで見たことも聞いたこともない兵器を自在に操ることができるのに…。

このことはノーマには気づかれていない。当のオルスでさえ、ベルタ・ギース襲撃の警報が発令されてから気がついたのである。

ノーマに言われて、これまでのシミュレーション訓練を復習してみたオルスは驚愕（きょうがく）した。

カタパルト射出直後、戦闘機動、着艦、完全にマスターしたと思っていたすべての機動訓練でオルスのシェルは分解と激突を繰り返したのである。

それは自分の身体が思うように動かせない状態に似ていた。主観点で右に旋回しようとすると左の腕が加速に耐えられず分解し、旋回はスピンするようなきりきり舞いになった。

ノーマにシミュレータの成績を見せなくて済んだのは幸いだった。

——なんだこれ！

ローヌ・バルトの船腹に何度も激突したあと、辛うじて着艦操作に成功したオルスはシミュレータモードのシェルから這い出した。

——今までの学習情報が白紙に戻っている！

シェルはパイロットの操作手順、馴染みの戦法、癖や操作の遅延の程度、ミスの傾向まで学習する。オルスのシェルは、オルスに合わせて変化してきていた。

それが白紙状態に戻っている！

オルスはそれがシミュレータの誤作動や自分の勘違いではないことを確認するとパニック状態となった。取り敢えず、元に戻すつもりで基本機動訓練を受けたが、失ったものが数時間で取り戻せるものではないことがわかり、端末からのマニュアル入力でセッテングをいろいろと変更してみたりもした。

だが、それもシェルの挙動を大雑把に変更できるだけで扱いにくいことに変わりはないことがわかった…。

——もう……時間がない…

警報、既に捕捉され刻一刻とバルトに接近しつつあるベルタ・ギース…、そして自分の背後をとって接近してきた敵シェル…。

目の前が真っ白になるような感覚にとらえられながらも、オルスはこの状況を打開する

ために冷静さを保とうと努力した。

民間船の航行が禁止されているアウターヴィアネイ宙域に侵入した武装クリッパー、ベルタ・ギースは宙軍艦艇の警告を無視して加速を続けた。その目的は前方を航行中のローヌ・バルトの近似軌道をとり、航路索敵(シェルブリット)することにあった。

最も近くに位置していた宙軍フリゲート艦マーリガンはベルタ・ギースの航路前方を塞(ふさ)ぎ、場合によっては砲撃するために全力で減速していた。また、巨大戦列艦パンジャブは加速しベルタを射程内にとらえつつあった。

宙軍は安全確保のため、ポート・ヴィアネイを封鎖。すべての宇宙船の出入港が規制され、ヴィアネイにいる企業の情報エージェントたちの間で金(かね)が激しく移動した。

——いったい何が起こってるんだ?

内容のないあいまいな情報が高値で取り引きされ、業界トップグループから転落する人間も出た。情報市場(マーケット)で大きな損失を出したのは例外なくギースシッピング社と良好な関係を結べない人物ばかりだった。

そして、ベルタ・ギースは航路索敵(シェルブリット)を実行した。

それを探知したローヌ・バルト側も迎撃のため航路索敵(シェルブリット)を実行した。

バルトはこちらのシェルはあくまで航路の安全確保のためのものであることを繰り返し接近中の宙軍艦艇に送信したが、返信は減速を勧告するものだけだった。

「よーし、内緒話の時間だ」
ローヌ・バルトから射出されたオルス機はノーマのシェルとリンクされた。手動操縦(マニュアル)では危険なほどの距離で二機のシェルは巡航速度からの加速を続けながら、アンカーと呼ばれる有線接続でブリーフィングを始める。
「オルス、悪いが勝手にお前のシェルに細工させてもらった」
ノーマは単刀直入に話に入った。
「今、お前のシェルには*ソフトウェアリミッタが組み込まれている。それでレスポンスが良すぎて自滅することはなくなるはずだ」
「……」
当然、状況説明がなされるのだろうと思っていたオルスは虚をつかれた。警報が出されてから三十時間近く、シェルの経験値を高めるためにろくに睡眠をとらずにシミュレータ訓練を続けたため、意識が通常より鋭敏かつ鈍感になっていたためもある。
――リミッタ？　…自滅…って
「あの船の中で秘密を作ろうなどと考えるな。ローヌはお前のトイレの様子までチェックしてるぞ」
オルスはノーマの言葉に過敏に反応した。
「ノーマ！　知ってたのか！　…知ってて…黙って見てたのか！」
「怒るな。判断力が低下する。…事務的に済ませよう。お前のシェルは私のシェルの学習

情報を無差別に学びすぎた。理由はわからん。結果としてお前の操縦能力を超えた反応の良さを獲得したんだ。その補正のためにソフト制御のリミッタを組み込んだ。元のレスポンスの悪い機体に戻ってるはずだ」

オルスは自分の行動が監視されていたことに強い不快感と…怒りを感じていた。それにノーマが自分をコントロールしているようにみえることも気にくわなかった。

それが表情に出たのだろう。ノーマは、

「…盗むな、とは言わん。ただ自分に理解できないものは盗んで自分のものにしようとしないことだな、これからは」

と説教くさいことを言ってから、さっさと通常のブリーフィングに移った。

「状況を説明する。重武装したベルタのシェル二機がローヌの航路前方を塞ぐ形で接近中。これに宙軍のフリゲート艦と大型艦が加わる」

転送された宙域マップが表示される。

ローヌ・バルトの航路前方に宙軍フリゲート艦と二機のシェルが別々の方向から集まりつつある。宙軍大型艦はかなり離れたところにあるがジーンライナー船と同等の加速力で接近している。軌道予想線が複雑に交錯してかなり見づらいマップだった。

「宙軍フリゲート艦はこの宙域一帯に走査障害を起こしてローヌとベルタを減速させる戦術にでている。レーダーにはノイズが入るぞ。宙軍は敵とも味方とも言えん。極力かかわるな」

「かかわるな、って、フリゲート艦はローヌの航路に入って来てるのに」
　宙軍のフリゲート艦と大型艦の目的はベルタの拿捕だった。しかし、フリゲートはローヌ・バルトの航路を塞ぐ形になっているし、そうしようと思えば二艦ともベルタだけではなくローヌも砲撃できる位置にあった。
「ローヌは自分でなんとかするだろう。敵シェルも宙軍もジーンライナー船は攻撃しない。これがこのゲームのルールだ」
　オルスはなんでもないことのようにさらりと言われたノーマの言葉に強い引っかかりをおぼえた。
　――ルール…。交戦規則なんかあるのか？
　重要なことのようにも思えるが、他にも考えるべきことが多すぎてゆっくり考えてはいられなかった。
「難しく考えるな。我々は航路内に入りこんだ『敵』を排除する。誰が敵かはその場で判断しろ。お前はリンク列機として後方を守れ。敵と遭遇後、リンクは解除する。まともに交戦する自信がなければとにかく逃げ回れ。以上だ、加速するぞ」
　ノーマ機が制御していたオルス機の兵装ロックボルトが解除され、両腕武装のマーカランチャーがスタンバイ状態にあることが赤く表示された。
　ノーマのシェルはアンカーを引き抜くとオルスの足元側に加速して消える。リンクされたオルス機も機体をひねり込むようにしてそれに続く。第二巡航加速で先を進むノーマ機

はブースタから長い尾のように噴射物を後に引いていた。シェルがゆるやかに軌道修正をしているため、それは風に揺れる水流のようにねじれ、動いている。
オルスは広域走査マップを呼び出してみた。宙軍フリゲートによる走査妨害のため、宙軍艦艇と敵シェルの位置は通常の場合のような点ではなく「存在可能性の雲」として表示されていた。雲は中心が密度が濃く、周辺部が薄い。密度の濃淡で敵のいる可能性を表現しているというわけだが、倍率を変えてみても「雲」が拡大されデータが詳細に表示されるだけで、敵の位置がわかるわけではなかった。
――これはあまり使えないな……
加速するオルス機、ノーマ機とローヌ・バルトを結ぶ空間には薄い存在可能性の「雲」がなく、そのクリアな空間は増加しつつあった。
「第一巡航加速に入る。敵は待ちかまえてるぞ。油断するな」
手の中のスロットルスティックが軽く変形し、メインブースタが一瞬だけ最大ブーストになる。まだノーマ機のスレーブ状態なので、ノーマがリモートコントロールで操縦しているようなものだ。
その状態で、二機のシェルは敵の「雲」に突入していった。
このアウターヴィアネイ事件で第一弾が、誰によって、何に向かって発射されたのかは現在に至るまではっきりしない部分がある。

最も信頼できそうな証言は宙軍フリゲート艦マーリガン乗員のものだ。
マーリガンは最終的な減速を終え、二隻のジーンライナー船を砲撃できる位置についた後、ローヌ・バルトには減速、ベルタ・ギースには停船するよう勧告した。
ジーンライナー船が応答せず、減速する様子もみられないため、艦長は走査(スキャン)妨害を一時中断して精密射撃をするかどうか、軌道の変更および加速をするかどうかの判断を士官に求められた。艦長が接近中の旗艦パンジャブに判断を仰ぐつもりで通信手に向き直ったその時にマーリガンの船体は衝撃を受けた。艦首では転倒する者が出るほどの衝撃であった。状況報告は錯綜(さくそう)し、混乱した。
艦首L面にあるセンサー／アンテナ群が「敵の攻撃により被弾」したことがわかった時点で、艦橋にある戦闘レコーダ*がまだ作動していないのに気づいた二等航海士がスイッチを入れ、その後になってようやく艦長が一級戦闘体制を宣言しているのを記録している。
戦闘レコーダが記録を開始したのはポート・ヴィアネイ時間で0213時。艦首乗組員のなかには衝撃を受けた時に時計を見た者が数人いた。彼らの証言では被弾は0159時から0209時の間に起こったことになっている。
しかし、彼らは皆、ジーンマイナーの下士官、兵で私物の時計を見たため、宙軍では正式な証言としては記録していない。艦の時計を見た士官は一人もおらず、観測機器とコンピュータを無駄なくらい搭載しているのに攻撃された時刻の記録を残していたCPUはなかった。

このことは後で問題となる。
0213時の時点で四機以上（宙軍誤認）のシェルによる高速戦闘が開始されていた。
マーリガンの艦長はこの戦闘に介入すべきかどうか迷っていた。
「いったい、どれが敵なんだ！」
戦闘レコーダには艦長の声が記録されている。

もつれあうようにして接近する二機の敵シェルが走査（スキャン）され、マップ上の「敵機存在可能性の雲」が一点に収斂（しゅうれん）すると同時にノーマはリンクを解除した。
「うまくやろうなどと考えるな。その機体を確実に持って帰れ！」
ノーマ機は急激な機動で視界から消えた。オルスは逆方向にシェルをひねり込み、第一巡航加速枠ぎりぎりの最大ブーストで加速した。
——くそ！　勝手なことばかり言いやがって
オルスのシェルは意外なほど素直に操縦（ドライブ）できる状態だった。だが、この程度の機動では戦闘加速の状態での機体の限界はまったくわからない。
——ぶっつけ本番でこいつを動かせだと？　ふざけるな！
オルスはスクリーン上の敵シェルの動きに目を置いてノーマを呪った。シェルの学習データが消失したいきさつなどすっかり忘れて…。
接近して能力を回復したかのようにみえた走査（スキャン）マップも相変わらずあまり役にたたない。

フリゲート艦の走査妨害のため、高速で移動する小さなシェルは、ある程度の距離にあると位置の特定が出来ずにぼやけた雲の状態に戻ったり、点に収縮したりを繰り返している。

オルスは自分を追尾してくるシェル以外の目標を見失っていることに気づいた。

――まずいな…。フリゲート艦まで見失ってる…

オルスは加速しながらブースタの配置を変換して、追尾してくる敵シェルに向き合う姿勢をとった。シェルが背中側に向かって進んでいる形である。

兵装選択スイッチを操作するとシェルは半自動で主武装のマーカランチャーの射撃姿勢をとった。敵シェルはまだ射程内に入って来ない。

――まだ来ないのか

ベルタのシェルは加速性能で劣っている、とノーマに聞いていたが…。

ノイズのひどいマップ上で、敵シェルはもう少しで射程内に来る。

――標的みたいだ

とオルスは考え、トリガーガード*を指で押し潰そうとした。

その時になってようやくオルスは気づいた。

――こいつ！　囮だ！

スロットルバーをねじるように握りしめて緊急戦闘加速に入る。

シェルの機体外部に展開していたバランサー*やスタビライザーが一斉に切り離され、収

納する余裕のないセンサー類は補助システムに制御が移された。内部で「抑制された爆発」を起こしたメインブースタは一瞬でスタンバイ状態になる。
だが、オルスのシェルはすぐには戦闘加速に入れなかった。
不適切な射撃姿勢をとっていたからだ。
モニタに警報が表示され、別の方向から加速してくる飛翔体がマップに現われた。
それはノーマじゃない。確認するまでもなくオルスにはわかっていた。
——どうして動かない！
オルスの意識はシェルの動きさえのろくさく感じていた。
メインブースタのうなりと警告音に満たされたコクピットのなかで、オルスは自分の絶望の体臭をかいだように思った。
実際には息を吸える時間さえたっていなかったのだが…。
次の瞬間、オルスの視界は白くなり何も見えなくなった。

シェルのコクピットは戦闘機型のフォーマットを発展させたものになっている。これは多くのシェル・ドライバが戦闘機から乗り換えてきたことが主な理由だろう。 コクピットは透明セラミックの装甲を使っているために肉眼である程度の外部を見ることができる。コントロールはGGC（グラブ・グリップ・コントロール）と呼ばれる腕をコントロール・グローブ内に入れて操縦するシステムだ。グラブ内にはジョイスティックが固定されていて、スティックのボタンですべてのコントロールとファンクションの切り替えをする。両手をスティックから離さなくてもあらゆるコントロールが可能だ。従って

コクピットシステム

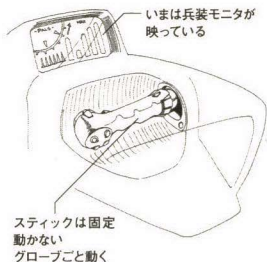
コクピットには非常脱出用以外のボタンやパネル・スイッチはどこにもない。
ディスプレイはオールオーバースクリーンで、ヘッド・アップ・ディスプレイからヘッド・ダウン・ディスプレイ、ヘッド・サイド・ディスプレイ、アッパー・ディスプレイはまとまって投射され、各動力、武装、レーダー、通信情報などは混乱を避けるために立体メーターとなって投射される。フットペダルが残されているが、これはヨー（水平旋回）と接地時ブレーキをつい踏んでしまう癖が抜けないパイロットが多いためだ。もちろんペダルを使わなくてもスティックでコントロールできる。

コクピット前方から

ノーマが乗り込んでいるが、バイザーは降ろしている。狭いコクピット内では戦闘に入るまでチンバイザーを下げて素顔を出すことが多いようだ。ヘルメットの上にはアッパーカバーがドライバを守っている。その前方にはオーバーヘッドスクリーンがあり、主に僚機や母機とのモニタに使われる。またメインモニタの情報をここに一部移すこともできる。両肩を覆っているのはローヌ・バルトへの直接モニタデバイスである。パイロットとシェルのモニタを母機のローヌ・バルトが直接監視している。

GGC内部ジョイスティック

パイロットスーツ

シートへのハーネス（シートベルト）がないのは肩のデバイスと腰のデバイス、そしてスーツの背中にあるシール・パーツ（ストラップと呼ぶ）でシートと密着しているからだ。スーツが3ピース構造なのは密着感をなくし、体の自由度を高めるためにこの分割スーツが採用された。とはいってもこれもローヌ・バルトの提案なのだろうが……。

8

機動限界

Border Bullet

――やった！

という手ごたえを感じたピナはレイモン機の背後の残りの一機に意識を向けた。

相手に合わせて鈍い機動を続けていた囮役のレイモン機は防御的立場に立たされている。宙軍の*電子戦に対抗するための装備パックを装着したピナとレイモンのシェルは、高機動戦闘において若干、不利であった。

軌道変更後、戦闘加速を発動する設定を片手で入力したピナは考えた。

――敵がレイモンを始末するまで待つか……

レイモン・フレイは知っているはずだ。ピナが過去二度にわたり敵機と一緒に味方機を撃墜していることを……。

軍法会議は、作戦遂行上やむを得ない事故であったとして二度の無罪を申し渡している。また、敵地で撃墜され友軍戦線にたどり着くまでに集落の民間人を虐殺したという嫌疑をかけられたこともある。これは敵の謀略であるとして不起訴となっている。

*海軍特殊戦司令部は作戦遂行能力でしか人間を評価しない。しかし、ピナ・パワーズは海軍長距離侵攻戦闘団のトップエースであると同時に特別な問題児だった。

ピナはモラルや社会性といった言葉を使って批判された。
言い替えると、モラルや社会的適性はピナの生存を批判していた。
自動的にモラルや社会的適性はピナの敵となった。そして今、それらを体現しているように思える存在がレイモン・フレイだった。
少なくともピナにとっては。

我々の社会は逸脱やそれに伴う変化を求めている。秘かに…。
だが、実際に逸脱してしまった者には罰が与えられる。それは、実際に社会を構成している大多数は、逸脱によってもたらされる変化に対応できないからである。歴史的事実を顧みるまでもなく、大多数派は少数派を圧迫する。どの歴史上でも、逸脱者は少数派だ。大多数にとっては急激な変化よりも、現状維持こそが最も大切なのである。
ピナは有能なジーンメジャーだったが、こうしたゲームのルールに無自覚だった。
その結果として本来ならば争う必要もない相手を攻撃し、本当の敵を見失っていた。

ピナ機のコクピット内の走査スクリーンは、敵シェルがレイモン機に追いつきつつある様子を映しだしている。
ピナはわざわざ遠回りの軌道をとって敵シェルに接近した。
——レイモン、かたきはとってあげるわ。安心してやられなさい…

ギースシッピング社が自分の過去を知っていることを考え、ピナは自ら手をくだすことなく慎重に処理することにしたのである。
動きの鈍い方の敵シェルは片付けた。レイモン機に張り付くように加速している敵シェルはベテランパイロットが搭乗しているはずである。
敵シェルがレイモン機を撃破するもよし、その逆もよし。
後でなんとでも言い訳できるような軌道を慎重に選びながらピナは高みの見物をするつもりだった。
そこに隙が生まれた。
高速の飛翔体（ひしょう）が接近しつつあることを示す警報音を聞いたピナは一瞬、何が起こっているのか理解できなかった。
――フリゲート艦？
背後から接近してきた小型飛翔体は砕け散るように三つに分裂した。
ピナはシェルに対して予告なしの緊急戦闘機動をかけた。
外部に向かって張り出していたセンサー類が急加速に耐え切れずにちぎれ飛び、装甲に損傷を与える。
だが損害をチェックする余裕もなかった。
三つに分裂した飛翔体の周囲に弱い重力の変異がみられたと思う間もなく、それが無数の小片に爆発した。

爆発と見えたのはピナ機を包み込むように発射された小型の超高機動プラズマカートリッジ弾だった。
ピナは超高機動プラズマカートリッジ弾の発射より数瞬早くシェルに迎撃コマンドの入力を済ませていた。ピナ機は破砕限界ぎりぎりの戦闘機動を続けながら迎撃態勢に入り、たちまち十数基のカートリッジ弾を撃墜する。
残りのカートリッジ弾は急角度でピナ機に向かって突入した。

「やった！」
オルスは握りしめていたコントロールスティックから手を離してパネルを叩いた。
至近距離での爆発でオルスのシェルの装甲板は表面が熔けるほど焼け焦げ、長距離センサーが破損していたがほとんどの機能が無事だった。
オルス機はピナの攻撃をぎりぎりのところで回避していた。オルスは攻撃回避後、戦闘機動速度で退避。そして反転してマーカランチャーでピナ機を射撃したのである。
大型兵装マーカランチャーはその名の通り、標識弾を超高速で射出する兵器だ。マーカは実体弾ではあるが直接敵を攻撃するのではなく、標的に加速接近しながら座標を測定し、独自に攻撃戦術を決定してジーンライナー船に転送依頼を送るだけの小型コンピュータである。
マーカからのオーダを受けたジーンライナー船はカーニハン機関起動可能速度に達して

いる場合のみ、リクエストされた攻撃兵装コンテナを指定座標に空間転移させることができる。*攻撃兵装コンテナの到着を確認したマーカは、トリガーを引いて「引退」し、宙域監視サポート任務にあたる。

これはジーンライナー船だけが装備している、人類史上最も高価な兵器だった。

ピナ機を攻撃するためにマーカが選択した多弾頭型超高機動プラズマカートリッジ弾のポッドは標的を包囲、殲滅（せんめつ）したことを示す「アタック・ターミネーション」の文字を表示、宙域走査（スキャン）ホログラムがマーカの支援を受けた高精度モードに切り替わった。

が、「アタック・ターミネーション」の文字はいきなり高速飛翔体を示す長ベクトル表示の*敵性オブジェクトになった。

ピナ機はオルスの攻撃を回避していた！

オルスはこの事態に冷静に即応した。

臨界まで高めたメインブースタのスロットルを急激に、かつ繊細に操作し、敵が予測する軌道からなるべく外れるように加速ベクトルを変更する。

損傷を受けていた外部装甲板の一部が機動に耐えられず剥離（はくり）して脚部に激突し、警報がコクピットに鳴り響いた。

シェルの超高速戦闘では敵だけではなく、スピードそのものと戦うことになる。速度が上がれば上がるほどパイロットが選択できる機動領域が狭くなるのだ。

オルスが無理な機動をしてまで可能機動領域を広げようとしているのは、シェルドライバの間で言われる「チェックメイト」を避けるためである。これは相手の策にはまって機動領域を失い、逃げ場をなくしてしまうことだ。

しかし、機動領域の確保のための無理な機動は機体の分解という自滅を招く危険もあった。戦闘機動速度は強靭(きょうじん)なシェルの機体が些細(ささい)なミスで簡単に分解してしまうような速度域だった。

オルスの身体を包むように密着しているコクピット内はメインブースタの咆哮(ほうこう)で満たされ、機体の限界を知らせる微細な振動が伝わってくる。手のひらは汗ばみ、緊張のあまり身体ががくがくと震えだしそうだった。

視線だけを移して宙域シミュレータを見る。

自機の可能機動領域は徐々に拡大しつつあった。敵機は完全に体勢を立て直し、オルスのシェルの軌道を回り込むように全力で加速をしていた。

——操縦をシェルに任せて、攻撃の準備をしなければ……

オルスはコントロールスティックに合図して機動領域確保を指示し、兵装の確認をした。

マーカランチャーは次弾を装塡(そうてん)したスタンバイ状態で異常はなかった。

だが、ランチャーを見たオルスは視線をとられてしまった。

マーカランチャーの表面は機能正常が信じられないほど焼けただれている。ランチャーのグリップを握っているシェルの腕も外部装甲が今にも剝(は)げ落ちそうな状態だ…。

——……もう引いたほうがいいのかもしれない

オルスはノーマの言葉を思い出した。ノーマは交戦の自信がなければ逃げ回れと言っていた……。

宙域シミュレータを見ると依然として走査(スキャン)妨害が働いているらしく自機を追尾してくる敵シェルだけしか位置がわからない。

もう一機の敵シェル、ノーマ機、そして宙軍のフリゲート艦は「存在可能性の雲」さえ表示されていなかった。

戦闘の状況はまったくわからない状態だ。

——この状態でまだ戦闘する意味があるのか？

損傷を受けたシェルは機動限界を示す微細な振動をオルスの身体に伝え続けている。

突然、オルスは虚空を落下しているような根源的な恐怖を感じた。ゆるやかな接近を続ける敵シェルはあと少しで*交戦領域に侵入してくる。オルス機の可能機動領域はまだ充分な容積を確保できていない。

逃げるにも応戦するにも不充分で、「チェックメイト」されてしまう可能性がある。

宙域シミュレータ上の敵の姿を見つめるオルスは数瞬の躊躇(ちゅうちょ)のあと、シェルに射撃姿勢をとらせ、*機動制御リミッタの解除方法を表示させた。

オルスの歯はかちかちと鳴っていた。

緊急戦闘機動で補助システムの一部を失い、リミッタで本来の性能を発揮できないシェルで未知の敵と戦闘するのは無謀だということはわかっている。
しかし、追い詰められ、身動きできない状態で狩られるのは我慢できなかった。
じわじわと可能機動領域をせばめられ、相手の落ち着きはらった一撃で墜とされるのはシミュレータで経験していた。
——無茶でも…、攻撃あるのみだ
言葉で描写すると勇ましいが、現実のオルスは極度の緊張で歯を鳴らし続けている。歯を鳴らしながら指先だけで機動制御リミッタの解除を終えた。
リミッタを解除した途端、オートパイロットのシェルは減速し、いきなり軌道を変更した。不快なGが内臓にかかる。
——くそっ！
悪態をつきながら宙域シミュレータに目をやると、敵シェルとの相対速度が急激に上昇すると同時に可能機動領域が一挙に拡大している！
オルスは、すぐにシェルの「意図」を理解した。
可能な限り相対速度を上げる軌道をとり、追い付いてきた敵を射撃後、全力加速で離脱する、という戦法だった。
しかし、オートパイロットのままでは逃げ切る軌道には乗せられない。マニュアルドライブで限界機動をする必要がある…。

この機体を手動（マニュアル）で正確に操作する自信はなかった。が、他に選択肢はない。
考えている時間はなかった。敵シェルは急激に接近してきている。
正念場だ。
コントロールスティックを柔らかく握り、オートパイロットを解除。
何も動かしてないはずだったが、極度に反応（レスポンス）のいい機体は跳ね上がるように動いた。
オルスは全神経を集中させ、微かにスロットルとコントロールスティックに握力を加える。
シェルは蛇行しながらもオルスの意志に従った。
反応（レスポンス）がこれまでの機体とはまったく違うということに気づいてみれば操縦できなくもない。
ただし、機体を安定させるにはかなりの集中力を必要とした。
オルスはシェルに射撃姿勢をとらせ、兵装セレクタを自動射撃モードにする。
シェルは不安定な挙動で限界機動を続け、目的の軌道まであと少しとなっていた。
——あと、…もう少し…
その時、宙域シミュレータ上の敵機が戦闘領域に侵入し、マーカランチャーが自動射撃を開始した。
はっきり言って、これは無茶で無謀で未熟な攻撃だった。
ただし、少なくともこれは定石ではなかった。

その頃、宙軍戦列艦パンジャブはベルタ・ギースを射撃可能な位置に到達して再度、停船勧告を送信していた。

だが、連絡の不手際で主砲はまだ射撃可能な状態ではなかった。

この艦は衛星軌道上からの地表砲撃以外に実戦の経験がなく、乗員は訓練成績は良かったが柔軟に艦を運用する能力が不足していたのだ。

何をなすべきかがあらかじめわかっている訓練はルーティン*の単純作業の要領を乗員の体に叩き込んではいたが、自分の頭で考え、行動することは教育することはできなかったのである。

自分で考えること、それは教育で身につけるものではない。

それは自発的に獲得する行動様式であった。

機甲艦隊総司令フォークト提督は、一流の教育機関で最高の教育を受けてきたジーンメジャーのエリートたちが、実は同じことを繰り返すことしかできない機械の部品のような人間でもありうることをこれまで何度も目撃してきた。

これは環境や教育の問題ではない。

――こいつらは自分で望んで機械の部品になった…、往復運動しかできない部品に成り下がった…

フォークトは社会の基幹をなす人々を見る度に心の中でつぶやいた。この世界観は良識やモラルや大衆的美徳とは相いれない異端である。

良識の仮面を被（かぶ）った異端者フォークトは、艦長にジーンライナー船を砲撃するように指示し、改めてその非常識ぶりを発揮した。
合理的解法が時として非常識であることを理解できる者は少ない。
それでも、戦列艦パンジャブは不手際と意図的サボタージュによる遅延を乗り越え、射撃カウントダウンを開始した。
損傷を受け退避中のフリゲート艦マーリガンも旗艦の射撃制御センター*とリンクされる。マーリガンの宙域走査（スキャン）妨害が中断され、宙域はいきなりクリアとなった。
「宙域走査（スキャン）が生き返りました！」
ローヌ・バルトの中央管制室では航海士たちが一斉に宙域シミュレータに目をやった。
存在可能性の雲として表示されていたフリゲート艦、四機のシェルのみならず、はるか遠方に位置しているベルタ・ギースと宙軍大型艦までもが確定された点の表示に収斂（しゅうれん）してゆく。各飛翔（ひしょう）体の中心部から移動速度と方向を示すベクトル表示が伸びだし、それをもとにそれぞれの可能機動領域がリアルタイム表示された。
「状況報告」
船長パースウォーデンは航海士たちに現状の分析をさせた。
「航路上にあるフリゲート艦は軌道を変更しつつあります」
「ベルタ・ギース、予想より速度が出ていません。アウターヴィアネイより離脱する軌道

をとっています」

当然それに続くはずの航路索敵関連の報告の声がないので、船長と航海長はアイバース管制官を見た。

デルビー・アイバースは我を忘れて拡大された宙域ホログラムを凝視していた。

ホログラム上でオルス機は戦闘機動速度を出していることを表わす長大なベクトル表示の先の小さな点だった。その可能機動領域はほとんど体積がなく、予想軌道と完全に一致した一本の線でしかなかった。

オルス機は高速で限界機動をしている。しかも、可能機動領域がないということはギリギリの機動だということだった。

この狭い機動領域を少しでも外れるとオルス機はばらばらに分解してしまうことになる……。

接近する軌道に乗っている敵シェルは、オルス機のたった一本の予想軌道に向けて射撃しようとしているはずだった。

それを牽制するためか、オルス機はしきりに射撃を続けている。

「ミス・アイバース、状況報告を」

航海長ノヴァーリスの声でデルビーは我にかえった。

「は、はい……、シェルは両機とも生存、戦闘中。航路予想領域は最低レベルの安全が確保されています……」

デルビーの報告が終わるとそれを待っていたかのように宙域ホログラム上に動きが現われた。
「宙軍大型艦が発砲！」
中央管制室内の全員の目が宙域ホログラムに向けられた。
減速しつつ接近している大型艦から発せられたオレンジ色の光が凄まじい勢いでベルタ・ギースに向かっている。
「対艦攻撃用の高エネルギー兵器。目標はベルタ・ギース。……今、全弾外れました」
「フリゲート艦も射撃を開始！　目標は戦闘中のシェル、と思われます」
「……シェルは戦闘継続中、フリゲート艦の有効弾はありません」
船長パースウォーデンは大きく息を吸いこみ、うなり声をあげた。
危機的状況……、前代未聞の危機的状況だった。
影響力は小さいとは言え、宙軍がジーンライナー船に干渉しないという前提があればこそ、今まで武装クリッパーという特殊な存在が「自由」に「競争」することができたのである。
だが、今、宙軍艦艇はジーンライナー船を砲撃している。
命中弾がないのは威嚇射撃だからだろう。
民間船の進入を禁止しているアウターヴィアネイを侵したのはベルタ・ギースで、ローヌ・バルトは規定の軌道からまったく外れていない。しかし、フリゲート艦はバルトにも

減速するよう勧告してきていた。

「ベルタ・ギース、回避軌道をとり加速中」

中央管制室の管制官、航海士たちは、拳を口にあてて宙域ホログラムを睨みつけている船長の様子をうかがった。

前方のフリゲート艦は直接、航路を塞いでいるわけではないが、このまま進めば火線の真っ只中に飛び込むことになる。

「……減速して宙軍の指示に従う…。バルトには私が話す」

それは管制室内の全員が期待した通りの答えだった。

武装クリッパーは武装商船であり、軍艦ではない。敵と交戦するのが目的ではなく、荷を守り、送り届けるのが使命だ。それに宙軍は敵とは言えなかった。

船長は通常言語からフロー言語に切り替えて、ローヌ・バルトに減速の指示を出した。

バルトの返答は、推力、操舵関連の制御を中央管制室から切り離し、中央管制ブロックを強制閉鎖することだった…。

カウンターが0表示となり、オルスのシェルはマーカランチャーの弾丸を撃ちつくした。相手を牽制し射撃位置につかせないために連続で射撃した結果である。

もともとこの兵器は長距離用の兵装だったため、不適切なほど近距離の敵に発射された標識弾のコンピュータは有効な攻撃法を見つけることができず、射出後すぐに宙域監視モードに入ってしまうやる気のない弾や自らを実体弾として敵シェルに突入する猪突猛進弾

ばかりだった。
実効はほとんどなかったが、敵のシェルに射撃の姿勢をとらせないことはできたようだった。
限界機動はまだ続いている。
宙域シミュレータが生き返り、宙軍艦艇が射撃している様子を映しだしていたがオルスにはそれを見る余裕はなかった。
敵シェルとすれちがい、今仮に射撃されたとしても超高速ミサイルでも簡単に振り切れる態勢に持ち込めていたのだが…。
――目の前の…、コイツが……、問題…だ
オルスが闘っているのは意外な相手だった。
索敵の結果、遭遇したのは象徴的(シンボリック)で実体のない相手だった。
それは実在しない敵だった。
存在しないものはうち負かせない…。
倒すことの出来ない相手にオルスは苛立(いらだ)った。
自分の思うようにならないストレス…、そして、こうした状況に自分を追い込んだすべてが憎かった。暴力的な衝動が脳髄の深い部分から沸き上がってくる。
相手を思いきり殴りつけ、蹴(け)飛ばし、絞め上げてやりたい。血まみれになり、逃げまどう相手を追い詰めてやりたい。平伏させ、犯し、すべてを支配して…、

俺は父親になるのだ！
そして、周囲に向かって叫ぶのだ。
「オレの！　おれの!!　俺の声を聞け！　俺の叫びを聞け！　負け犬どもめ！」
獣であった時代から残っているプログラムによってオルスの精神は興奮し、荒れ狂った。
しかし、存在しないものを屈伏させることはできない。
シェルは集中力の低下を見透かしたようにバランスを崩し、左腕とマーカランチャーが爆発したかのように四散する。
シェル側の制御プログラムが緊急介入してオルスの反応の遅れを補い、機体はなんとか持ち直した。
オルスの感情の爆発はまだ収まらず、激しい怒りの次は理由のわからない哀しみと不安が静かに押し寄せてきた。
——ちくしょう！　何故だ！　何故、俺はここにいるんだ！
コクピットから見える星々は何も答えない。
何度も呪文のように問いを繰り返すうち、オルスは集中力を回復し、コクピット内の表示を見ていなくても見えているように感じた。
シェルはオルスの操作に対して急に従順になった。
オルスはコクピットの片隅に表示されている数字を何度も見た。
数字はカウントダウンされているように急速にゼロに向かって下降している。

——これは…なんだ？
その数字の意味するものがオルスには理解できなかった。
いや、思い出すことができそうだ。
しかし、オルスはその数字について考えることを放棄した。
——これについては考えなくていい…
汗ばんだ手のひらの中のコントロールスティックとスロットルだけが考えなければならない現実だった。握力の変化で綱渡り。これだけだ。
再び、数字に目をやる。
数字は加速がついたようにゼロに近付いている。
右手のスティックに加える握力を変える。
と、シェルはオルスが意図した通りの軌道を綺麗に描いた。
数字がゼロに近付く。
——これがゼロになったら…
ゼロになったら死ぬのかもしれない。
ゼロになったらシェルが四散するのかも。
ゼロになったらすべてが終わって楽になれる…。
オルスはスロットルを絞った。
シェルは微動した。

機体は限界機動を示す微振動をさらに強める。
両手がスティックに接続されているように感じる。
数字が……ゼロになった。
手の中のスティックが滑るように前進し、外側を向く。オルスは呆気にとられてそれを見ていた。
「マニュアル機動終了。オートパイロットに制御が移行しました」
シェルが柔らかい声でそう告げた。
機体はもう振動していない。
宙域シミュレータ上でオルスのシェルは寸分の狂いもなく予定の軌道に乗っていた。
——……やり遂げた
と思った途端、オルスは猛烈な吐き気を感じて肩のわきに少し吐いてしまった。
オルスは宙域シミュレータ上の小さな点がオレンジの光を何度も送り出しているのを放心したように眺めた。
状況がよくわからない。
と、いうよりもオルスはそのオレンジの光を美しいとしか感じていなかった。
汗に濡れた全身がコクピットに密着していて気持ちが悪い…。
「オルス、聞こえるか」

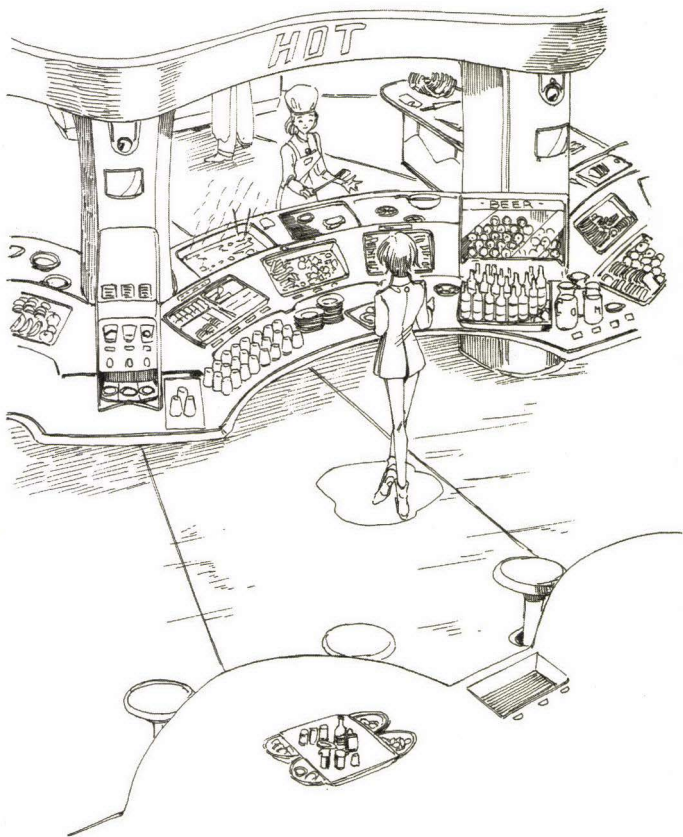
いきなりノーマの声がコクピットに飛び込んできた。
「ボロボロになってるが、死んではいないだろ」
オルスの体は自動的に反応した。
「…こちら、オルス・ブレイク。よく聞こえてる」
宙域シミュレータ上を捜すと、ノーマ機はベクトル表示を点滅させながらオルス機に接近してきている。無造作なマニュアル機動にも見えるが、かなり高度な軌道変更をしている…。
「シェルはボロ・ボロだが…、現在の軌道は最上（ベスト）だ。よくやった！」
あのノーマに誉められても、なかなかいつもの現実感が戻ってこなかった。
「ローヌは予定通り接近中だ。だが、中央管制ブロックが封鎖されている」
「…封鎖？　…ひょっとして被弾したのか」
「いや、被弾はしていない。ローヌは射撃されなかった。詳しいことはわからんが、宙軍の指示通りローヌを減速させようとした船長たちがローヌに制御を奪われた、ということらしい」
「中央管制室は…無事なのか」
「通信系は封鎖されてない。着艦はデルビーが管制するそうだ」
中央管制ブロックを強制閉鎖して船体制御を完全に自分だけのものにしたローヌ・バル

トは航路側面のフリゲート艦の威嚇射撃をすり抜けて航行してきていた。
予定の速度、予定の軌道通りに…。
ローヌ・バルトは予定通りポート・ヴィアネイに入港するつもりなのだ。
何があろうと。

「ノーマ」
「なんだ？」
「二つ質問したい」
「許可する」
「コクピットに収まったまま背中を掻く方法を教えてくれ」
「…余裕をみせてるつもりか？」
オルスは真剣だった。
「背中を掻かせてくれたら次の報酬を全部渡す」
「残念だがそれは無理な相談だ。おとなしく座ってろ。…で、次は何だ」
「ローヌ・バルトは我々の味方なのか？」
「それは…質問なのか、独り言か」
「質問だ。……本当にわからない」
「…………」

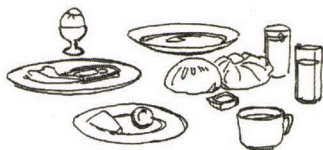
「ノーマ、答えてくれ」
「この回線でそういう話はするな」
「……でも、もうしてる」
「じゃ、早く忘れろ」
「……」
「そろそろ噂話の女王が割り込んでくるぞ。反省と背中を掻くのは着艦してからにしろ。それと寝言は寝て言え。文句があるならいつでも歯をへし折ってやる」
ここでデルビーの声が入ってきた。
「こちらバルト管制。クイック、ブレイク両機を確認。…あたしは寝言言わないし、歯もへし折られたくないわ」
後半は小さな声だった。

（IIにつづく）

ローヌ・バルトのデリカ

最新の宇宙船、そしてそれが最高の「ジーンライナー」ローヌ・バルトであるとはいっても、乗組員にとっては24時間船内で生活し、物資を運び、戦闘もする。でも軍人ではなかったりもする。おまけにローヌも合わせて３種類の人類が共存生活をしているともなれば、そのストレスは想像を絶するだろう。宙軍の戦艦ですら作戦や演習が終われば、長くても３ヵ月後には母港に戻れるというのに、クリッパーレースを行なうジーンライナーともなればそうはいかない。これでは16世紀からの「ガレオン船」での生活とほとんど変わりはない。ローヌ・バルトら武装クリッパーとなった最新のジーンライナーたちはこのことを重要視し、単調ではない船内デザインや、食事に気を使っている。特に食事の内容はジーンメジャーにとって重要で、彼らはインスタントに出来上がるタイプの食事やアウトレットタイプの食事を「エサ」と呼んで最もさげすんでいる（…者が多いだけで、まったく気にしないメジャーも何人かはいるが）。そのために各所属会社では食堂に膨大な予算を駆使し、インテリアも食材もメニューも、きめ細かい配慮がなされている。
ローヌ・バルトでは食事を供給するデリカは船内に３つあり、クルーの食事の内容によって座る場所も選べるようにカフェタイプからナプキン付きのテーブルまで用意してある。また、軽食のカフェも５ヵ所あり、船内の至る所にある休息スペースには、飲み物や嗜好品のサービスが受けられるポットが設置されている。何ともなればコクピットの中でチャーハンや寿司の出前を取ることも可能なのだ。 食事は１日４回までが保証されており、それ以上は給料から天引きとなる。毎回の食事は認識カードでチェックされているが、食事内容の制限はない。一般職も管理職もマイナーもメジャーも管制官もシェルドライバも特別なメニューはない。パイロットだけが高カロリー食を取っていたのは太古のことだ。食事の内容はデルビーのメニューを見ていただければ大体わかるだろう。食事が「何回目」という風に記されているのは、船のクルーは24時間体制のためだ。起きてから何度目の食事ということだ。デリカでは、朝食を食べている隣で夜食を食べている、といった光景が普通に見られる。各デリカやカフェにはもちろん店名があり、「エスト」だの「アンジー」だのといった店がある……可能性は皆無とは言えない。しかしデルビー。お前は食い過ぎだってーの!!
以下、次巻につづく!!

ショーゲキの事実☆

ある日のデルビー(ちゃん)の1日のメニュー

1回目.

ミルク
プロシュート3枚(生ハム).
ゴーダチーズひときれ
すもも1コ
オレンジジュース.
クイニィ・アマンとホシカキア
(ただのパン)
コールドパンプキンスープ
ゆでたまご(3分15秒).
コーヒー2はい.
はちみつ.(パンに).
カラマンシージュース

2回目

— ☆ —

ワイン.(バローロ)500ml.
レンズ豆のカップスープ
ペンネゴルゴンゾーラ.(パスタ)
夏野菜の煮込み.(ラタテゥーユ)
仔羊のアッパンキオ(グリル)
マーシュのグリーンサラダ
カシスとココナッツのシャーベット.
パパイアぞえ.
コーヒー.
チョコボンボン2コ.
山羊のチーズ(追加した)

3回目

—☆—

ガス入りミネラルウオーター

スパイダークラブのスパゲッティ.
(クリームソース)

グリッシーニ(細長いパン)5本

アイスバイン&ザウワークラフト.
(塩ゆでブタ肉)パプリカ.

ニコスサラダ(海のサラダ)

ミルクティー.

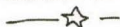
—☆—

おやつ

ビクデーヌ&ガレットプロバンサル
(ソバ粉のクレープ)

ミントフレーバーティー.
だんだんせまくなってきた…

—☆—

4回目

サッポロ一番塩ラーメン

生春巻サイゴン風.
(クレープ食ったあとに同じもんくうな!)

—☆—

仕事のおわり

ラム酒の3倍割り(海軍伝統!!)
(これのみ配給品。いつでもくれる.)

DICTIONARY of Schell Bullet

シェルブリット用語解説

【あ】

●合図［↑P206］
シェルへの簡易入力操作。
連続した複合動作をショートカットとして登録しておくことにより、ドライバは1アクションでシェルを制御することが可能となる。
またシェルの学習機能により、ドライバの予備動作から次の要求を自動認識させて、ショートカットを登録しなくても同様の機動を行なわせる事もできる。

●アウターヴィアネイ［↑P169］
惑星「ヴィアネイ」の星系外域にある宙域で、ヴィアネイ宙域駐屯軍の艦隊集結ポイント。
軍用宙域に指定されており、民間船の宙域侵入は緊急時を除き認められていない。
そのためエマージェンシーコールを示さずに侵犯する船舶等に対しては、艦長判断による無条件発砲が認められている。

●アラート［↑P8］
警報の意。
状況において「フェーズワン」〜「フェーズスリー」までが発令され、カウントが上がるほど臨戦態勢となる。
当然、私的会話、不明瞭（めいりょう）な会話や勝手な行動は一切禁止される。

●アンカー［↑P138］
有線接触通信用のケーブル。
先端にピットと呼ばれる情報伝達端子を備え、シェルの外郭に吸着させて接触通信による情報伝送を行なう。
シグナル（情報信号）は符号化した情報をマイクロ振動波に乗せてピット経由で伝えるため、走査妨害や傍受に対して非常に有効である。

【い】

●遺伝子特異体［↑P75］

ジーンマイナーの中にあってジーンメジャーと相似した遺伝子デザイン配列を持つ者、もしくはその体質。

先天的な遺伝子レベルでの突然変異によるもので、そのデザイン配列からジーンメジャー並の知的・肉体的能力を有する可能性を秘めていると考えられているが、過去にその能力が発露した例はあまりなく、発露してもジーンメジャーの能力には及ばない場合がほとんどである。

しかし、同じジーンマイナーの中にあっては、その基本的な能力は格段に高い。

発生率は極めて低く珍しい存在であるが、家庭で視聴できるニューズリンクなどで扱われることもあり一般的知名度は高い。

またその特殊性から遺伝子特異体と認定された者は全て政府管理対象者となり、身柄を中央遺伝子管理省の管理下に置かれることになる。

その存在は「最初のジーンライナー」が地球に帰還して人工的な遺伝子デザインにより、ジーンメジャーという種族が誕生してから初めて見つかるようになった。

発生あるいは変異の起源については、ある種のウィルスに原因を求める説、生体場という科学的に立証されていない一種の「生気論」の実証であるとする説、こうした突然変異体は過去にも存在したがこれまでは検証されていなかったにすぎないとする説などの諸説があったが、遺伝子特異体の子供たちが生まれてくる原因はいまだ不明のままである。

【う】

●ヴィシー自治区［↑P75］

ウィラック星系群の外れにある惑星「エルサード」のジーンマイナー自治区のひとつ。

南部はジーンマイナーたちの居住区として割り当てられ、小さいながらも街を形成している。

また、北部に位置するなだらかな丘陵を覆う森林地帯は避暑地として知られ、多くのジーンメジャーが別荘を構える。

ヴィシーに隣接するハヴィット自治区は高価なリルス・ワインの原産地で有名。

【え】

●NLAC［↑P153］

海軍長距離侵攻戦闘団参照

●FB-105バーサーカー［↑P182］

空中での格闘戦を主眼に置いて設計された、特徴的な前進翼とカナードを備えるマックガーランド・インターナショナル社製軽量多目的戦闘機。

76万2000トンの推力を誇る自

社製単発ベクターエンジンを装備し、最高速度は標準音速（地球上での音の伝播速度を基準とした速度）の6・8倍（非武装時）。
装備を一部交換するだけで、要撃・攻撃・偵察などあらゆる任務に対応可能。
細身で剛性に優れた機体は敏捷な機動性能を実現し、バーサーカー（狂戦士）の名に恥じない荒業を披露する。

●エルマー社［↑P49］
イングラード工業地帯に拠点を構える「バルトライナー」傘下の企業の一つ。
創立以来1世紀半と他社に比べ若いがその技術力には定評があり、コンピュータや光学関係製品を主として扱う。
またライナー船の艤装関係の開発も行なわれており、「ローヌ・バルト」の艤装のほとんどは同社が行なっている。

【お】

●オーダ［↑P204］
注文／要求の意

●オルゴンボックス［↑P47］
表向きはローヌ・バルト最外縁部にあるカーゴルームとなっているが、実際はシェルの整備ハンガー。
未だ極秘扱いのシェルを扱うこともあり中央管制室以上に警備が堅く、常に武装警備員がガードを行なっている。
また、オルゴンボックスへの入室には通常とは別に発行された特別な入室証が必要となっている。

【か】

●カーニハン機関［↑P151］
人口爆発により人類が広く外宇宙へ飛び出すきっかけとなった恒星間航行システム。
基礎理論設計者「ルール・カーニハン」の名前から命名された。
カーニハン機関自体は古くから準恒星間航行システムとして一部の艦艇に搭載されていたが、その当初は長距離ワイプの際に重力場制御システムが暴走し通常空間へ転移できなくなるという問題が解決されていなかったため、高出力の機関を搭載することができなかった。
しかし、最初のジーンライナー船の地球帰還によってもたらされた「異星のテクノロジー」が当時不可能とされていた諸々の問題を解決し、現在では本格的恒星間航行システムとして外宇宙を航行する多くの艦艇に搭載されている。
また、推進機関のシステム構造は違うが、ジーンライナー船の航法も原理的にはカーニハン推進と同じ為、便宜上カーニハン機関と呼称されている。

●海軍長距離侵攻戦闘団［↑P113］
（NAVY LONGEST ATTACK COMBAT）
地上軍の中でも生え抜きの軍人、スペシャリスト達で構成されるエリート集団。
その戦いぶりは〝闘神ガルフも道を譲る〟とさえ言われるほど凄まじく、なかには彼らが戦線へ投入されると同時に降伏した敵もいたという。
ここを生きて退役した軍人は孫の代まで遊んで暮らせるほどの恩給を受けることができるが、その作戦成功率の驚異的な高さとともに、死傷率の高さでも他の部隊を圧倒するため、ほとんどの者が数年から十数年で転属もしくは除隊している。

●海軍特殊戦司令部［↑P201］
地上軍の中でも特殊オペレーション専門の部隊を統括・指揮する作戦司令部。
何よりも「オペレーション（作戦）の完結」を最優先とし、いかなる犠牲もいとわない。
事実その驚異的な作戦完遂率から地上軍の切り札的存在であるが、「完結」のための強引なオペレーションや高い死傷率などから地上軍内部でも批判の声が多い。
だが地上軍の中にあって政府最高指導部直轄という特殊な位置付けのため、軍統括幕僚府も強い発言力を持つことができないでいる。

●加速ベクトル表示［↑P8］
目標物の加減速状態と進行方向の表示。
加速ベクトル表示の赤い点滅は、目標物の加速状態を意味し、グリーンの点滅は減速を表す。

●可能機動領域［↑P8］
速度を持った人工飛翔体が機体の限界を越える事なく、現在速度での機動を継続して行なうことができる領域を示す空間。
可能機動領域は速度と機体の耐負荷限界によって決定され、基本的に可能機動領域は速度の上昇と共に狭くなり、速度が下降すれば逆に広くなる。
だがどちらの場合も飛翔体が可能機動領域を超えて外に出た場合、機体に限界以上の負荷（重力）がかかり、最悪の場合はその機体がバラバラに分解する事態となる。

●カル［↑P152］
世界政府が発行する統合通貨の貨幣単位。
人口爆発と食糧危機により崩壊寸前となった従来の金本位の貨幣制度は、世界政府統制下の政府食糧券となることでその信用を回復するに至った。
現在では、すべての宙域で流通可能な唯一の通貨単位であり、辺境自治政府が発行する独自通貨とのレー

ト交換も可能。
　また、カルをポイント変換して蓄積し、ウィルチケット（自社製品の販売やサービスを目的としてメジャー財団やマイナー系企業が発行する引換券の総称）と交換するサービスなども盛んに行なわれている。

【き】

●**ギースシッピング社**〔↑Ｐ95〕
　ジーンライナー船「シルバ・ギース」によって創設された、業界では最古参に属するライナー系企業。
　駿足（しゅんそく）で知られたギース一族により数々の速度記録を樹立して、かつては業界の最大勢力であったが、「バルトライナー」社の「ニナ・バルト」就航によりその勢力図は大きく塗り替えられてしまった。

●**企業間の戦争**〔↑Ｐ14〕
　最速の称号をかけたライナー企業同士の企業間競争のこと。
　ライバル企業のクリッパーより少しでも早く積荷を運ぶため、通常航行はもとより航路安全規定を無視した非合法な航行まで、手段を問わぬあらゆる行為が次第にエスカレートして行なわれるようになった。
　近年ではシェルの開発成功により航路妨害などの実力行使を含んだ危険な行為まで行なわれるようになり、関係者の間で不安が広がっている。

●**機動制御リミッタ**〔↑Ｐ207〕
　シェルの機動を抑制する制御システム。
　学習能力を有するシェルはドライバの情報だけでなく、様々なデータを情報として蓄積する。
　その結果、周りの状況に応じた様々な機動を自動で行なう事が可能となるが、ドライバがオートパイロットを併用して操作した場合などは時としてシェルがドライバの意思に反した機動を行なおうとする。
　そのようなシェルの機動を抑制し、ドライバの意思による機動を優先させるのが機動制御リミッタである。

●**競争**〔↑Ｐ102〕
　「最初のジーンライナー」の帰還後、軍用と一部民間船舶（主に低速艇）を除いた宇宙船のほとんどがジーンライナー種となった。
　だが、ジーンライナーはこの独占状態を好ましいものではないとして、ジーンメジャーと共同で企業を設立、恒星間飛行は競争の時代を迎える。
　物資輸送航路での速度記録の樹立、所要日数を短縮するために、ジーンライナー達はその持てる能力の全てを注ぎ、「少しでも速く」「何よりも速く」を目標に競い合う。
　あるジーンライナーの言葉がこのことを端的に説明している。
　「競争は我々を進化させる」
　ジーンライナー種にとっては貨幣の獲得も自社の成長も根本的な意味

がなく、構成された物質的なスケールより情報（遺伝子）の高密度化に意義があるらしいが、ジーンライナー以外にその事実を知る者は少ない。

●機雷コンテナ［↑P144］

シェルでの運用を前提として新たに開発された機雷の運搬・撒布を行なうための戦略用コンテナ。

82基のEGR702型小型反応機雷が装填可能で、シェルの左右に装備して運用される。

EGR702型小型反応機雷は航路封鎖ポイントでコンテナから射出された後、予め入力された配置点で静止、動作状態となり航路封鎖面を形成する。

装填される反応機雷ともどもサカイ重工業社製。

【く】

●空間転移［↑P151］

物質がワイプによって通常空間から亜空間へ、またはその逆に亜空間から通常空間へ遷移すること。

空間転移は重力をかけて歪曲させた空間に一定以上の速度で突入するため、干渉作用により浮遊粒子がプラズマイオン化し虹色の放電現象を伴う。

このことから空間転移ポイントのことを「ランブロウ（丸い虹）ゲート」ともいう。

●クリッパー［↑P7］

ジーンライナー船の中で高速長距離巡航が可能な貨物船のこと。

基本的にジーンライナー船はほとんどがクリッパーに分類され、その中でも特に船足に自信のあるライナー船のみが「クリッパーレース」へ参加している。

また、レースへ参加しているクリッパーの大多数が非武装であるのに対し、オプションとして登録された兵装を装備する「武装クリッパー」も僅かながら存在している。

クリッパーに装備される兵装の多くは、自社系列企業で開発されたニューロン光線砲やパルスビームといった、宙軍でも正式採用されているスタンダードな光学系兵器が採用される場合が多く、中にはその船でしか採用されていないような特殊装備を持つクリッパーもある。

だが、近年まで「武装クリッパー」の存在は一般には知られておらず、「争いを好まない」と認識されていたジーンライナーが武装していた事実は、人々に大きな衝撃と混乱を与えた。

●クリッパーレース［↑P102］

「バルトライナー」社と「ギースシッピング」社の間でジーンライナー船によるスピード競争が勃発して以降、「クリッパーレース」という中世紀の頃に使われていた言葉が人々の間で復活した。

元々は中世紀に定期航路を航行する帆船によって、物資輸送のスピードを競ったのが「クリッパーレース」の始まりである。
少しでも早く目的地へと到着するために、沈没の危険をもかえりみず命をかけて嵐の中を走り続けた船乗りたちには、最高の名誉と賛辞が贈られたという。
だが内燃機関による大型貨物船の登場により、帆船による物資輸送は年々その数を減らし、それと同時に「クリッパーレース」という言葉も人々の間から忘れられていった。

●軍隊［↑P22］
世界政府樹立後、政府に敵対する不満分子掃討を目的として各国軍備を再編制して創立された。
現在では不満分子掃討に加え、惑星間紛争や内戦の鎮圧などといった様々なオペレーションが組み込まれ、他惑星系群への派兵も多い。
政府近衛(このえ)機関である機甲機動部隊を有する政府最高指導部直轄軍と、議会配下の一般政府軍とに大別される。

【け】

●契約シート［↑P27］
契約約款や契約者に関しての情報、承諾サインなどが記録された契約証。また同内容を記録したカードも「契約シート」と呼ばれる。
企業が発行する契約シートには必ず社章を明示する事が義務とされ、契約不履行となった場合は重いペナルティが科せられる。
カードは表側に社章をあしらったクレジットカード・サイズの光学読込式カードで、裏面には取り扱いに関しての簡単な注意事項が記載されている。

【こ】

●光学散弾砲［↑P140］
マーカランチャーと並ぶシェルの外部主力兵装の一つ。
正式名称は「ライアットブラスター」。
マーカランチャー同様、慣性重力のバランスを保つため、両手に持って絶えず体の軸線上におかなければならないという制約があるものの、個人機動兵器が装備運用できる兵装の中では最強の破壊力を持つ。
実砲は15発の「500カラット・プラズマグレイン弾」と呼ばれる光子弾を内包した光学グレイン散弾で装填可能実砲数は9発。光速で打ち出される光子弾は、狙いさえ外さなければほぼ確実に敵シェルを撃破できる。

●高慣性機動［↑P128］
超高速飛翔(ひしょう)時における機体の機動変更のこと。
言葉で書くと簡単だが、超高速で飛翔するシェルの軌道を急激に変更

しようとした場合、機体の各部には想像を絶する重力が加わる。
　特に関節や装甲の接合部といった部分は重力が集中しやすく、機体の耐負荷限界を越えるとそこから分解してしまう事態もありえるため、ドライバはシェルを操る上でその限界点を知ることも重要なポイントとなっている。

●攻撃型潜水空母　［↑P112］
　ニーマイスト級攻撃型潜水空母「ガルフィスト」。
　ピナのかつての乗艦で海軍長距離侵攻戦闘団ファースト艦隊に配備。またギルレット艦隊にも同級艦が配備されている。
　船体は振動吸収素材のパブレット樹脂でコーティングされ、4基の流体推進機関も水の攪拌（かくはん）音をほとんど発生させないサイレントシステムを装備するため、敵の水中探査波や集音システムに探知されにくい特徴を持つ。
　搭載される艦載機は42機で、そのほとんどがVTOL機（垂直離着陸機）である。
　また270ミリ対空レーザーや機動対艦ミサイル「アレックス」、電磁魚雷なども装備し、駆逐艦並の攻撃力を有している。

●攻撃兵装コンテナ　［↑P205］
　マーカランチャーからの要求に従った兵装を装填して、目標ポイントへ射出するための戦略用コンテナ。

●交戦規則（ルール）　［↑P23］
　捕虜の扱いや休戦時の取り決め事項などを細かく定めたルール。
　政治的な会合の席上で決定されるため末端の兵士まで周知徹底されていない場合も多く、時折、休戦時に奇襲を掛けたり、逆上した兵士による捕虜虐殺事件などが発生し問題となっている。

●交戦領域　［↑P207］
　複数の可能機動領域が交差した領域。
　機動兵器が互いに相手を捕捉（ほそく）し合いながら戦闘を行なう場合などに発生する。
　シェル同士の戦闘も例外ではなく、その兵器としての性格上からライアットブラスター等を用いての接近戦となる場合が多い。

●航路安全規定　［↑P152］
　宙域における貨物船舶の航行や積載貨物についての取り決めを定めた法律。
　ワイプポイントの指定や重力場の限界加圧、惑星系内での速度規制など微細にわたって決められており、違反した会社や乗組員には程度に準じた罰則が科せられる。

●航路索敵　［↑P9］

シェルブリット参照

●航路襲撃パターン［↑P9］

宇宙空間において、高速機動兵器を用いて航行艦船に対し襲撃をかける際の攻撃パターン。

高速で航行する艦船に接近して攻撃をしかける場合、パターン化した幾つかのセオリーがあり、それらを総称してこう呼ばれる。

●航路妨害（封鎖）［↑P126］

航行を妨害する目的で船の航路に障害物を撒布（さっぷ）、もしくは機動兵器を配置すること。

軍が敵の補給路を断つ場合などによく行なわれる。

人工的に展開される航路封鎖面には通常、機雷などの爆発物が使用される場合が多く、機動兵器を用いる場合には巡洋艦など数隻を配置するのが常である。

●航路予想領域［↑P212］

自船がこれから航行するであろうと予測される航路を全て包含する領域。

当然、予測される領域内の障害物は航路索敵（シェルブリット）により排除しておく必要がある。

●57ミリパルスビーム砲［↑P49］

「エルマー」社が開発した小型ビーム砲。

口径57ミリとパルスビーム砲の中では最小の部類に属するが、「ガーナ」級重巡の105ミリパルスビーム砲と同等の出力を誇り、現在「エルゴ」級高速巡洋艦などに採用が検討されている。

【さ】

●最終兵器［↑P37］

人工的にブラックホールを造りだし、星系ごと消滅させてしまう究極の惑星破壊兵器。

カーニハン機関の荷重力システムを兵器として転用したもので、200年ほど前に世界政府に対し独立戦争を仕掛けたイルス軍の母星「タロン」に対して一度だけ使用された。

しかし軍部の強行使用に対し、議会や各方面の環境保護団体が「あまりにも非人道的な兵器」として猛反発。

世界政府上層部はその正当性を主張したが、各地で使用禁止を求める抗議デモやキャンペーンが大規模に展開された。

中でもジーンメジャー写真家「ウエイズ・ロック」の撮影した「帰る星を失い流浪する孤児の少女」は反対運動のシンボルとなり、リベラル派のメジャー議員達も巻き込んだ大規模な反対活動へと発展する。

当初は無視の姿勢を構えていた世界政府上層部も、やがて高まる反対運動に屈する形で全惑星破壊兵器の永久凍結を行なう決定を下すに至っ

た。

●最初のジーンライナー［↑P51］

人類がカーニハン機関の開発に成功し、外宇宙へ活動の場を求めてから3世紀余りが経過した頃、木星の衛星軌道上に1隻の奇妙な姿をした宇宙船が出現した。

その船こそ150年ほど前に消息を絶ったラベル第三星系方面調査団の女性スタッフの一人であり、人類が初めて接触したジーンライナーであった。

惑星開拓調査中に流星群との接触事故により仲間を失ない、彼女自身も瀕死の状態で宇宙を漂流していたが、異星の宇宙船に遭遇し彼らの持つテクノロジーによって彼女は生体宇宙船へと生まれ変わったという。

だが彼女を生体宇宙船へと「進化」させた異星の宇宙船については、最後まで彼女の口から語られることはなかった。

当初、彼女の処遇について世界政府内で討議が繰り返されたが、議会が紛糾するばかりで結論が出るに至らなかった。しかし政府最高指導部は突然彼女を「人類の進化」と認め、人類とジーンライナーは共存の道を歩むこととなる。

だが、世界政府最高指導部の意思決定の裏に、彼女とある密約が交わされていた事を知る者は少ない。

●再生機［↑P27］

物質を原子レベルまで分解して再構成し、再資源として活用する装置。小型のものが一般家庭にも普及している。

●サカイ重工業社［↑P95］

惑星「ベルダ」に本拠を置く「ギースシッピング」傘下の企業。

元々は軍との結び付きが強い軍需企業であったが、その技術力を欲した「ギースシッピング」社によって半ば強引に合併・吸収が行なわれ民需企業へと変貌を遂げた。

当初、軍部は吸収・合併に対し強硬に反発したが、最高指導部からの圧力により現在は友好関係が保たれている。

民需企業となり役員のすべてをジーンライナー種と交代させた後も、軍部への納入を名目に兵器の開発は継続されており、最近ではベルタ・ギースに搭載されるシェルの開発が自社独自で行なわれ、その技術力の高さが改めて評価されている。

●さもなければ…［↑P13］

ジーンマイナーがメジャーの身分を名乗る、いわゆる身分詐称は、メジャー種への冒瀆とされ、その事実が発覚した場合には身柄を拘束後、最高評議会大法廷において、弁護士も許可されないまま公開死刑が宣告される。

しかも、財産は没収され、加担者

（身分証を偽造した者、身分詐称を黙認していた者など）もサメル（鉱物資源採掘を目的とした強制労働者流刑星）送りとなるなど、最も重い罪の一つとされている。

●塹壕［↑P23］

戦場において地面に掘られた退避用の穴の事。

その中に身を潜めながら攻撃を行なったり、突撃のタイミングを図る。またそのまま生活の場となることもある。

その様子から「蛸壺」と呼ばれたりもする。

【し】

●C群管制官［↑P29］

航路作業支援要員。

「C群」とは航路エリアを示し、主として航路上で作業活動を行なう船外甲板作業要員（主にシェル要員）の指示・誘導を行なう担当官のこと。

●ジーンマイナー［↑P7］

遺伝子デザインを行なって肉体的能力を飛躍的に高めているジーンメジャー種に対し、遺伝子デザインを行なっていない（行なえない）人々。

その理由は医療関係で使用されるごく一部の遺伝子デザイン以外は、完全にジーンメジャーが独占しているためである。

また過度な遺伝子デザインを行なっていないため、その外見や能力は創成期と呼ばれる時代からほとんど変わっておらず、はっきりと雌雄の区別もできる。

ジーンメジャーとは同一の生活圏を共有することから競合関係にあるが、ジーンメジャーはジーンライナーと共に、遺伝子デザインと宇宙航行における貿易とその利益を独占しているため、事実上、ジーンマイナーは最下層の人類とされている。

●ジーンマイナー差別［↑P7］

ジーンメジャーの中には自分たちよりも能力的に劣るジーンマイナーに対し潜在的に差別意識を持つ者が多い。

そのことを如実に表わしているのが「マイナー差別ジョーク」と呼ばれるもので、笑いと風刺の中にジーンマイナーへの嘲りや侮蔑が盛り込まれている。

この事からもジーンメジャーの支配階級意識が窺える。

このような「ジョーク」に当初は怒りの色を露にしていたジーンマイナーたちであったが、ジーンメジャーによる支配構造が確立されるにつれ、次第に自虐的な意味合いを込めて自らマイナー差別ジョークを使う者が現われ始めた。

「その男はジーンメジャーらしからぬ事に…」で始まるマイナー差別ジョークはその最たるもので、「あいつはジーンメジャーのくせに我々ジ

ーンマイナーと同じような…」と自らを卑しめるために用いられるジョークは、数百年という時の中で平等という建前の下に支配され続けたジーンマイナーの敗者意識に他ならないと分析する専門家も多い。

　また、ジョークでは済まないあからさまな差別も日常的に行なわれている。

　例を挙げると、ジーンメジャー企業によるジーンマイナーの不当な雇用拒否や解雇、３K役務への強制就労、マイナー系企業や商店への商品や融資の停止、マイナー関連施設を狙ったテロ活動、などといった事件記事が連日のようにマイナー系ニューズリンクで取り上げられており、マイナー議会でも毎回のように議題に上っている。

●ジーンメジャー［↑P7］

「最初のジーンライナー」がもたらした遺伝子デザイン情報と異星の技術を独占し、その技術を用い自らの遺伝子をデザインすることによって、肉体的能力を飛躍的に進化させた人々。

　また独占した遺伝子デザインとその技術により蓄えられた莫大な資産によって、事実上、この世界の支配階級におさまっている。

　ジーンマイナー種と比較した場合の外見的傾向としては

1　やや中性的な人物が多い（男性的、女性的な人物もいる）
2　髪の色は漆黒が多い（赤毛も存在する）
3　肌の色は浅黒い場合が多い
4　容姿端麗な場合が多い
5　雌雄同体である

　などが挙げられ、外見で特徴がある人物の容姿には、主に親の美意識が反映されている（鼻が異様に大きい、耳=外耳がない等）。

　そのため彼らの遺伝子はジーンマイナーのそれとは性質を異にし、自然環境下での交配は遺伝子レベルでの拒絶反応を示すため成立しない。

　もしメジャーとマイナーの交配を行なうのであれば、中央遺伝子管理省の認可を取り、試験管等を用いての科学的交配を行なって拒絶反応を抑制してやる必要がある。

　さらにジーンメジャー種は「種の多様性」を保持するという戦略をとっているため、その「人工的に進化した種の形態」が、何かの事件（イベント／環境要因）によって全滅してしまうような単一化を極力避けている。

　そのため生殖に関しても通常生殖に加え単性生殖（単なるクローンではなく自己の改良バージョン）、同性生殖、遺伝子操作を前提とした親族婚なども一般的に行なわれ、中世の王族なみに親族関係が複雑になっている（遺伝子デザインと遺産の相続に関係するため）。

●ジーンライナー ［↑P20］

異星の遺伝子デザイン技術と人類のDNAによって生み出され、地球にそのテクノロジーをもたらした「生きた宇宙船」。

単独での恒星間航行能力を有する。その船体は「生命体」である証と（あかし）して、金属ではなくメタリック粒子の入った絹のような柔らかさを持った特殊な外郭で覆われている。

駆動は船体の上部と下部に対で存在するヒレのようなものを共鳴させてプラズマ・ロケットモーターを加速させる。

また共鳴したヒレからは美しい光輪を発し、深海の巨大な発光クラゲの触手のように長くのびてゆく。

これが「フルレット・フォーン」と呼ばれるジーンライナーの識別ポイントであり、ジーンライナーの性能を生まれながらに決定するもので、その長さは最大15キロにまで達するものもあるという。

光輪を長くのばして航行していく様は例えようもないほど優雅で美しく、誰もが実際にこの目で見たいと願うが、この高速航行を実際に見る事ができる人間は限られている。

ジーンライナー船は外部からその精神状態を判別することができる。

船体前部上方にある楕円形（だえん）のくぼみ（個体によって場所や形状に差はあるが）がそれで、ここに不思議な象形文字のようなものが浮き出しジーンライナーの精神状態を表わす。

またジーンライナーの直接の意思表示は艦内各所、各部屋に必ず存在する黄色のパネルライトによって行なわれる。

武装クリッパーの船体武装は個体によって異なるが、主にレンズ口径2000〜3000ミリのニューロン光線砲や小口径のパルスビーム砲などが搭載されている。

またマーカーポイントへリクエストされた攻撃兵装コンテナを転送する装置を搭載した船も存在する。

ジーンメジャー達は、ジーンライナーから提供された遺伝子デザイン技術の恩恵によって、事実上、人類の支配階級に君臨しているが、実は現在も重要遺伝子デザイン情報のほとんどはジーンライナーが握っている事実を知る者は少ない。

通常時におけるライナー船とのコミュニケーションは高速言語やフロー言語で行なう必要があるため、サポートは特殊能力に優れたジーンメジャーが担当するのが一般的である。

だが特別な場合には、合成された音声を使ってジーンメジャーやジーンマイナーに語りかけることもある。

また、ジーンライナー同士では、短距離の精神感応の一種で会話を交わしている痕跡（こんせき）が確認されているが、ジーンライナーは人間型の人類とは異なった精神構造を持つと考えられているために会話の内容などは現在もわかっていない。

●シェル／ｓｃｈｅｌｌ［↑Ｐ10］

正式名称は「Ｇ－ＳＣＨＬＬ－１５５４宙間作業機」。

表向きは宇宙空間作業用有人ロボットとされているが、実態はジーンライナーが近年新たに生み出した人型高機動戦闘兵器。

シェルとは開発コードのＳＣＨＬＬの部分を無理やり音読したものだが、開発段階から使用されていたことに加え、「ｓｈｅｌｌ／甲羅、砲弾」のイメージもあって俗称として定着した。

全長12メートル。自重75トン。最大積載時１８０トン。

資産登録の書類上はジーンライナーのオプションとされているが、実際はジーンライナーの肉体の一部、生きた器官でもある。

開発はライナー一族の独断により決定され、ジーンライナー系企業「ライナーメタリカ」社が極秘裏に開発・ロールアウトさせた。

しかし、開発終了から5年が経過した今も一般には公開されておらず、写真も存在しない。

現在、人類が制御できる最速の有人機であり、その最高速度は史上最速のクリッパー、「ローヌ・バルト」さえも凌駕（りょうが）する。

宇宙空間を移動する人工飛翔（ひしょう）体のなかでは、最も高速で過激ともいえる機動が可能な最新鋭の戦闘マシンである。

その高機動性が実現できたのはジーンライナーが独占し秘密としている異星人のテクノロジーがあったからであるが、シェルのパーツは殆（ほとん）どがブラックボックス化されているモジュールで構成されている為、多くが謎とされたまま使用されている。

外観は形容し難い、例えて言うならある種のエイリアンを連想させる近未来的フォルムで、各所に装備される巨大なロケットモーターが見る者に異様なイメージを与えている。

体を覆っている装甲は重金属のような輝きを放っているが、実際にはジーンライナーの外部装甲と殆ど同じ組織構成である。

コクピットは胴体中央部にあり、両サイドにはキャノピーが付く。またシェードを下げると肉眼で外部を見ることも可能である。

機体各部にはジーンライナーの意思表示ポイントである黄色いパネルライトが付けられており、整備員はここから情報を読み取り整備・調整を行なう。

またコクピット内のパネルライトはシェル同士のデータ交換インターフェースとしての機能も持っている。

シェルの過激ともいえる機動は肩、腰、足に装備されている巨大なプラズマ・リンク・ロケットモーターにて行なわれる。

このロケットエネルギーは推進モーターだけでなく、シェル本体を動

かす駆動モーターとしても使用される。
肩と腰には4基の独立した巨大なモーターがつけられ、ロケットモーターから送られてくるエネルギーで発動する。
その強大なエネルギーの微調整は各モーターについている楕円形のパーツにて行なわれているようだが、詳しい事は判っていない。
ジーンライナーのようにエネルギーの自己供給能力を持たないシェルのエネルギーは、その全てをロケットモーターに依存しているため、おのずと活動時間に限界がある。
ましてその小さな機体にもかかわらずローヌ・バルトを凌駕するという驚異的なスピードを誇る為、外部活動時間はせいぜい45分が限度である。
これも戦闘（シェルブリット）になればさらに短くなり、20分を超えて活動できるパイロットは優秀と言わざるを得ない。
両腕には増槽用のハードポイントがあり、これで初期運動をプールする事が出来るが、慣性重力を減らすために使い切ったら捨ててしまう。
内蔵する武装としては頭部に37ミリパルスビーム砲が2基搭載されている。
腕には2発ずつプラズマミサイルが内蔵されているが、光学ミサイルとはいえ使い切った場合はそれまでである。
外部主力兵装には光学散弾砲の「ライアット・ブラスター」と兵装転送システムの「マーカランチャー」が存在する。
またジーンライナーから転送される重武装「ホエール・ブリット」の存在も確認されている。
これは重量100トン以上もある巨大な銛で非常に原始的な武器ではあるが、高速移動するシェルが自ら発射台となって撃ち込むことで、その速度、及び質量により巡洋艦程度ならば簡単に貫通する威力を持つ。
だがその巨大な質量から、高速機動を要求されるシェルブリットでの運用は難しい。

●シェルブリット［↑P10］
ジーンライナー船からシェルと呼ばれる宙間作業機を前方に射出し、航路確保を行なうことを目的とする船外作業。
企業間の苛烈なスピード競争により、減速・迂回を嫌ったジーンライナー船が採用した究極のシステムである。
航路上にある障害物を人手により排除するため、高速航行するジーンライナー船の電磁カタパルトから船前方に射出されたシェルドライバは、超高速で障害物に接近し一瞬のうちにその全てを排除しなければならない。
また帰艦も自力で行なわなければ

ならず、失敗した場合でも回収が行なわれることはない。

この名称は、シェルドライバ（パイロット）が自嘲気味に使っていたいた俗称が一般化したもの（自嘲＝しょせん俺は「鉄砲玉」）。

●ジェンダー傾向〔↑P76〕

外見、容姿の傾向。遺伝子デザインにより誕生するジーンメジャーは基本的に両性具有であり性別というものが存在しない。

しかし、親の美感や一族の傾向などから外見に特徴を持たせる場合が多く、その特徴の傾向を示す基準となっている。

●支局調査部〔↑P39〕

「バルトライナー」社には市場調査などを行なう事を目的とした調査部が各支局に設置されている。

なかでもエルウィック支局に属する調査部9課（特殊調査課）は一般的には流通しない情報（極秘扱いとなっている情報など）に関しての情報収集活動が主任務であり、諜報部の退役軍人やコンピュータのスペシャリストなどで構成されている事もあって情報の入手率は極めて高い。

また、有能な人材をすばやく確保する必要がある場合などに対処できるよう、ある程度の人事権や決定権も与えられている。

●射撃制御センター〔↑P211〕

艦隊旗艦に設置され、全艦隊の砲塔制御を司ることができる集中制御センター。

通常時は他の艦艇から切り離されて独自運用されているが、全艦艇による一点集中の精密射撃時や、被弾して砲塔運用が行なえない艦艇などの制御を、独立回路を使用してその制御下に置くことができる。

●縦深一撃離脱〔↑P139〕

目標に対して正面から侵攻し、障害物を排除してそのまま離脱する戦法。

機雷のような小さな障害物を多数排除する場合、並外れた技量と反射神経が要求される。

●巡航加速〔↑P137〕

速度の表示単位。基準船（主に母船）と相対する速度を、一定の間隔で定めて設定したもの。

第一、第二、第三巡航加速などと表現されることが多く、一般的には数字が小さくなるほど速度は上がる（例：母船の速度の1・5倍↓第三巡航加速、母船の速度の2倍↓第二巡航加速、母船の速度の2倍以上↓第一巡航加速など）。

設定単位（速度）は軍や企業によって違うが、ライナー系企業間ではほぼ統一して使用されている。

●哨戒船〔↑P100〕

宙域における艦船の航行や運行状況の監視、違法船の取り締まりなどを行なう宙軍の監視船。

●自立型軍用コンテナ［↑P47］
オートバランサー内蔵型で固定ワイヤーを必要としない特殊コンテナ。特徴としては内部がフローティング構造となっており、サイズの割に容積が小さいのが難点ではあるが、コンピュータ等の精密機械の運搬には欠かせない必需品である。
特に軍用コンテナは耐衝撃性や耐腐食性にも優れ、一部が民間でも使用されている。
ナカジマ重工製。

●人工外殻［↑P49］
ジーンライナー船に艤装（ぎそう）を施す場合、直接船の外殻に施すのではなく、人工の外殻を装着して施される。
これは生体である彼女達の外殻に直接艤装を施した場合、大規模な手術が発生するためである。
人工外殻ならば手術の必要は殆（ほとん）どなく、艤装の交換も簡単であるなどメリットも多い。
また、些細（ささい）な傷が大事故につながりやすいワイプ航行に対しても有効であることなどが考慮されている。

●人口爆発
地殻変動とウィルスにより人口の4分の3が死に至るという最悪の事態に直面した人類は、政府指導のもと、種の存続をかけて人口増加のあらゆる方策を試みる事となった。だがそれは、これまでタブーとされていた禁忌を破るものであり、人々の性モラルを著しく崩していった…。
やがて地殻変動は沈静化し、ワクチン開発によってウィルスの根絶にも成功。人口も以前の状態まで回復するに至り、政府も政策を人口抑止へとスイッチさせた。だが一度経験した種族絶滅の恐怖は人々の心に深い傷となって残り、崩壊した性モラルの助長もあって人口は以前にも増して爆発的に増加していった。
だが急激な人口増加は貧富の差の拡大と深刻な食糧危機を生み出す結果となった。人々は混乱し、民族紛争や内戦が各地で勃発（ぼっぱつ）し血で血を洗う混迷の時代が長く続いたが、カーニハン機関の完成により人類は新天地を求めて外宇宙へ飛び出して行った。

●新鮮な林檎（りんご）［↑P152］
最新情報の意。

【す】

●スタビライザー［↑P21］
機体安定装置。
高速機動時における振動や動揺を緩和し機体の安定度を高めるシステムで、この働きにより急激な機動変更でも狙ったラインを外すことなくトレースすることができる。

通常は安定度を高めるため機外に露出しているが、非常時には機内へ収納、もしくは切り離しが可能（その場合は安定度が低下することになる）。

●ストラップ［↑P11］

シェルに体を固定するための装着具。

極端に狭く身動きもままならないシェルのコクピットではあるが、ドライバが搭乗した場合でも若干の隙間が存在してしまう。

その隙間をストラップが膨張することで埋め、ドライバの体を安定させると共に衝撃を吸収するクッションの役目も果たす。

●スパルタンな戒律［↑P61］

ジーンメジャー種はその地位と様々にデザインされた優良な遺伝子や資産を保護するために、厳格ともいえる戒律を持っている。

それは種全体に関わる立法化されたものから、家訓のような一族や個人に関わるものまで様々であるが、どれにも共通するのが破戒者に対しての徹底的な糾弾と処罰である。

なかでも遺伝子情報の漏洩（ろうえい）に関しては特に厳しく、個人の処罰が一族全体に波及する場合もある。

【せ】

●世界政府［↑P74］

中世期の終わり頃、巨大隕石（いんせき）の落下に伴う急激な地殻変動と、大量発生した突然変異ウィルスによって人類は2年間で人口の4分の3を失うという未曾有（みぞう）の危機に直面。

先進各国首脳の提唱により人類滅亡という最悪のシナリオを回避すべく、国家の枠を排除して樹立された統合政府。

現在、その上層部はすべてジーンメジャーで構成されている。

●世界政府データバンク［↑P85］

世界政府樹立以降の政府関係文書や様々な分野における各種データ、個人のプライベート情報から軍の最高機密文書までが記録・保管されている巨大なデータライブラリ。

個々のデータにはそれぞれに閲覧レベルが設けられており、市民クラスや就業内容によって閲覧可能データが決定される。

特にジーンメジャーのプライバシー情報や軍事関係情報のセキュリティレベルは高く、厳重なガードシステムによって何重にも守られ、ハッキングに対する万全の守備体制を誇っている。

しかし、それでもハッキングによるある程度の情報漏洩は事前に考慮されており、カウンタープログラムやダミー情報も用意されている。

そして、真に重要な情報（遺伝子デザイン情報や政府最高指導部関係の情報）は、データバンクから完

全独立したスタンドアローンとして管理され、データバンク以上の強力なセキュリティによって保護されている。

●セルオートマトン［↑P160］

増殖機能を有する自立型プログラム。

セルオートマトンの活動パターンは人間のそれと酷似するよう作られており、行動シミュレーションを作成する際などに用いられる。

オートマトンの基礎理論自体は古く、中世期の頃にはブール代数（論理代数）を使用したものが一応の完成をみていた。

だが、ジーンメジャーとジーンマイナー、さらにはジーンライナーまでが共存する現代においてその適用は難しいと判断。

人類工学の権威、ナシン・アガサ博士によって基礎理論の再構築が行なわれ、新たな配列ロジックを組み込む事でジーンメジャー種とジーンマイナー種に適応できる新たなオートマトンが開発された（ジーンライナー種に関しては情報が極端に不足しているため開発は断念された）。

その核となる部分にはΛ(ラムダ)ロジックと呼ばれるＤＮＡに似たユニークな情報配列が存在し、セルオートマトンはその情報をセックス（増殖行為）によって、別のセルオートマトンと交換しながら増殖してゆき、何度か増殖を行なった後に自壊する。

人類学は学校での必須(ひっす)教科にもなっているため、Λロジックを教材へ転化したβ(ベータ)ロジックが学校教材用として広く使われている。

●戦闘加速［↑P139］

特に規定された速度域の区別はなく、敵と遭遇した際や攻撃を受けた際に戦闘機動速度へ移行する為の加速を総称してこう呼ぶ。

また作戦行動に必要な速度域への加速も「戦闘加速」と呼称される。

ただし、巡航加速と違い急激な加速が要求されるため、シェルの姿勢が不安定であった場合などは機体が分解してしまう事態もありえるので、オートパイロット状態では戦闘加速が発動しないこともある。

●戦闘レコーダ［↑P192］

走査状況や通信内容など、作戦行動時のあらゆる状況を記録・保持するための装置。

バーム素子を用いて情報を記録する為、通信状況や交戦記録、要員の配置から行動までが三次元的に再現できる。

記録された情報は作戦立案資料や、軍法会議での証拠などに使用されるため、作戦行動中は常に記録状態にしておくことが軍規で定められている。

【そ】

●**走査障害**［↑Ｐ189］

走査妨害システム（ジャミングシステム）を使用してレーダー波を攪乱し、敵の走査システムを使用不可にする事。

走査妨害システムは基本的に軍艦にしかない装備であるが、最近では海賊船が装備することも多くなってきている。

また磁気嵐などにより同様の障害が発生することも珍しくない。

●**ソフトウェアリミッタ**［↑Ｐ188］

機体がドライバの技量を越えた機動を行なわないよう、ハードウェアインターフェースの監視を行なう制御プログラム。

上級者向けの制御仕様に設定された機体を初心者が使用した場合、そのレスポンスの良さに反応しきれず微細な制御が行なえなくなる。

それが航路索敵といった細心の注意と集中力を要求される作業であれば、何も行なわないうちから障害物に激突するのは目にみえている。

そうならないよう、ハードウェアへの伝達情報を制御して意図的にレスポンスを落とすのがソフトウェアリミッタである。

ただし、上級者と初心者のレベルに大きな格差がある場合などは、そのレベル差がそのままレスポンスの差となるため、異常に扱い難い機体となってしまう。

【た】

●**蛸壺**［↑Ｐ22］

戦場における避難用の塹壕の意。

【ち】

●**地上軍**［↑Ｐ113］

惑星上で作戦行動を行なう政府議会配下軍の総称。

駐屯軍であれば各惑星単位に総統府が設立され、惑星上に展開する海軍・陸軍・空軍を統括・指揮する。

派遣軍の場合は海軍・陸軍・空軍独自に臨時司令部が設営され、選任された将校クラスの司令官によって指揮が行なわれる。

また派遣軍の統括は近隣星系に設置された総統府によって行なわれ、増援や補給もそこを通じて行なわれることになる。

駐屯軍、派遣軍共に世界政府議会統括幕僚府所属であるが、配下の特殊戦司令部だけは政府最高指導部直轄軍に所属する。

●**宙域シミュレータ**［↑Ｐ８］

統合レーダーとリンクし、索敵可能領域内における重力磁場や電磁波、惑星重力などから目標物の行動予想範囲をシミュレートする仮想演算表示装置。

また蓄積されたデータから敵シェルの攻撃パターンをシミュレートする際などにも使用される。

●宙軍［↑P20］
人口爆発により外宇宙へ活動の場を求めた人類の秩序維持と、地球外知的生命体からの防衛を目的として創設された。
現在の主な任務としては惑星間紛争や反乱軍の鎮圧、他星域への兵力輸送、宙航図の作成、航行安全の監視など多岐にわたるオペレーションが展開されている。
保有戦力では兵員数は地上軍に大きく水をあけられているものの、火力では圧倒的優位に立つ。
また議会での発言力も強いことから宙軍所属者は地上軍に対しエリート意識を持つ者が多い。

●宙軍艦隊司令本部［↑P177］
全宙域に展開する宙軍機甲艦隊を統括する指揮中枢。
その指揮発令所は戦列旗艦「パンジャブ」内に設営され、そこで各方面に展開する３００を超える機甲艦隊の動きを掌握する。
組織上は議会配下軍にカテゴリされる宙軍であるがその発言力は強く、時として議会をねじ伏せて強硬な作戦行動を起こす事もある。

●宙港［↑P7］
主として衛星軌道上にある宇宙船整備ドック（軌道ドック）の集まりを指す。
軌道ドックは個人経営のものから企業運営のものまで大小様々であるが、軍用港は非常時を除き民間船の入港を禁じている。
また、長距離航路の中継ベースとして企業が運営するコロニーのドックも基本的に宙港と呼ばれている。

●超高機動プラズマカートリッジ弾［↑P204］
光学系兵器の開発を得意とする「バルトライナー」傘下のグループ企業「ダナスカート」社で開発・製造が行なわれている光学系兵器。
中でも「ローヌ・バルト」に搭載されているカートリッジミサイルは、カートリッジ本体の機動性と追尾精度を向上させている特別製で、「ローヌ・バルト」本人から直接に製造要求が挙げられたものである。
キャリアミサイルが目標を捕捉（ほそく）してデータをメモリーすると、本体に格納されているカートリッジを分離。
3ないし5に分離されたカートリッジはそれぞれ進入角度を決定して接近し、目標手前で弾頭内に圧縮したプラズマ球を開放、重力カプセルに閉じ込めたプラズマ弾を拡散させ目標を包み込むように攻撃する。
また、メモリー機能により目標の追尾も可能。
光学兵器とはいえ重力カプセルを使用しているため、プラズマグレイン弾ほどの速度はないが、それでもプラズマ拡散後は一瞬で目標に到達するため、回避には熱練した技術と

並外れた反射神経が要求される。

●超高機動ミサイル（HHM）［↑P182］

耐横G剛性を大幅に向上させた高速自動追尾型ミサイルの総称。

本文中でピナが使用したミサイルはEMC737－Ⅲ型「ハイパースワロー」。

航空燃料のガラムンが燃焼する際に放出するλ（ラムダ）粒子を感知して追尾する最新自動追尾型高速AAM（空対空ミサイル）。

姿勢制御バランサーを内蔵し、これまで捕捉が困難だったFJ－R571「クレイジーキャット」の捻（ひね）り込みにも対処できるよう、EMC737－Ⅱ型に比べ耐横G構造が76％向上された。

非常に高価なミサイルであるが、命中精度も他のミサイルに比べ格段に高いため採用する部隊も多い。

【つ】

●通常の対応［↑P179］

宙軍指定領域は緊急時を除く一般船舶の進入を禁止しているため、エマージェンシーコールを示さずに進入する艦艇に対しては艦長判断による無警告の発砲が認められている。

しかし、実際には無警告発砲が行なわれる事は稀（まれ）であり、通常は警告を出して領域外へ退去させるか、拿（だ）捕（ほ）して基地へ連行するなどの処置をとる場合がほとんどである。

【て】

●データフォルダ［↑P73］

小型携帯記憶端末のこと。

コンピュータのネットワーク端子に接続することでメインフレームからダイレクトにデータを取り出すことができる。

また大容量の記憶装置が内蔵されており、データの持ち運びなどを行ない接続したコンピュータ上に表示させることもできる。

当然ながら、データには網膜パターンや音声パターンなどの複合認証によって強力なセキュリティがかけられ、本人以外がデータを覗（のぞ）くことは不可能となっている。

●データボックス［↑P47］

情報記録のための媒体を収めたケースの総称。

メインコンピュータの補助記憶装置やターミナルコンピュータの主記憶装置として使用される。

記憶容量はその用途にもよるが、ターミナル用途でデータフォルダの記憶容量の200～300倍、補助記憶用途で800～1200倍程度。

●低速貨物船［↑P152］

同一星域内での物資運搬を目的とした近距離貨物船。

大型船から小型船まで多種多様な船が存在するが、ジーンライナー船はその性格上存在しない。

●敵性オブジェクト［↑P205］
敵の存在を示す表示。

●デコード［↑P34］
圧縮や暗号化されたデータを通常データ（人が理解できるデータ）へ変換すること。
逆に圧縮や暗号化を行なうことを〝エンコード〟という。

●デザイン［↑P31］
物質や情報の構成、意匠。

●電子戦に対抗［↑P201］
「ギースシッピング」社のグループ企業「ギース・エレクトリック」社が開発した、意図的走査妨害を無効化するJCS（ジャミング・キャンセラー・システム）。
未だ試作段階であり今回が初の実戦投入であったが、性能的には充分実戦に耐えうる事をデータが証明した。

●電磁パチンコ［↑P14］
シェル射出用電磁カタパルトの俗称。ブリット（弾）を飛ばす事からこの名がついた。

【と】

●統合レーダー［↑P7］
通常宙域走査に加え重力場の状態や各種粒子の濃度検出なども行なえる多機能レーダー。
重力場の状態も走査できることから空間転移を行なう艦艇の走査なども行なえる。

●ドラッグ［↑P181］
脳の機能を積極的に亢進させる働きを持つ薬物の総称。
通常ドラッグは、気分を高揚させるアップ系と沈着作用のあるダウン系に大別される。
ピナの使用したドラッグは「リーク」と呼ばれるダウン系の覚醒剤。「ラーリスト」星系原産の多年草「ラグ」の実から作られる。
依存性がないことから軍隊での常用者も多いが、体質によっては強い幻覚作用を伴う場合もあり、部隊によっては使用を禁止しているところもある。

●トリガーガード［↑P194］
銃器などの誤射を防止するために、トリガー（引鉄）に設けられた軟質の覆い。
消耗品であり、戦闘終了後は新しいものと交換される。

【ね】

●（ジーンマイナー用の）ネットワークゲーム［↑P82］
ジーンマイナーのみの加入を認めている惑星間ネットワーク企業「ゼネラル・ネットワークス」が行なっているネットワークシミュレーショ

ンゲーム。

惑星誕生シミュレーション、エルサレム奪回シミュレーション、宇宙開拓シミュレーションなど様々なシミュレーションゲームが用意され、ある程度の条件を満たせば誰でも参加できる。

また、各ゲームの管理者は、参加しているネットワーカーの中からボランティア（若干の礼金は用意されている）で選ばれる。

【の】

●ノイマン型コンピュータ［↑P73］

中世紀頃に科学者「フォン・ノイマン」によって理論が確立された電子計算機。

光素子を組み込むことで第二世代を迎えたノイマン型コンピュータは、ラディック・フレームの第三世代、ローラ・サーキットの第四世代へと発展し、第五世代のモノポーラを経て現在に至っている。

しかし、基礎理論の古さからこれ以上の発展は難しく、現在はメインコンピュータをサポートするターミナルコンピュータとして用いられている。

●ノンキーの配列暗号［↑P152］

データを暗号化する際、データコードに一定の配列（キー配列）を持たせないようにしてエンコードされた暗号。

天才論理数学者のリッチ・ハフマン自らが名付けた「ハフマンのエンコード理論」と呼ばれるロジックを用いてエンコードする。

デコードには、事前に配布された第一鍵と、エンコードされたデータから抽出する第二鍵、および指定されたデータポイントからダウンロードする最終鍵が必要で、第一鍵の生成から最終鍵の生成までは完全ブラックボックス化された特殊ロジックで行なわれる為、現在、最も解読が困難な暗号と言われている。

【は】

●破砕限界［↑P204］

シェルの機体が耐えうる限界のこと。

可能機動領域の機動限界ラインと同義。

●ハッキング［↑P34］

公開、非公開にかかわらず特定の場所にある情報を独自の方法（非合法な方法も含む）で自分のものにすること。

●八本足のリフト［↑P25］

ナカジマ重工製コンテナ搬入ロボットの事。

元々は地上のベイ・フロント作業用に開発されたが、八本足ゆえのバランスの良さと小回りが利く点が評価され宙港でも採用された。

●派兵決議〔↑P23〕
レアメタルの宝庫である「ルーヴァドル」のレジスタンスを一掃するため、議会がジーンメジャー兵士の派兵を議決した法案。
世界政府にとって「ルーヴァドル」は決して手放すことのできない惑星であり、絶対に独立自治を認める訳にはいかなかった。
しかし、交戦規則の確立もままならないほどドロ沼化した現状に、やがて議会は派兵したジーンメジャー兵士の撤退を決定する。

●バランサー〔↑P194〕
姿勢制御システム。
装備の不均等などにより機体の姿勢（バランス）が崩れるのを防ぐシステム。
通常は内蔵バランサーで充分だが、高速戦闘や重兵装の場合には補助バランサーが装着される（非常時には切り離し可）。

●バルトカーゴサービス〔↑P92〕
「バルトライナー」社の子会社で、ライナー船の荷物の管理・運搬を主として行なう会社。
索敵（シェルブリット）要員は組織上、甲板要員となるため、実際の甲板員同様「バルトカーゴサービス」の所属となる。
ただし、索敵要員は危険度が格段に高いため、正社員雇用とはならず契約社員扱いとなる。

●バルトライナー社〔↑P7〕
「ローヌ・バルト」が役員を務めるジーンライナー系企業。多くの傘下企業を持ち、就航航路数で「ギースシッピング」社と勢力を二分する大企業。
最速クリッパー「ローヌ・バルト」を筆頭に多くの「ライナー一族」が宇宙のいたるところで就航している。
現在、会長職には「ローヌ・バルト」の母親「ニナ・バルト」が就任している。

●パンジャブ〔↑P177〕
ソブリン級大型戦列艦。
宇宙機甲艦隊所属の艦艇の中で最大規模を誇る弩級戦闘艦。
全長2874メートル。大型カーニハン推進機関6基を備え、光速の76％での通常巡航を可能としている。
装甲は4メートル厚の非結晶ガラム鋼をメインとした複合ハニカム3重構造とし、高い防弾能力を実現している。
兵装は1470センチ連装ブラスター48門、870センチ荷粒子振動砲62門、490センチ大型レーザー砲184門に加え、対艦機動ミサイルや対小型機動兵器用パルスレーザー1200基なども装備され、衛星軌道上からの地表砲撃も可能な宙軍

機甲艦隊の主軸。
また同艦内には宇宙艦隊司令部の指揮・発令所が設置されている。

●**半自立型の生命維持機能** ［↑P47］
通常、各ブロックの生命維持機能はメインコンピュータにより集中制御されているが、同時に各ブロックに設置された独立コンピュータが互いに隣接するブロックの監視も行なっている。
万一、メインコンピュータにトラブルが発生した場合でも、各ブロックに設置された独立コンピュータが生命維持機能を瞬時に引き継ぐ。
さらにはメインコンピュータのトラブル時に独立コンピュータが破損するレアトラブルに対しても、隣接ブロックの独立コンピュータが制御を引き継ぎ乗船クルーの生命維持を行なう設定となっている。

●**反政府ゲリラ** ［↑P154］
世界政府や自治政府に対し、宗教、思想、政策上などの理由から武力で対抗する勢力。
大抵の場合は圧倒的武力を誇る政府軍によって殆ど掃討されるが、こういった反対勢力の根は深く、新たに誕生するゲリラ兵士によって抗争が継続されてゆく。
こういったゲリラの根絶も地上軍の任務のひとつとなっている。

●**パンツのゴム** ［↑P142］
着艦用のフックを引っかけるために張られているワイヤーのこと。
シェルの着艦は高速で航行する船をかすめるように減速し、甲板上に張られている7本のワイヤーのいずれかにフックを引っかけて行なわれる。
その際、ワイヤーの張りが強いほど着艦が難しくなるため、初心者には弱めに張るのが基本である。

【ひ】

●**標準時間** ［↑P7］
地球時間を基準単位と定めた時間単位。
基準単位にはアカシ標準時間が適用されている。

【ふ】

●**ブースタ** ［↑P136］
加速器のこと。
史上最速を誇るシェルとはいえ搭載できる燃料には限りがあり、その活動時間も数十分と短い。
そのため初期運動のプールを目的として射出後の初期加速には補助ブースタを併用する。
ブースタはメインブースタ（ロケットモーター）と、切り離し自在の補助ブースタで構成される。電磁カタパルトからの射出直後は、メインブースタと併せて補助ブースタも点火され、一気に第二巡航速度まで加

速する。
その後、燃料のなくなった補助ブースタは切り離して爆砕され、宇宙の塵となる。

●武装クリッパー〔↑P7〕
クリッパー欄参照。

●フリゲート艦〔↑P179〕
高性能レーダーやジャミング・システムなど、哨戒や敵の攪乱を目的として建造された快速軍艦。
大規模な電子兵器を搭載するため兵装には重きをおかれておらず、艦隊戦でもフリゲート艦が直接作戦行動に加わる事は少ない。
艦隊の耳目に例えられる事が多い。

●フロー言語〔↑P8〕
数式のような解答を明記しない言語。
ジーンライナーとのコミュニケーションに不可欠であり、これを操るには特殊な才能が必要なため、一般的にはジーンメジャーがコミュニケーションを担当する。

●プロパガンダ映画〔↑P154〕
世界政府によって製作された戦争宣伝映画。
戦争を面白おかしく美化し、人々の戦意高揚や戦争への意識操作を目的として製作されている。

【へ】

●兵装選択〔↑P182〕
兵装のモード（ロック／単発／連射／自動射撃など）を切り替えるスイッチ。

●兵装ロックボルト〔↑P190〕
武器の誤作動等を防ぐため、兵装を使用不可にしておくための安全装置。
パイロット自らが解除操作を行なうのが通常であるが、リモートでのロックおよび解除も可能である。

●ベルタ・ギース〔↑P107〕
ジーンライナー船「ローヌ・バルト」と同級の武装クリッパー。女性。
「ギースシッピング」社に船籍を置き、ローヌ・バルトによって塗り替えられたスピード記録を奪回するため彼女と同じ航路に就航した。
だがいつも僅差でローヌ・バルトに敗れ、ギース一族からは「負け犬」の烙印をおされてしまう。
信用回復に躍起となった「ギースシッピング」社は、やがて「ローヌ・バルト」の航路妨害工作まで行なうようになり、彼女も否応なく巻き込まれてゆく。
しかし彼女自身は記録よりも純粋に「ローヌ・バルト」との競争を望んでいる。

●辺境自治政府〔↑P152〕
辺境の星系を統治するために世界

政府から統治権を与えられた独立政府機関。
管轄星系内には自治権が認められており、独立した自衛軍を有する。
独自貨幣の発行・流通も認可されており、世界政府上層部の承認がない限り、宙軍といえど干渉することはできない。

【ほ】

●ポート・ヴィアネイ 〔↑P151〕
惑星「ヴィアネイ」の衛星軌道上に位置するスペース・ポート（宙港）。
「ヴィアネイ」はいくつかの航路の中間点に位置することから補給港として利用されることが多い。
また多種多様な船が出入りするため違法船や条約違反の物資や動物を輸送する密輸業者も多く、宙軍による監視も他のポートに比べて格段に厳しい。

●砲塔制御ソフトウェア 〔↑P142〕
火器管制官ミスタ・キムが考案した、「ローヌ・バルト」に設置された12基の57ミリパルスビーム砲を自動制御するソフトウェア。
レーダーとシンクロして、設定されたシューティング・エリア内の障害物を自動捕捉(ほそく)して連射する。
あとで聞いた話では、その後いくつかの武装クリッパーで採用が決定されたらしい。

●ポート・クレア 〔↑P47〕
惑星「エル・クレア」の衛星軌道上に位置するスペース・ポート。
「バルトライナー」社のローヌ・バルト整備ドックもここに設置され、航行を終えたローヌ・バルトの整備・点検が行なわれている。
またポートに併設されているコロニーには、地上に降りない船員たちのために遊戯施設や娯楽場、酒場に娼館(しょうかん)まで完備する大歓楽街が形成され、ほとんどの船乗りたちは次の出港までをここで過ごす。
こことポート・リヴァプールを結ぶ航路は「ローヌ・バルト」の定期航路のひとつでもあり、現在のスピード記録も彼女が保持している。

●ポート・リヴァプール 〔↑P47〕
惑星「シャルヴォーク」にある第2スペース・ポート。
通常は惑星に一つの宙港が基本であるが、「シャルヴォーク」は質量の大きな惑星のため第3スペース・ポートまで存在する。
基本的には他のスペース・ポート同様、整備ドックや歓楽街、入管などの役所で構成されている。
また、ここにも「バルトライナー」社のローヌ・バルト整備ドックが設置され、船の整備や各種資材の搬入を行なえるようになっている。

【ま】

●丸い爆弾をつかんだ鷲（わし）［↑Ｐ153］

かつて陸軍にいたノーマが所属していた「サーヌバーグ」駐屯軍陸戦機甲部隊第26方面航空隊に配備されていたＡＫＫ75型対戦車攻撃機「フレアー」改の尾翼に描かれていたマーク。

部隊により色やデザインは多少異なるが、陸軍の対戦車攻撃部隊伝統のマークである。

【め】

●メジャー議会［↑Ｐ23］

議員数４８３名で構成される世界政府の中枢。

配下に様々な実行機関や統括省を持ち世界政府内でも強い発言力を持つ。

「平等」の建て前上、マイナー議会も存在するが、事実上、世界政府の実権を握っているのはこのメジャー議会である。

【よ】

●酔い［↑Ｐ181］

薬物（覚醒剤（かくせいざい））による幻覚や一時的な記憶の混乱のなかで、比較的軽微な症状をさす言葉。

覚醒した時に軽い不快感を伴う場合が多い。

【ら】

●ライナーメタリカ社［↑Ｐ94］

ジーンライナー船の装備一般を開発するライナー系企業。

気密服からライナー船の外装、調理機具に至るまで様々な装備がここで開発・製造されている。

また「バルトライナー」からの依頼により最初にシェルを開発、ロールアウトしたことから判るように、非公式ながら兵器産業にも手を染めている。

しかし、経営の上層部がすべてジーンライナー種であり、世界政府に対し強い発言権を持っていることから、世界政府上層部でも暗黙の事項となっている。

【り】

●リンク列機［↑Ｐ139］

後続機が先頭機のスレーブとなって制御下に入り列機となること。

先頭のシェルが後続のシェルとリンクを張ると、後続機はスレーブとなり先頭機の制御下に置かれる。

そのため後続機はシェルの操縦を行なう必要がなく索敵に専念できる。

当然、索敵状況は先頭機へも伝えられる。

シェル同士のコミュニケーション（リンク）は外部パネルライトによって行なわれるため、距離が離れているとリンクが行なえない。従ってリンク接続時は危険なほど接近する必要があり、熟練した腕が要求される。

【る】

●ルーティン［↑P210］

一連の処理・作業を行なうまとまった手順。または、その手順を繰り返し行なうこと。

【れ】

●冷凍された脊椎［↑P47］

エポルテートの原材料。

惑星「エアルグリーフ」で自然繁殖した「エアルバッファロー」（アメリカンバッファローの変種）の脊椎には、エポトフェルナミンと呼ばれる物質が含まれている（その理由は現在調査中）。

これを抽出して精製したものにジーンライナーから提供された遺伝子デザイン技術を応用して製造されるエポルテートは、不治の病とされていたナスク病（シナプスの働きが低下し脳内情報伝達機能が麻痺する奇病）に対し絶大な効果を発揮する。

このエポルテート製法・製造の特許を持つジーンメジャー系企業「ウィルズ&オルガ・メディカル」は、これにより巨万の富を獲得し、一躍巨大企業へと成長した。

●連絡船［↑P21］

宇宙船乗組員や乗客を乗せ、宙港とコロニーを往復する貨物艇の事。

【ろ】

●ローヌ・バルト［↑P7］

ジーンライナー船の少女。個体名。駿足で知られた母「ニナ・バルト」の血統を受け継いだ、「クイーン」の称号を持つ最速の武装クリッパー。

全長８５０メートルの「生きた」宇宙貨物船。

だが、その外観からは生命体と判別できる要素は何もない。

強いて言えば美しい流線型をした船体の上下に大きく伸びたヒレ状の突起物と、船体中央下部に対で存在する小さなヒレのようなものが巨大な外洋性魚類を連想させる程度である。

船体側面には十数メートルの大きな円形のものが数多く存在し、一見すると窓のようにも見えるが、これは輸送船としてのベイ、及びアクセスポイントとして機能する。

必要以上に多く存在しているのは「バルト一族」の外部デザイン傾向である。

中央下部に付いている一対の小さな（といっても１００メートル近くある）ヒレは武装クリッパーとしての船体武装であり、この中央にはレンズ口径３０００ミリのニューロン光線砲が1基装備され、挟み込んでいる2枚のヒレはシェルがマーカーポイントへ攻撃兵装コンテナを転送するシステムである。

また船体には障害物破壊用として12基のエルマー社製57ミリパルスビ

ーム砲を装備する。
他のジーンライナー船同様、船体前部上方に楕円(だえん)形のくぼみ（外部感情認識ポイント）が存在し、不思議な象形文字のようなパターンを浮かび上がらせている。
ここで彼女の感情や精神状態を表現しているのだが、こういった感情、意思表示ポイントは船内にはなく、船内クルーは見慣れたモニターや、表示されるユニコード（エンコード）関連の情報でしか彼女を知ることができない。
ジーンライナーの直接の意思表示は艦内各所、各部屋に必ずある黄色のパネルライトが彼女から意思をダイレクトに受けられるコミュニケーションポイントであるが、人間側からはよほどのことがない限りコンタクトは出来ない。
推進機関はプラズマ・ロケットモーターで、ヒレのような突起物を共鳴させてロケットモーターを加速させる。
また共鳴部から伸びる「フルレット・フォーン」は全長15キロを超え、その美しさは「魂を虜(とりこ)にする」とさえ言われている。
一般にはあまり知られていないが、フルレット・フォーンを伸ばしながらの高速航行時には、その清らかな流線型の船体は恐ろしいまでの美しさを持った外観へと変形する。
そのため船体内部は変形の為のデッドスペースが全船内容積の約20％を占めている。
乗船クルーの活動ブロックは船体頭部から後部にかけて伸びている背骨のような空間で、その中央部上下左右にコンテナベースが配置される。
その後方、人間の女性で言う子宮に当たる箇所(かしょ)には2機のシェルが格納されており、航路索敵要請（シェルブリット）に応じてリフトにより船体外殻部のオルゴンボックスへと移動されるようになっている。
シェル格納庫より後方はロケットモーター部となり、全制御と管制をローヌ・バルト自身が独立コントロールしているため、人間が立ち入る事はほとんどない。

●ロケットモーター［↑P12］
シェルの駆動推進システム。正式には「プラズマ・リンク・ロケットモーター」
足、肩、腰に装備され、その構成部分のほとんどが巨大なフィンで覆われており翼のような印象を見る者に与える。
またこのフィンは、出力状況や吹き出す方向によりその形状を変化させ、ロケットモーター静止状態では重力に任せて下に垂れる形となる。
このことからもシェルの外殻を構成している素材が通常の金属でないことが判る。
基本駆動原理はジーンライナー船のプラズマ・ロケットモーターと同

じで、推進時にはノズルを貝類の水管のように伸ばし、長いプラズマ炎を後方へ引きながら飛翔する。
　また、その強大な推進力は70トンを超えるシェルを瞬時に戦闘加速状態へと移行させることが可能で、その加速には時として強靭なシェルの機体ですら耐えられないこともある。
　ロケットモーターで発動されたエネルギーは機体各部へも供給され、シェルの駆動力としても使用される。
　ただし、ライナー船のようにエネルギーの自己供給システムを持たないため、そのモーター駆動時間には一定の限界がある。

●ロベスピエール、スターリンの時代［↑P83］
　ロベスピエール（仏）、スターリン（露）共に中世期の政治家。実権掌握と共に、政敵や反対派を次々と粛清。恐怖政治を敷いた事で後世に知られている。

【わ】

●ワイプ［↑P151］
　空間位相転移航行のこと。
　重力場を発生させて空間を歪曲させ、次元の壁を通り越えて目的地へ到達する航法。
　現座標と目的座標を、空間を歪曲させることにより隣接させて通り抜けることから、どんな遠距離も瞬時に移動できそうなイメージがあるが、実際は目標座標が遠いほど空間転移に消費されるエネルギーが増大（「ディッヒガルドの法則」と「マカシーの反作用」による）するため、空間移動距離とワイプ航行時間は比例する関係にある。
　SF小説などには以前から〝ワープ航法〟という名前で登場し夢の航法とされていたが、カーニハン機関の成功により実現した。

●惑星統治シミュレーションゲーム［↑P82］
　マイナー系惑星間ネットワーク企業「ゼネラル・ネットワークス」が主宰するシミュレーションゲームのひとつ。
　ジーンマイナーなら誰でも参加でき、参加者それぞれがIDを取得して有権者となり、立候補したり候補者を支援したりする。
　またゲームの進行はすべて参加者にまかされており、よほどのことがない限り管理者が介入することはない。

本書は小社から一九九九年九月に刊行された単行本を文庫化したものです。

シェルブリット I

ADEN ARABIE

幾原邦彦（いくはらくにひこ）　永野護（ながのまもる）

角川文庫 17188

平成二十三年十二月二十五日　初版発行

発行者―井上伸一郎

発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・編集（〇三）三二三八―八五五五
〒一〇二―八〇七八

発売元―株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・営業（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
http://www.kadokawa.co.jp

印刷所―旭印刷　製本所―BBC

装幀者―杉浦康平

ん 40-1　ISBN978-4-04-100061-8　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫ベストセラー

空の中　有川浩

二〇〇X年、謎の航空機事故が相次ぐ。調査のため高度二万メートルに飛んだ二人が出逢ったのは!?　有川浩が放つ〈自衛隊三部作〉、第二弾！

海の底　有川浩

四月。桜祭りでわく米軍横須賀基地を赤い巨大な甲殻類が襲った！　潜水艦へ逃げ込んだ自衛官と少年少女の運命は!?〈自衛隊三部作〉、第三弾!!

塩の街　有川浩

すべての本読みを熱狂させた有川浩のデビュー作!!「世界とか、救ってみたくない？」塩が埋め尽くす塩害の時代。その一言が男と少女に運命をもたらす。

クジラの彼　有川浩

ふたりの恋は、七つの海も超えていく。『空の中』『海の底』の番外編も収録した6つの恋。男前でかわいい彼女達の制服ラブコメシリーズ第一弾!!

あたしのマブイ見ませんでしたか　池上永一

沖縄の風習や伝承をモチーフに、現代文学と寓話を美しく融合させた、著者初の短篇集。みずみずしい感性が紡ぐ、切ない八つの物語。

レキオス　池上永一

西暦二千年。米軍から返還された沖縄の荒野に巨大な魔法陣が出現。伝説の地霊レキオスをめぐる激しい攻防と時空を超えて弾け飛ぶ壮大な物語！

やどかりとペットボトル　池上永一

自称「閑居な作家」の青春と日常を初めて開示した、抱腹絶倒、ときどき涙の破格エッセイ。知られざる沖縄ワールドがここにある!!

角川文庫ベストセラー

漂泊の街角　大沢在昌

ある教団から娘を連れ戻してほしい、というのが今回の依頼であった……。事件を通して人生を綴る佐久間公シリーズ、待望の第二弾。

烙印の森　大沢在昌

犯行後、必ず現場に現れるという殺人者〝フクロウ〟を追うカメラマンの凄絶なる戦い！　裏社会に生きる者たちを巧みに綴る傑作長編。

暗黒旅人　大沢在昌

人生に絶望し、死を選んだ男が、その死の直前、謎の老人から成功と引き替えに与えられた〝使命〟とは⁉　著者渾身の異色長編小説。

悪夢狩り　大沢在昌

米国が極秘に開発した恐るべき生物兵器『ナイトメア90』が、新種のドラッグとして日本の若者の手に⁈　牧原はひとり、追跡を開始するが……。

シャドウゲーム　大沢在昌

シンガーの優美は、事故死した恋人の遺品の中から「シャドウゲーム」という楽譜を発見した。優美は亡き恋人の足取りを追いはじめたが……。

天使の牙(上)(下)　大沢在昌

新型麻薬の元締を牛耳る独裁者の愛人が逃走し、その保護を任された女刑事ともども銃撃を受けた。そのとき奇跡は起こった！　冒険小説の極致！

冬の保安官　大沢在昌

異色のSFシリーズ「ローズ」、人気シリーズの役者たちがすれ違う「再会の街角」を含む九編を収録。大沢エッセンスが凝縮した、出色の短編集。

角川文庫ベストセラー

角川文庫ベストセラー

角川文庫ベストセラー

GOSICKsⅢ
—ゴシックエス・秋の花の思い出—
桜庭一樹
季節は秋。ヴィクトリカと一弥には、つかの間の安らかな日々が訪れる。名探偵コンビの絆は、静かに、ひそかに深まりゆく——珠玉の外伝連作集。

GOSICKsⅣ
—ゴシックエス・冬のサクリファイス—
桜庭一樹
学園イベント〝リビング・チェス大会〟の準備に騒がしい冬。だがヴィクトリカはいつも通り読書にいそしみ、一弥と語らい——〝秘密〟を解き明かす。

ネガティブハッピー・チェーンソーエッヂ
滝本竜彦
高校生・山本が出会ったセーラー服の美少女・絵理。彼女が夜な夜な戦うのは、チェーンソーを振り回す不死身の男だった。滝本竜彦デビュー作！

NHKにようこそ！
滝本竜彦
俺が大学を中退したのも、無職なのも、ひきこもりなのも、すべて悪の組織NHKの仕業なのだ！驚愕のノンストップひきこもりアクション小説！

超人計画
滝本竜彦
ダメ人間ロードを突っ走る自分はこのままでよいのか？　いや、己を変えるには超人になるしかない！　脳内彼女レイと手を取り進め超人への道!!

日本以外全部沈没
パニック短篇集
筒井康隆
地殻の大変動で日本列島を除く陸地が海没、押し寄せた世界のセレブに媚びを売られ、日本と日本人は……。痛烈なアイロニーで抉る国家の姿。

如菩薩団
ピカレスク短篇集
筒井康隆
上品で知的なマダムの極悪非道、神も仏もない神仏の闘争がもたらす無慈悲、老人たちが繰り広げる破廉恥な狂宴。最凶の悪を描く過激な作品群。

角川文庫ベストセラー

角川文庫ベストセラー

角川文庫ベストセラー